

昭和56年8月23日

土石流急襲

—— 十五号台風・忘れ得ぬ災害の記録 ——

須坂市仁礼町

須坂で土石流、8人死

家を直撃、不明も4人

法

信濃毎日

生命の恐怖

須坂

止められず

建設20年、能力低下か
県下各地に同様個所

新興団地が水に
列車運休 道路各

警戒中、襲われる
炊き出しの主婦、老人ら

台風15号 県下で被害が続出

読賣新聞

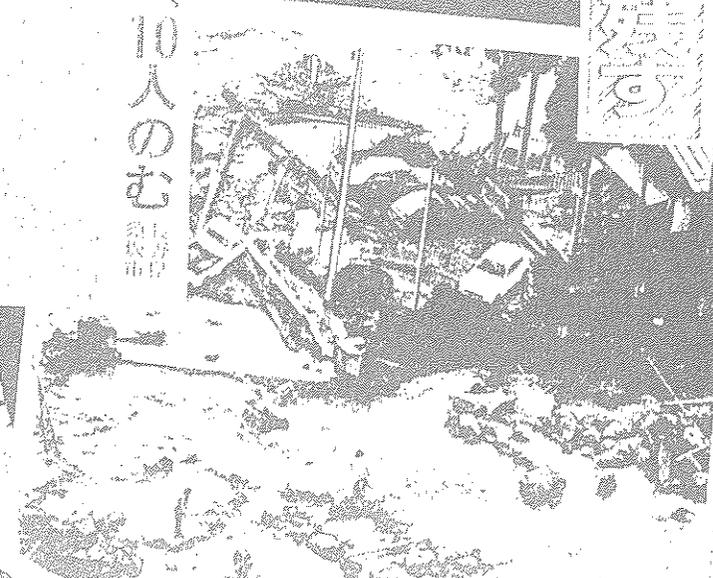
THE YOMIURI SHIMBUN
8月24日 月曜日
昭和56年(1981年)

未明の濁流、一瞬の地獄絵

読賣新聞社
〒100 東京都千代田区西千代田1-3-1
電話(03)3251-1111
電報掛(03)3251-1112

鉄砲水、10人のむ

大雨で広域



長野で鉄砲水、民家流失
4人死亡
4人不明

朝日新聞

被害

毎日新聞

縦断台風

おしり
おしり
おしり

昭和56年8月23日

土石流急襲

—— 十五号台風・忘れ得ぬ災害の記録 ——

S 56.8.23 午前6時19分
高津場和平新一宅流失
時使用時計ストップ



大惨事の一瞬 6時19分



発刊にあたって

仁礼町区長 中村 介夫

今日、社会文化の進歩は日進月歩著しいものがあります。

しかしながら、天災大自然の猛威にはどうすることもできず、あの大惨事が一瞬にして起こったのです。

昭和五十六年八月二十三日未明の台風十五号の襲来により、仁礼地区は大規模な土石流に見舞われ、有史以来の大災害を受けました。

十名の尊い生命が奪われ、家屋の流失損壊五十余戸、田畑の流失十二町歩余り、まことに悔んでも悔み切れないう出来事でした。

その大惨事から二年余を過ぎ、人々は悲しみから立ち上がり、地域は急速に復旧しつつあります。

「あの悲しみを再び繰り返すまい」この願いを込めて台風十五号災害の生々しい体験や写真を一冊にまとめ、長く後世に伝えるべく、ここに記録誌として発刊した次第であります。

思えば八月二十三日は、昨夜来の風雨が次第に増し豪雨となって、宇原川源流のロットの沢鷹落場付近の崩壊が原因で土石流となり、兩岸の立木、巨岩岩石を巻き込んで一気に流れ下り、西原地区を始め、川沿いの家屋、人命をひと呑みにして氾濫、あの未曾有の大惨事となったのです。

全く静かなわたしたちの村に、このような大災害が起こるなどだれしも予想しなかったこと。

一朝にして巨岩流木が山積し、変わり果てた悲惨な現状を目のあたりにして、自然の力のすさまじさを痛切に感じ、痛痕極まりなき限りでありました。

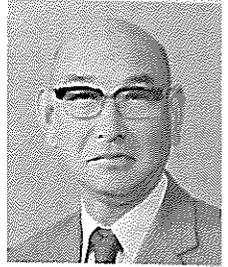
今後、二度とこのようなことのないことを心から念じてやみません。

災害復旧事業につきましても、市長さんを始め行政関係機関のみなさまのご尽力により、即刻激甚災害の指定を受け、今日まで巨額の事業費を投入し早期復旧完成を進めていただき、誠に感謝にたえません。

この記録誌発刊に際して、改めて亡くなられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げ、被災されたみなさまにお見舞いと激励を申し上げます。

なお、災害に際しましては、各方面から多大な義援金や救援物資、心あたたまるご援助をいただきましたことに対して、心から厚くお礼申し上げます。

終りに、本誌発刊に際しまして、貴重な体験記録や写真をお寄せくださったみなさまに心からお礼申し上げます、編さんに当たられた編集委員のみなさまのご苦勞をねぎらい、感謝を申し上げます、発刊の言葉といたします。



須坂の復興

須坂市長 山際 順

忘れようとしても忘れることができない昭和五十六年八月二十三日、突如として仁礼地区を襲った土石流によって、阿鼻叫喚の巷と化したあの悪夢のような光景は、私の脳裏に深く焼きつき、生涯決して消え去ることはないものとなったのであります。

八月十五日に太平洋上に発生した弱い熱帯低気圧は、台風十五号となって北上を続け、日本に到達したときは大型で並みの強さの台風が発達していったのです。台風の進路からみて長野県東北部は雨台風の様相となり、本日も峰の原の観測では、八月二十二日から二十三日にかけて二百七ミリという驚異的な集中豪雨となったのであります。

このため、市内を流れるすべての河川が符節を合わせたように氾濫し、人命を奪い、負傷者を出し、住家、道路、橋梁、河川、農地、農業施設、林道、水道施設、その他公共施設等に総額九十一億余万円という未曾有の大被害をもたらしたのであります。

ことに宇原川上流ロットの沢で発生した大規模な山崩れは、土石流となって巨岩や立木をまき込み、宇原川を激下し、仁礼地区を直撃、一瞬にして十人もの尊い人命を奪い去る大惨事となったことは、まことに痛根の極みであります。

私は、この大災害を一刻も早く復旧し、被災されたみなさんが悲しみをのりこえて勇氣と希望をもって立ちあがっていただくために、市民のみなさん及び関係機関の御協力をいただき、不眠不休の応急活動を行うとともに、国・県の強力な財政と技術の援助を得るために、幾度も幾度も国・県へ出向き市の窮地を訴え続けました。その結果、高率補助となる激甚災害の指定を受けることができ、これによって復旧事業が順調に進捗し、昭和五十八年度現在で五十八億七千余万円の巨費を投じ、一部砂防ダム建設事業を除いてほぼ復旧事業が完了する運びとなったのであります。

また、二度とあのような惨禍を繰り返さないために、忘れることのできない八月二十三日を「須坂市民防災の日」と定め、市民の自主防災意識の高揚と防災知識の普及、災害発生危険箇所点検や各種防災訓練の実施など、全市民あげて取り組むことといたしました。

このたび、仁礼町のみなさんの手によって、忌まわしいあの土石流災害の体験と勇氣ある闘いの記録を永く後世に伝えるため、本誌が刊行されますことは、歴史的にもまことに意義深く、刊行に御尽力くださいましたみなさんの御労苦に対し、深甚なる敬意を表する次第であります。

この災害に対し、市民各位並びに関係機関等多くのみなさんからお寄せいただきました御指導、御協力、御援助に対し心から感謝を申し上げますとともに、犠牲になられた方々の御冥福と被災された方々の一日も早い再起をお祈り申し上げごあいさつといたします。

昭和五十八年十一月二十五日

八月二十三日之曉

豪雨破空襲郷土
 泥流溢越宇原川
 土石倒木人家吞
 橋梁桜樹宇宙連
 青々稲草大若下
 平穩集落無眼前
 不知友人近隣死
 嗚呼涙今流青顔

宇原川土石流惨状を詠む
 篠塚久吾氏 作

目次

□ 発刊にあたって ————— 仁礼町区長 中村 介夫 …… 1
 □ 発刊によせて ————— 須坂市長 山際 順 …… 2

□ 山が襲ってきたへ空から見た被災地区 …… 5

□ 眼で見る災害の記録〈写真集〉 …… 13

□ 被災者は語る I …… 66

九死に一生を得て ————— 西原 篠塚みどり …… 13

その死を決してむだにはしない ————— 西原 田中 成造 …… 18

空白のときを経て ————— 西原 田中 政宏 …… 26

雨中の救助活動 ————— 西原 田中美洋子 …… 27

泥流に追われて ————— 宇原 篠塚 莊蔵 …… 30

必死の避難 ————— 浅間塚 山岸 総子 …… 33

八月二十三日の朝 ————— 瀬之脇 中島 澄男 …… 36

家が埋まっていく ————— 瀬之脇 中島 孝一 …… 37

濁流からの脱出 ————— 瀬之脇 若林さか枝 …… 39

悪夢の一瞬 ————— 浅間塚 若林しず子 …… 42

鉄砲水 ————— 浅間塚 若林輝男 …… 44

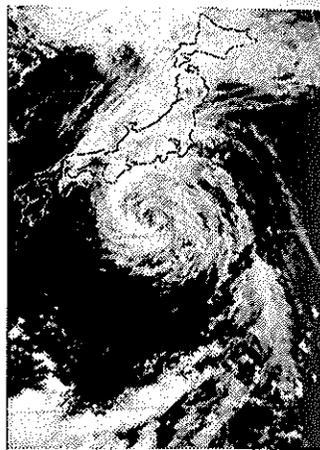
恐ろしい自然 ————— 浅間塚 和平 和子 …… 45

恐怖の朝 ————— 仙仁 杉原千代子 …… 45

□ 座談会 // そのとき土石流は…… //

1月		0.5回
2		0.3
3		0.5
4		0.8
5		1.1
6		1.7
7		4.0
8		5.4
9		5.0
10		3.9
11		2.5
12		1.2

台風の月別平均発生数
(1941年~'82年のデータ)



信濃毎日新聞より

56年8月22日の台風15号

<ul style="list-style-type: none"> □ 考察 宇原川土石流災害の原因 99 □ 記念碑建立 105 □ あとがき 107 	<ul style="list-style-type: none"> 1 被害状況 84 2 復旧事業の状況 86 	<ul style="list-style-type: none"> よみがえる里〈写真集〉 68 土石流のつめ跡〈被災地図〉 82 被害と復旧の状況 82 	<ul style="list-style-type: none"> □ 復旧 67 □ 合同葬 67 	<ul style="list-style-type: none"> □ 被災者は語るII 山羊は知っていた 常盤 河合 信彦 52 危機一髪 中村 富沢 準一 56 家が流されるぞ 関谷 山岸 嘉幸 57 濁流に囲まれて 新田 田中 貞男 59 恐ろしい土石流 関谷 中山 祝次 61 思ってもみなかった出来事 関谷 田辺寿美夫 62 土石流災害と仁礼区の対応 関谷 山岸 善澄 65 	<ul style="list-style-type: none"> 西原・瀬之脇地区の状況 47 大門橋付近の状況 48 新田・関谷地区の状況 49
--	---	---	---	---	--

空から見た被災地区

8月23日朝
山が襲ってきた

一瞬にして、尊い人命を奪い、住家をのみ込んだ土石流跡
(以下、八月二十四日「県警ヘリ」で撮影)

山肌を削り、巨石・立木を巻き込んで、流下した土石流のつめ跡
(石小屋・山の神付近)



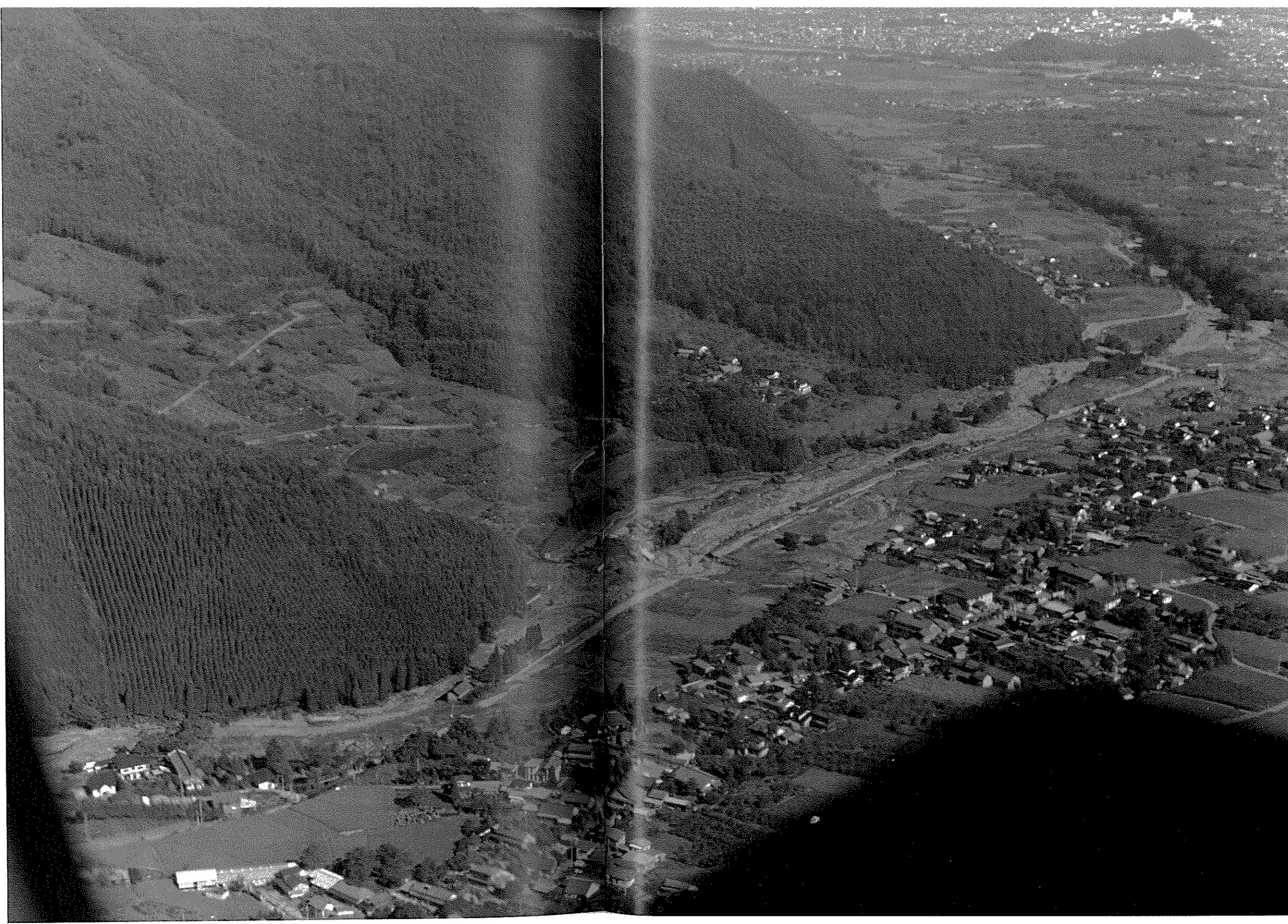
土石流は山林、田畑をのみ込んで西原地区へ（横沢付近）





土石流は瀬之脇橋を流失させたのち終結するが、下流は洪水が襲う

大量の流木が大門橋に押し詰まり、兩岸の堤防を決壊させ、洪水は新田・関谷を襲う



眼で見ると 災害の記録



土石流のつめ跡、発生地点から6kmを一挙に流下する

□ 被災者は語る I

九死に一生を得て

西原 篠塚 みどり

おばあちゃんのことば

昭和五十六年八月二十二日土曜
日夜九時半。研修会場内で聞こえる雨の音は、相当に激しいものであった。

「雨台風ならいいですね」そんな声を聞きながら帰途についた。

自動車の窓を打つ雨は、ばけつでおしあけるようだった。

「風よりも雨台風の方がいい」多くの人が願うことだけに、わたしの気持ちは重かった。

西原に嫁いだ当時、下のおばちゃん（被災で亡くなられた田中れんさん）は、「ひとさんは雨台風の方がいいというが、河原に住んでいれば心配は絶えねでしなア。台風の時期は米びつを空にしねようにしときないや」といつてくれた。

そのときは、親切なおばちゃんのことばはピンとこなかったが、

昭和三十四年の台風の時、やはり大雨ですり半が鳴った。

中島国夫さんが、「上の方で堤防が切れたから早く避難したいよ」と、とんできてくれた。

乳飲み児を毛布にくるんで、急いで土手の上段にかけ上った。

幸い水は家の中までではこなかったが、前の道路は河原のように荒れ、田畑は流失した。

それから、三年続きの大雨があり心配が絶えず、その度におばちゃんと、「雨台風にならないければいいね」とささやき合ったものもある。

白潜水地籍にダムが入り、河原にもしつかりとした堤防が築かれた。堤防添いに植えられた桜も見事に咲くようになり、美しい山なみと清らかな水。静かな風物の中で安心して暮らしていた。

それなのに、だれも見聞きし



石造りの黒門はこなごな、
木造りの黒門が下流で打ち
上げられていた



黒門から下流の惨状、林道は跡形もない。

「行ってくるから頼むね」
「兄ちゃん、ひどい雨に雨具着て行かなければだめでしょ」

雨中の出動

「こんなに降っているのに、よく眠っていられるな」という声で目を覚ました。二時二十分であった。ゴットン、ゴットン大きな石の流れる音。

「子供たちが小さかったころはよくこんな音がしたっけね」といながら、上流にはダムができ堤防もあるのだから心配はないと思いつつ、昼間の疲れも出てうとうとしていた。

何回か様子を見に家を出入りしていた主人が、「上へ行って水をはずしてくる」と身仕度をはじめた。わたしも急に胸さわぎがして仕度にかかる。

電話が鳴った。「消防かな」といながら、「ハイッ」と受話器を取る。受話器を置くか置かないうちに、長男がハッピをかかえて出てきた。ふだん寝起きの悪い家の人たちが小走りながら身づくろいをしていた。

「雨具を渡すとたんだのであるのを、もどかしくほどこきながら、めんどくせえな、ハッピ着てから出すなんて、小言をいいながら着たばかりのハッピを脱ぎ、雨具を着た上にハッピを着なおし、「頼むね」と帽子をかぶりながら、雨の中に消えて行った。

そんな動作を、わたしは「自分ながらに考えて着て行くものだ」と、何とはなしにほのほのとした思いで見送った。

これがわが子の見納めになるとは知るよしもなく。

すさまじい二男の叫び

だれもいなくなった家の中で、何から手を付けてよいものか途方にくれていた。

下のおばちゃんはどうしているかしら。電話をする。

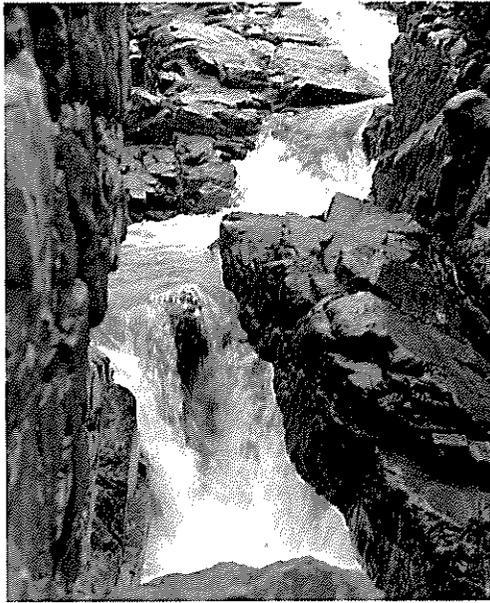
「もしもし」、「ハァーイ」いつもの憂いのない優しい声だった。

「いま、消防が出たよ」

「あっそうかな、それじゃ吹き



金山付近、屈曲部は40 mも上まで削り取られている



金山の河床は
青色の基岩が露出した

出しをしやんしょなア」

早口に話している姿が手に取るようにうかがわれた。

わたしは、せめて一番大切な物だけでもまともにおこうと思った。

「姉さん、手伝いに来たよ」本家の保夫ちゃんである。「あゝ頼む」

縁側のガラス戸越しに外を見ると、水がまるで魚のうろこのようにチラチラと光って見えた。

大川から道に水が上ったのかしらと思いきよく見るとそうでもない。

しかし、かなりの雨と風が吹いていた。

下の竹治郎さんらしき人が下流の方に向けて出て行かれる。

「そうだ、本家で来てくれてい

る間に、宇原橋が落ちたらどうしよう」考えただけで胸が締めつけられる思いだった。

家の裏で草かきをがりがりやって水を防いでいる二男に、「早く兄ちゃんに家へ帰ってもらっておくれ」とがなり、いつの間にか仏壇の前に座っていた。

ローソクをともし、線香をたい

てから、大事なもののだけでもうわ

段の道路まで運んでおこうと、外

を見る余裕もなく玄関に出た。

「ぐわあちゃん／＼があちゃん／＼」

何とも言葉にならない叫び声を上げ、すさまじい形相で二男が飛び込んできた。

いきなり下敷きに

戸は二十センチほど閉め残してあった。「しっかり閉めて」言おうとしたが声にはならなかった。

水が戸口いっぱいに見え、すき間からなだれ込んできた。

えたいの知れない水量、重い水、早い回転の水車にでもあおられ、流されていくような錯覚さえ起った。

「死ななければならぬのか、こんなに簡単に。だれにもわからずに、別れも告げずに」こんな

思いが断片的に、いなくすまのように脳裏を駆けめぐった。

突然二男の声。「あちゃん、だいじょうぶかい」、「だいじょうぶだよ、がんばっていきこうね」二、

三回叫んだように思う。

「もうだめだ！だれか助けてくれ、ギャー／＼」うめき声が聞こえ、あとは物音ひとつ聞こえなく



一之瀬ダム
の袖コンクリートは、
土石流の衝撃でふっ飛び、
西原まで流れついていた



一之瀬ダム左岸の小高い段丘をのり越えて林地は河原と化してしまっ

なった。

いくら呼んでも返事がない。もう息が切れてしまったのかも知れない。

じりじり迫ってくる足の痛み。「息さえできたら我慢しなければ」自分にいい聞かせて耐えていた。

それにしても、どこでどうなっているんだろう。「そうだ、草のように声を出して叫んでみよう」

大きな声を持っている自分に付き、ありったけの声を振り絞って叫んだ。

「どこだあー」、あっ父ちゃんの声だ。手さぐりで物をさぐると顔の上に戸板らしきものが乗っている。ドンドンとたたいて、やっと捜してもらったことができた。

みどりさんは重てえ

「早く章を出して人工呼吸をしてやって。死んでも知れない」

「よし待ってろ」

「足がはさまって全々だめだ」五、六人の交す声が聞こえる。わたしと前合わせに重なって倒れている二男の背中を、叩いたり

さすったりしながら、夢中で名前を呼び続けた。

だれかが、「章は自力で出たからだいじょうぶ」と知らせられて、全身の力ががっくりと抜けたよう気がした。

「待ってろ、すぐ出してやるからな」とわたしにいうものの、左半分と下半身が埋まっているので抜けようにも抜けない。柱を変わるがわる抜こうとしても微動だにしない。のこぎりでひくこともできない。

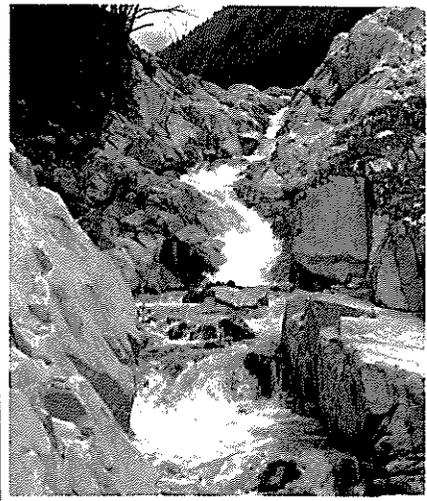
わたしも、浮いている右手で必死でごみを取ってみた。玄関前にあった十五尺のとの木の枝が体にかぶさり、たみがべったり乗っかっている。一枚のたたみを五、六人がかりでやっと取り除いてももらうことができた。

担い出してもらったとき、「みどりさんは重てえからなあ」安心した笑い声を聞いた。

西原の人たち、隣部落の人たちの顔々であった。

「助かったのだ。みなさんありがとう」声にはならなかった。

急こう配の足場の悪い所を運ば



一之瀬橋上流、生い茂った山が削られ、滝が出現する



金毘羅付近には約100個の巨大石群が集積され、造成地は跡形もない

れて行くような感じだった。竹やぶらしく、四、五本見えた。しかしどこあたりなのか、見当がつかなかった。

突然、消防のラッパが鳴り響き異状事態を直感したが、すでに頭はもうろうとしていた。

救急車でふと目を開けると、まっ黒になった女の子が、がたがた震えていた。「だれ?」、「のり子」近所のお嫁さんなのに、その姿さえわからないほど汚れていた。

ベットの上で

御札はどうしたはずみか、下半身が埋まっていたときに胸に張り付いていたのである。

「ありがとうございます」わたしは思わずつぶやいていた。「七時二十分になりますよ」隣りのベットの人が教えてくれた。

全身が痛い。息が苦しい。その中で、今日の出来事が脳裏に焼きついて胸をかきむしるのであった。

玄関からあわただしく出て行った長男の姿。異様な絶叫を上げて飛び込んできた二男。そのうしろ

から高さもわからなく、怒とうのように迫ってきた水。水は戸を押し倒しなだれ込んできた。

五十メートルも流されたのだから。運び込まれたのはどこだろう。ただ、美代子ちゃんの声、ふきちゃん、重一さんの声があり、たつ子さんの家で、砂利が重たく張り付いている髪を流してもらったのが記憶にある。

病院へ運び込まれて数時間後、はじめて十五号台風のおそろしさを知らされた。

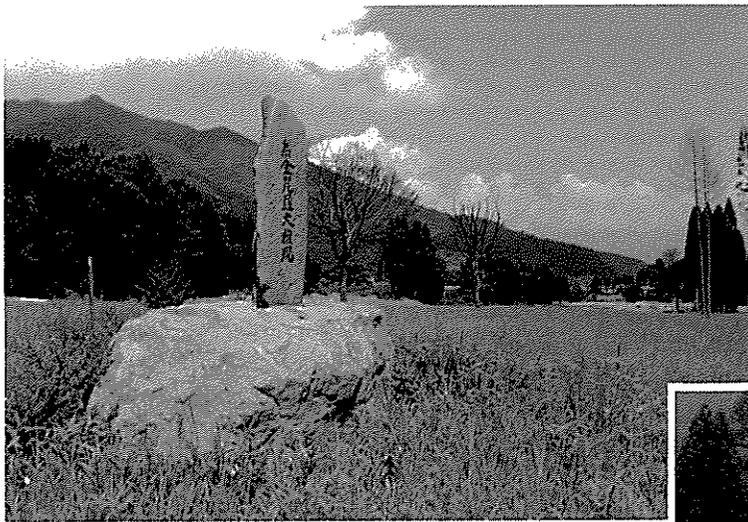
土石流で家もろとも百メートルぐらい流され、全壊したこと。家財道具もすべて流失。長男が行方不明であることなど……

何を失ってもいい、せめて、せめて長男が無事でいてほしい。ただひたすら祈り続けた。

あゝわが子よ

災害から一週間目の八月三十日夕刻、市長さんを先頭に消防団の方々に抱きかかえられてきた、姿わりはてたわが子に對面。

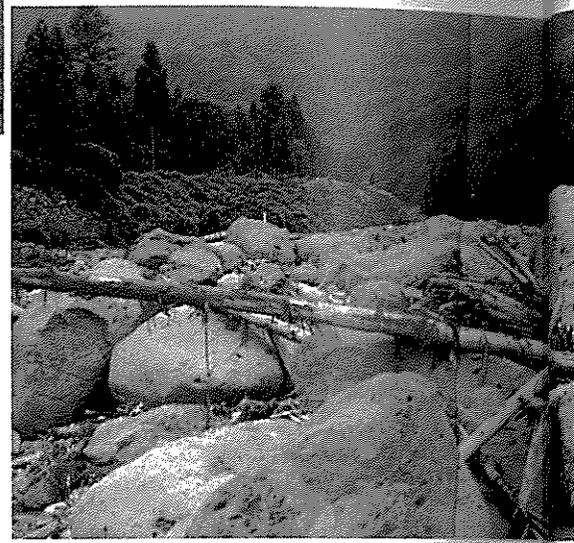
数かずの苦しみを越え、五十余年を生きてなおこのような苦悩に



復元された、金毘羅大権現



流失した金毘羅さんの台石



どうして合わなければならないのか。

これほどまでに人生の無情はあるのだろうか。怒りのはけ口もなく、涙はつきなかった。

それにつけても、あの流木と土石のすさまじい現場から、よくぞ捜してくださいました。

対策本部、消防団、地域の方々などが、炎天下を日曜日は七百人以上も捜索を続けてくださっていると病院で聞き、ただ感涙するばかりだった。

◇ ◇ ◇

被災に至った後は県・市各方面から、生活立てなおしに心を砕いて万全を尽していただきました。また、多くの団体機関、県内外

その死を

決してむだにはしない

西原 田中成造

その前夜

十五号台風のニュースを最初に耳にしたのは、二十二日の朝、トラックのラジオを聞いていたときでした。

のみなさまから義援金品をいただき、励ましの言葉をいただき、生き、活への勇気が湧いてまいりました。

心から厚くお礼申し上げます。

このうえは、身心とも健康になり、一家の再建を計ることこそご恩の一万分の一にもなるうかと、ひるむ心にむち打っております。

災害復旧は、目を見張るほどの急ピッチで進められています。

完成の暁には、被災地もすっかり生まれ変わった姿となり、歳月が悲しみをもちやしてくれることでしょう。

しかし、この度受けたご恩は生涯忘れれることなく、長い長い目でお返ししたいと念じております。

この日の朝、わたしは飯田まで荷物運ぶため、六時に家を出ました。中央高速道を諏訪インターから入り、やれやれと思いつながらラジオを聞いていますと、台

土石流は護岸も取入口も、破壊した（西原上部地区）



復旧された同地区

風は各地に多量の雨を降らせながら、しだいに長野県へ近づいていくとのこと。前方の空は黒い雲が不気味に広がり、いまにも降り出しそうな気配の中を走りました。

「参ったなあ、飯田に着くまで降らなければよいが。でも須坂はわりあい台風の被害は少ないほうだから」などと、考えながら行くうちに、いきなり大粒の雨が降り出し、飯田に着いたときは本降りです、全身ずぶぬれになって荷物を降ろしました。

帰りの道中もずっと断続的な強い雨で、須坂へ着いたときはヘトヘトでした。

八時ごろ帰宅すると、妻はわたしの食事の仕度をしながら、待ちかねていたように今日あった出来事を話し出しました。

どこの家にもあるようなちよっとしたことですが、義母と妻とで交互に話しかけてくるのを聞いているうちに、仕事の疲れも手伝わてか、不きげんになってくる自分をおさえられませんでした。

むしゃくしゃした気分で水割りをはぐ飲みしていると、妻のすぐ

上の姉から電話があり、姉妹で例の一件をくり返し話し、しまいは姉の説明のしかたがおもしろいと、涙が出るほど腹を抱えて大笑いをして、わたしにもかわれというのです。

わたしはばかすぎて、もう怒る気も吹っこんでしまいました。

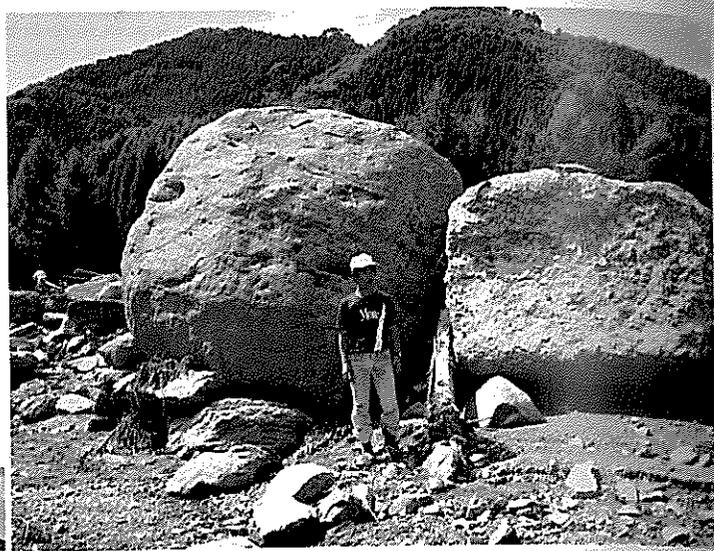
ふたりの電話は延々と続き、やがて、「あすは日曜日だし、いまから出かけてこないか」、「そっちら来ればいい」、「こんなやりとりになって、「今から広田へ行くか」というので、時計を見るともう一時近くになっていました。

それに、外はかなり激しい雨でした。結局今日はこちらまでと電話を切り、よほどおかしかったのかあらためて最初から細かに説明するのを、わたしは「うん、うん」と聞いていました。

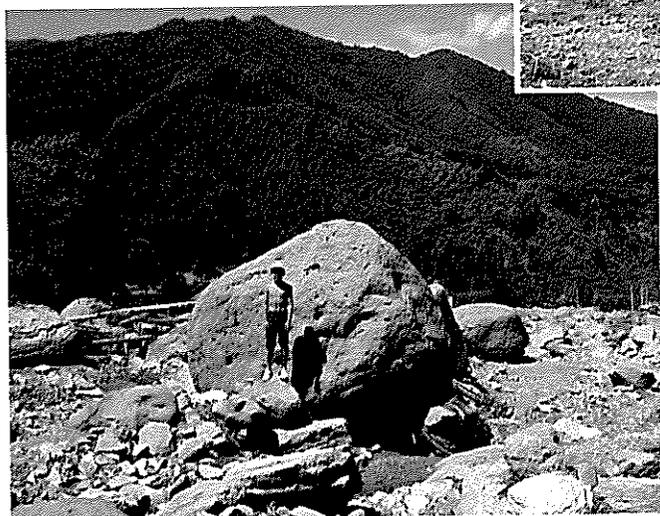
いつもはすぐ眠い眠いと十時ごろには床に入る人が、この夜は一時半ごろまで起きていました。

戦りつ朝

彼女が休んでからも、妙に頭が冴えていて、わたしは二時半ごろ



約20トンもある巨石群が、
土石流となって直撃した
(右はコンクリート塊)



まで飲んでいました。テレビの深夜放送も終り、床に入ろうとしたころは風もたいぶ強くなり、家のすぐ横の水路を石が音を立てて流れていました。

なかなか寝つかれないのに、妻は三人の子どもも真ん中でスー・寝息を立てていました。

そのうちにわたしも眠ったのでしよう。あまりの風雨と、石が流れる音で目覚めました。

何時ごろか、カーテンの向うに夜明けの気配を感じました。

妻と子どもは気持よさそうに眠り続けています。

外の様子は荒れ狂っているといった状態で、ビュービュー、ザーザー、ゴロゴロとものすごくかっただのですが、いま思うと不思議なほど安心して再び眠りにつきました。突然激しく体を揺すぶられ、目が覚めました。妻が「成ちゃん起きてよ。上の家(田中ふみさん宅)が流されそうなのよ」と叫んでいました。

とび起きると、女もののカッパが用意してありました。バジャマの上から着て、長靴を

はき、夢中で外に出ました。でも行ってみると、庭先にくらから水が入っている程度でした。

百メートルほど上流の篠塚義太郎さんの近くでは、男衆が七、八人水防作業をしていました。

消防のハッピー姿も二、三人心に働いていました。

やがてわたしもそこまで行き、宇原川を見ると、水かさは堤防の上すれすれまで増えており、石がぶつかり合い不気味な音を立てて流れていました。

正直なところ、わたしは始めて体験する宇原川の増水を見て「怖いな」と感じました。

でも、この土地に生まれ育った人たちは、「こんなときは、いつでもこうして来たんだよ」というように、ごく自然に朝のあいさつを交わしながら、作業を続けているのです。

気がつくくと、わたしは何の道具も持たずに来ていました。あわて取りに戻る途中、西原公会堂の前で妻がわたしを呼びとめました。「上の家の二人の子どもをうちへつれて行っておこう」というの



巨石群、流木が民家や田畑を襲った西原地区

です。

わたしは弟をおんぶし、妻はその姉の手を引いて、激しい雨の中を無言で家まで走りました。

まさか、これが妻との最後の別れになるうとは―。

スコップを持って現場に戻ったころ、妻はすでに上の家に行っていたのか、それともわたしより後から行ったのか、そのところが今も思い出せません。

現場では、南京袋に土砂を詰め込む人、その土のうを流されないよう押さえる人、みんなひざまでつかる濁流の中で、無言でてきばきと一連の作業を続けていました。十二、三人の人たちが、ここで

作業をしていたと記憶しています。その中には、犠牲になられた田中貞士さんの、組幹事として先頭に立って働く姿もありました。

しかし、だれ一人数分後に襲いかかったあの出来ごとを、予測するとか、警戒するという様子はありませんでした。

ただ黙々と一心に水を防いでいました。

いやな予感

「あいつ」は、まったく突然にとても信じられない姿でやって来たのです。

だれかが大声で叫んだのか、それともあまりの大音響に目を上げて気づいたものか、瞬時に山が迫って来ました。

それは、山が動いて来たかのようなものではないほど、大きく恐ろしいものでした。

巨岩がその山の上で、ピンポン玉がはじけるようにとび上がり、おとなのひとかかえもある杉の大木が、割箸を折るように連続的になぎ倒され、襲いかかって来たのです。

水防作業をしていた場所から直線にして七、八十メートル離れた高台まで、どう走ったら助かるだろうと無我夢中でした。

田中竹治郎さんの家の横まで来たとき、大きな物の陰にかくれれば大丈夫と一瞬考えた気がしますが、同時に、家よりも高い土石流

が、すぐそこまで迫って来たのが目に入りました。

あの急なかけをどう登ったのか、



復旧なった西原地区

がけ上の道路とガードレールの間
からはい上がろうと首まで入れた
ぎりました。

とき、竹治郎さんの家が大きく持
ち上がった、そのまま運び去られ

必死の救助

いちもくさんに家まで走り、玄

ていき、宙ぶらりんのわたしの足
もとを、ごうごうと水が流れてい
くのを感じました。

関の戸を開けると、義祖母が驚い
たように見返し、家の中では五人
の子どもがはしゃぎまわっていま
した。

わたしより先に逃げのびた七、

「お母ちゃん来てる？」こわご

八人の人たちも、ただ立ちつくし
ているだけで、三メートルほどの
ところで首だけ突っ込んでぶらさ

わ聞くと、「まだ来ないよ」と子ど
もたち。

がっているわたしを引き上げるの
もおぼつかない様子でした。

あわててもう一度とび出しまし
た。

何とかがけにひっついてはいた
ものの、自力ではい上がろうにも
手足に全く力が入らず、「このまま
落ちて流されるのかなあ」と、人
ごとのように考えていました。

すると、火の見やぐらの方から
義父が、左手で頭をかかえ、右手
を左右に大きく振って走って来ま
した。

思い出したように、「助けてく
れ！」と叫ぶと、そこにいた人た
ちが駆け寄って引っ張り上げてく
れました。

「だめだ、だめだ、母ちゃんも
照美も流されちゃった！」と泣き
ながら駆け寄り、わたしの手を強
く握りしめました。

怖いとか、恐ろしいとかいう感
情は、いくらかでも心に余裕があ
るときに感じるものなのか、あの
ときは不思議なほど、そんな気持
になりませんでした。

公会堂の中へ大声で呼びかけて
みましたが、だれもいません。
さっきまで、上の家が建ってい
た辺りを見わたしました。
土石流はすでに走り去った後で、
せいぜい三メートルほどだった
川巾が、宇原まで二百メートルほ

ただ、いやな感じが頭の中をよ



尊い人命を奪った土石流

どにもなっていて、家どころか景色まですっかり流し去られていました。

頭の中は空になり、どうすればいいのか、ただうろろうろするばかりでした。

どれほどの時間が過ぎたのでしょうか。駒津賢治さん（記憶ではそうだったと思います）が、「この下にだれかいるぞ、声が聞こえる」と叫びました。

確かに見覚えのある上の家の残骸の下から、助けを求める声がしました。

そのころには三十人ほどの人が来て、いっせいに残骸の取り除きが始まりました。こんな場合なので、だれひとり道具らしいものは持っておらず、素手でかわらやトタンをはがすという、全く歯がゆい状態でした。

「もっと人手を集めろ」、こんな声が上がって、気づいたようにすり半が鳴らされました。

火の見の上に見張り番がいて、「また水が来るから逃げる」というすり半が鳴り、こういうことが四、五回繰り返され、そのたびに

作業が中断しました。

そのうちにだれかが持つて来たチェーンソーやのこぎりなどで、作業はかなりはかどりましたが、最初の一人が助け出されるまで、その時間はずいぶん長く感じました。その人が全身泥だらけで救出され、自力で歩く姿を見て、「うちの二人だって絶対に大丈夫だ、こんなことで死ぬわけがない」と思い、早く助けなければという気持ちでいっぱいでした。

事実、まだ救いを求める声が聞こえていました。

居合わせた人々は、手足に傷をつけながら必死で作業を続けていました。

やがて二人目、三人目と案外しつかりした様子で救出されましたが、しかし妻も義母もその中にはいませんでした。

帰らぬ人に

救いを求める声も、もう聞こえなくなりました。

「早く、早く」と焦りばかりが募り、自分の無力に無性に腹が立ちました。



復旧された西原地区

かなりの時間を経て、泥水の中に顔を埋めている妻が見つかりました。

それでも回りの人たちが、「大丈夫だ、まだあったかいぞ」と、口々にいってくれるので、わたしもきつと助かると一度は思いました。

「さっきまで、あんなに元気だったんだ。おれたちを残して死ぬわけがないんだ」と。

救急車の中で人工呼吸をしてもらっている間も、わたしは妻にむかって大声で呼び続けているばかりでした。

義母は、それからさらに一時間ほどたってから遺体で見えませんでした。

あの日のことを思い出すたびに、あんな泥水の中で、二人とも苦しかったろう、切なかったろう、悔しかったろう。無念の気持で死んでいったんだらうなあと、ただただかわいそうでなりません。

無常の怒り

九人の家族をかかえ、経済的なことや、いろんなことで困ったときでも、あの人はいつも口癖のよ

うに「成ちゃん、がんばらうよ。今にきつといいときが来るよ。苦労だつて楽しい思い出になるときがきつと来る。子どもだつて大きくなつたじゃないの」、こんなことをいってがんばっていました。

決つて、どんなときでも弱音をはかない人でした。

明るく、やさしく、いじらしいほど、自分を精いっぱい生きた人でした。

そして義母は、わたしたちを包むように支えてくれ、孫たちをとてかわいがってくれました。

高望みせず、ささやかな幸せを得るために、真剣に生きた二人でした。

仁礼を最後の地と信じ、懸命に生きた二人。

その二人に、仁礼の山河が加えた仕打ちに、わたしはやり場のない憤りを隠すことができません。あのときから、わたしは神仏が信じられなくなりました。

しかし、苦労だらけの人生だつた二人だけは、極楽で親子なかくいてほしいと願わずにはいられません。



洪水は宇原を襲う



何台もの車が、押しつぶされ、押し流された

二の子らのために

子どもにとってかけがえのないもの、それは母の愛であり、存在そのものだと思います。

その母を、一度に二人も失ってしまったわが家の悲しみと痛手はとも筆舌に尽すことはできません。

ところがどうでしょう。八才、七才、五才の三人のちびたちは、悲しみと母恋しさを小さな胸で耐えながら、わたしを逆に元気づけるようながんばりをみせています。彼らの中に、母親の精神や思いやりの心が受け継がれている。おれはよけいなことは考えず、ただまっすぐ前を見つめていっしょに進もう。一步一步、おれの力でやることはどんなことでもしよう。彼らのためならどんな状況の中でもとび込もう。力いっぱいやるしかない。そう思えて覚悟がわいてくるのです。

今のわたしは、両手と片足をもぎ取られて、ケンケンで生きていくようなものだと思います。

つまずいて転んだら、それこそ木の根でも何にでもかまわずに喰

らいついて、尺取り虫のようにはいずっていかなければなりません。しかし、いつの日か必ず彼らがわたしを起こし、手足を支えてくれるだろう。

それを信じて、くそ意地張っても生きて行こう。決って彼らの前で泣きっ面を見せまいと、自分にいいきかせています。

何ひとつ、思いを果たせないまま、幼な子を残して逝ったあの人の無念の情に比べたら、おれが生きて味わう苦勞なんかは小さなものだ。照ちゃん、ばあちゃんには申しわけないぐらいなもので、むしろ喜びに近いような気さえる。正直な気持、おれにあのちびたちがいなくなったら、この先自分の生き方に自信が持てません。すばらしい子どもを残してくれたことに感謝しています。

復旧への願い

見る気さえおきない災害現場ですが、避けて通れない現実でもあり、急ピッチで進む復旧工事を目にするのが多いこのころです。やがて、そう速くない時期に仁



土石流は西原を直撃し、なお浅間塚を襲い、民家の中まで瓦礫の山となる

礼はもと通り、あるいはそれ以上に築かれたものだという認識をもって、二度と不幸な災害を繰り返さないことが、わたしたちの務めであると痛感しています。

安息の日が必ずやって来ます。

しかし、尊い十人の犠牲者を出したわたしたち遺族にとっては、いつ来るか知れない「再生」への激しいスタートが、きられたばかりだということを、理解してほしうと思えます。

すべては、長い長い時間が解決してくれるでしょうが、復旧事業が完成し、地域に再び平和が戻ったとしても、これは尊い犠牲の上

に築かれたものだという認識をもって、二度と不幸な災害を繰り返さないことが、わたしたちの務めであると痛感しています。

◇ ◇ ◇

各方面の大勢のみなさまからお寄せいただいた、お心づかい、ご激励に対しまして、心からお礼を申し上げます。

この先、遺児の育成にあたりまして、地域のみなさまのお力添えご指導をよろしくお願いいたします。

空白のときを経て

西原 田中政宏

その朝、五時前に近所の田中すみさんに起こされた。

宇原川に出てみると、もう堤防のふちまで届く勢いで水かさが増していた。

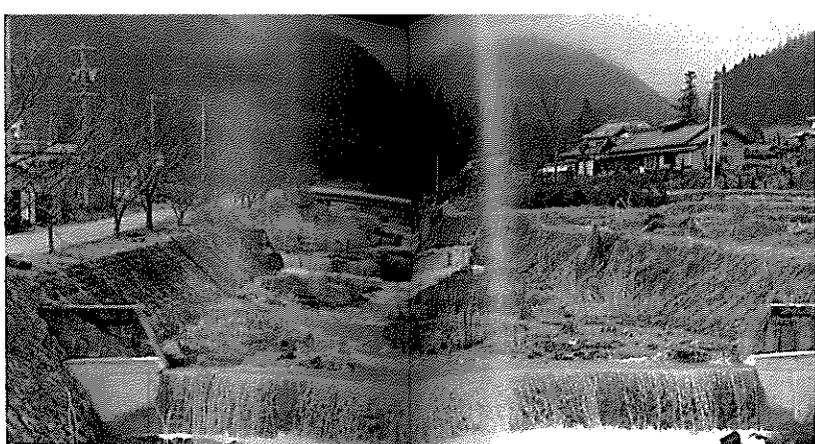
すでに消防団員が数人おり、私はその中の二、三人と上流の大口水門を閉じるため、駆け足で行っ

た。途中はもう道路も川となっており、やっとのことで水門に着いた。しかし、すごい濁流で水門を閉じるハンドルの位置がどこにあるのか、ぜんぜん見えない。

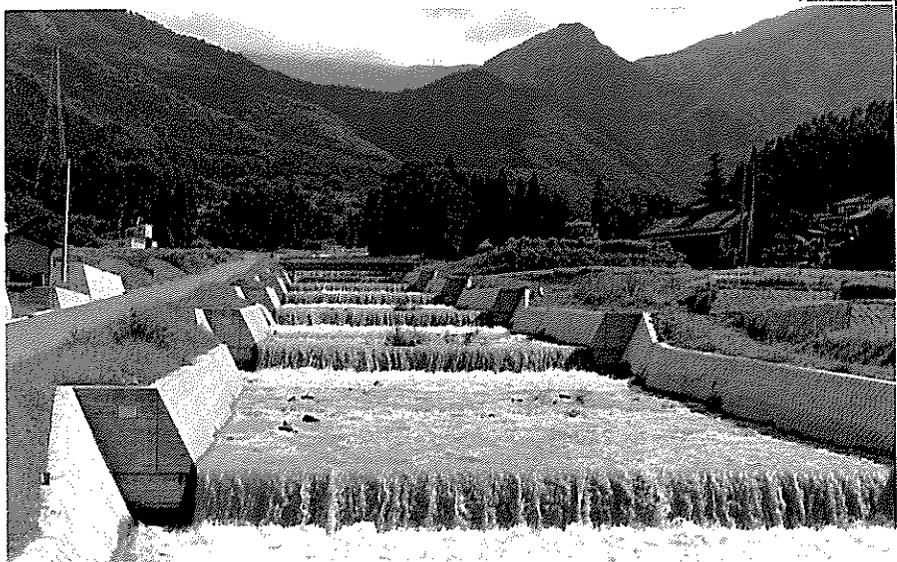
横沢からも水が道路を川にして流れていた。

その頃になると、人数も増え

被災前、
河川改修
されていた宇原川



被災した宇原川（県道上流）



復旧完成なる（58.9.29 台風10号の洪水）

んなで土のうを積み始めた。しかし、水の流れが強くて積んでもすぐに流されてしまう。

一心に作業を続けていたとき、上流で木流しをしていた人たちが「逃げるよ」と叫んだ。いや「逃げる」と叫んだそうだけど、私にはまったく分らなかった。

◇ ◇ ◇
それから。助けてもらい意識が戻るまでは、私にとってまったく空白の時間である。

私の頭の辺で人の声がする。何か叫んだらしい。子どもを先に出してくれ」と言ったようだ。気が付き始めた最初である。夢のように、自分の家で子どもと添い寝をしている幻覚があった。

それから担架に乗せられ、救急車に移り病院に運ばれた。

雨中の救助活動

西原 田中 美洋子

朝の呼び出し

夜半からの雨と風の音を聞きながら、せつかくの日曜日だが雨降りに埋まり屋根だけが見えている。消防団員と部落の人たちが右往左往している。ときどき半鐘が鳴り響く。水量が増すと鳴らすらしいが、屋根の上で作業をしている人たちがいっせいに避難する。

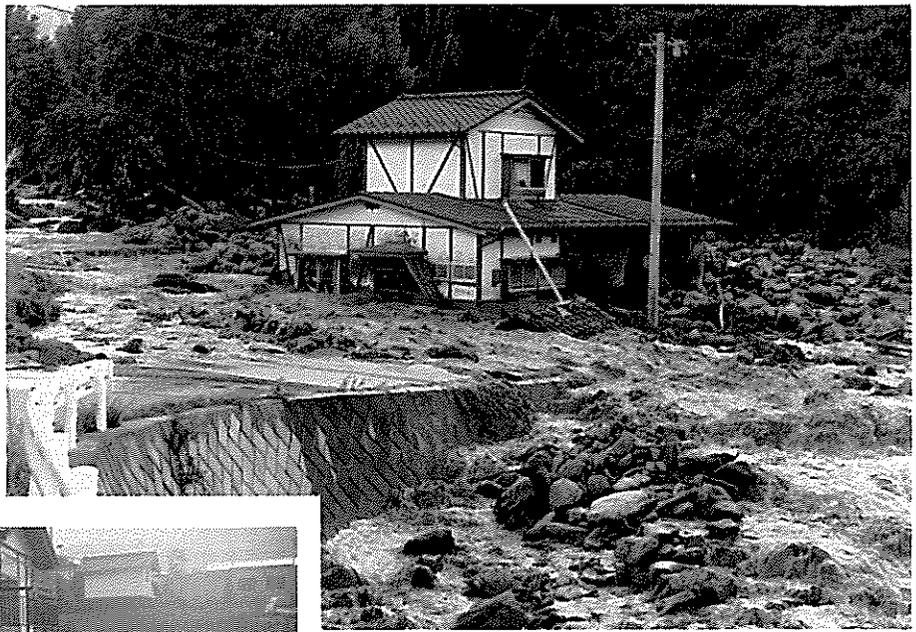
救急車はまだ来ていない。近くの家の軒先でひとり、下腿をさすりながらすわっている。外傷はないが、足をどこかにはさまれたらしい。「大丈夫です。大丈夫です」とくり返し言っている。

若い男の人が助け出された。肩下股などの痛みを訴えているが意識はしっかりしていて、母親の消息をしきりに心配している。毛布と布団で全身を包んで温める。

しばらくして救急車が来た。二人を乗せてもらい、何か救急セットがあれば借して欲しい」と頼む。蘇生器とアンビニューバックを取り出し、私の名前を確認して救急車は走り去った。

残った救急隊員に、「大きい救急車と医者呼んで欲しい」と再三問いかけても、若い救急隊員は無言で首をかしげている。どうして呼んでくれないのかと思ったが、

医者呼んで、家から二三分の現場は、いままでの景色は全く一面に石ころと濁流に一変していた。四軒の家は無惨にガケに叩きつけられ、土石



土石流は瀬之脇地区まで直撃し、人家を押しつぶし、巨石や大木は家を突き抜けた



あとになって、その医院も被害にあい、大変だったということを知った。

とにかく一生懸命

どんな状態で助け出されるのかまったくわからないし、とうてい私ひとりの力では無理である。

しかし、とにかくやらなければならぬのだ。

そのうちに、先ほどの息子の母親が助け出された。全身は泥と砂にまみれ、寒さと痛みを訴えている。とても拭いきれない。近くの家の風呂を借りることにした。ざっと洗い流し着換えをして救急車を待つ。母親の手には、ずっとお札が握られたままであった。

その後は、次々と人が助け出され病院へ運ばれた。ひと息ついた頃、また一人布団にくるまれたまま助け出されて来た。

知っている子の顔である。体の温もりはあるが、口腔、鼻腔に泥が入り、呼吸はしていない。脈も計れない。救急隊員二人と、吸引マッサージ、人工呼吸を始める。体を拭いて暖めるよう、周りの

人をお願いする。「救急車と医者も早く」と急がしても、なかなか来ない。そのときの時間は長く長く感じられた。

救急車が来るまでに、とうとう自発呼吸も、心臓の鼓動も聞かれなくなった。

救急車が走り去り、ふと我に返ると、——いま何時なのだろう、昼は過ぎたのかしら——。全身の疲れをどっと感じた。

家に帰ると、被災した近くの子どもたちが避難して来ていて、元気な声がこだましていた。

空が急ににぎやかになった。新聞社や、テレビ局のヘリコプターなのだろうか。数機飛び回っていた。

欲しい緊急救護体制

災害後半年が過ぎた。赤十字看護婦として育った私は、一般の病院や地域での医療活動のほかに、国内における災害救護、さらに国際救護活動が大きな任務であることは知っている。

国内の災害救護に関しては、救護訓練や、演習が行なわれ、非常



復旧工事が完成し、見違えるようになった宇原川、国道406号線宇原橋上流

時にはいつでも出動できる体制が整えられているはずである。

今回の災害では、なぜすぐに要請されなかったのだろうか。「富士山

落石事故」などでは、各県日赤支部救護班が出動して救護をしたと聞く。

日本赤十字社長野県支部長（県知事）から近くの赤十字に要請があり、長野日赤などからの救護班

が出動してくれたら、ずいぶん心強かっただろうと残念に思う。

日曜日の朝であったということも災いであったのだろうか。

「あなたの身近に赤十字」一九八二年赤十字国際標語である。

まだまだ寒い昨今、悲しみに包まれた人々に、一日も早く暖かい春が訪れるようお願いしたい。

（一九八二年二月）

泥流に追われて

宇原 篠塚 莊蔵

ながい夜

台風十五号来襲の予報のあった

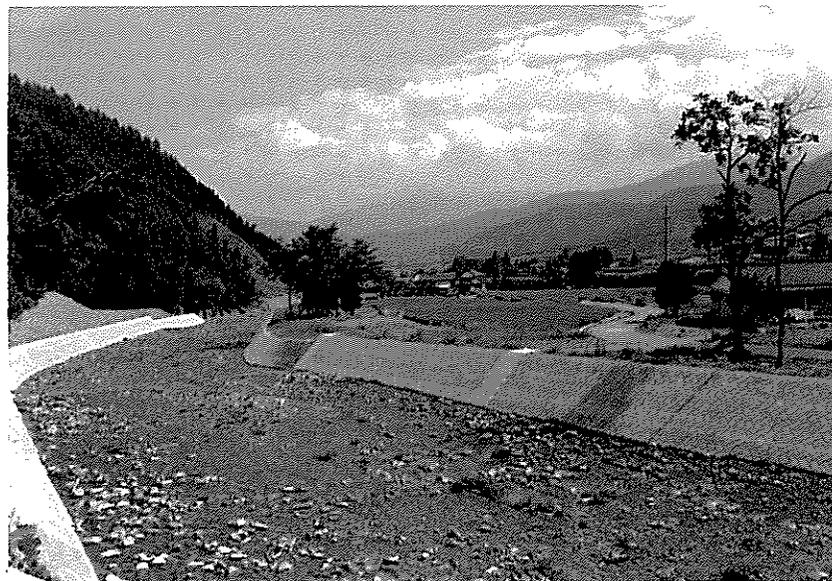
二十二日、夕方から降り出した雨は次第に強く夕立のようになり、雨水は雨樋いからあふれ、滝のようになつてきた。

雨は降っても風が吹かない方が被害はないと思っていたが、九時ごろには増水し、裏の河原（宇原川）で石の流れる音がゴトン、ゴトンと聞こえてきた。

洪水騒ぎにならなければよいがと心配しながら床に就いた。

何かの音で眼が覚めた時、外は豪雨で河原は無気味に石の流れる音がしている。時計を見たら午前一時過ぎだ。

気味悪く思いながらもウツラウツラしているうちに、枕に響くほど石のぶつかり合う音がものすごく大きくなってきた。起きてみたが、どしゃ降りと暗



復旧なった同地区



鮎川右岸の湯河原地区の洪水

昭24.9.1 発生のキティ台風による同地区の被害写真
(山岸邦夫氏保存)

やみでしかたなく、時計は三時だった。早く夜の明けるのを待たが、とても長かった。

どうも納得できない

五時半過ぎ、ようやく明るくなったので裏の川端まで行ってみると、両護岸は六、七分どおり土砂で埋まり、その上を濁流がものすごい勢いで流れていた。

永久橋(宇原橋)の下は一メートルぐらいあいていたが、大変危険な状態だと思いいっしょに来ていた息子に、組長に連絡して警戒するように指示して、家に戻った。

河原の音が異様に激しく聞こえるので、二階に昇り窓からみたが先程と変っていない状態なので、茶の間へ来て茶の用意をしていたら、二階にいた家内が、「橋が流れた、早く逃げなけりゃ危い！」と叫びながら降りて来た。嫁の清子が「お父さん早く逃げて」といつて来た。

しかし、五分ぐらい前に見た時の判断からどうも納得できない。確かめてみようと二階に駆け上って見た瞬間驚いた。

西原側の土手から宇原側の土手まで、百二十メートル幅に真っ黒な泥流が、東側の物置き小屋の屋根の高さでゴオーッとものすごい勢いで押し寄せて来た。

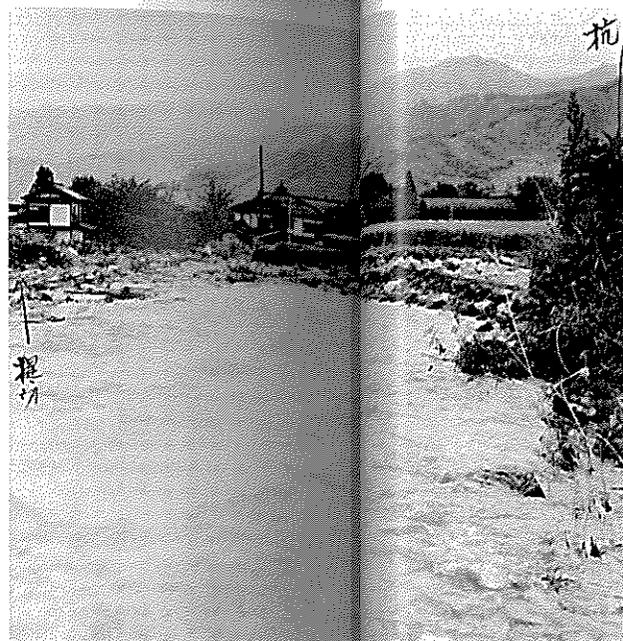
これは大変、鉄砲水だ。家も何もかもひと呑みにされると思って夢中で階段を駆け降りたら、女子供は逃げ出すところだった。

「みんな、高い方へ早く逃げろ」と叫びながら庭に出たら、三十センチぐらいの深さで泥水がゴオーッと音をたてて流れ込んで来た。

生きた気もしないで向山の方へ逃げて行ったら、組内の人達も大勢とび出して途方に迷っていた。

「高い所へ逃げろ」と叫びながら走って行ったら、一番高い所の家の人に呼び止められ、その家に避難させてもらった。

しばらく休ませてもらっているうちに、だれかが「用水路の取り口の土手が切れそうだ。なんとかせんと宇原は全滅だ」といったので、組の若い男達はそっちに走った。老人や女子供は、せっかく避難



難した家も危ないかと、向山にある氏神様の庇の下へ避難したが、どしゃ降りの雨でここにもいられず、再度先程の家へ戻り朝食をいただいた。

その時の話で、「西原では何軒かの家と何人かの人が流され大変だそうだ」ということを聞き、気の毒と恐ろしさで体が凍える思いだった。

一杯の水

八時ごろ、雨も小降りになってきたので、恐る恐る自宅の様子を見に来た。家のまわりの水はだいぶ引け、家へ入れる状態になっていた。西原側では何台かの重機が動いており、流失家屋の跡で捜索作業が行われている様子だったが、孤立状態になった宇原側では、泥流の音と重機の響きが騒々しいだけで何も判断できる状態ではなかった。

十時ごろ、ようやく雨が止んだが、空に各報道関係のヘリコプターが何機も旋回するようになり、その爆音と濁流の音で、あたりはいつそう騒然とした様相になった。

夕闇のころになると、対岸の人影も順に少なくなった。濁流の音の中に重機の音が聞こえるが、孤立した宇原では全く情報がつかめずに、心配だけが先に立った。

今夜も雨が降れば再び洪水が押し寄せるのではないかと考えると、家へ帰ることもできないので、高い所の家で一泊お世話になった。

翌朝は天気が良くなったので六時ごろ家の様子を見に来たら、親類の人が登山仕度で腰まで濡れてポリタンク入りの飲み水を背負って来てくれたのには、ありがたかったり驚いたりであった。

そのうちに、続々と大勢の方々も駆けつけてくださり、お見舞いや片付けに協力くださるやら、人さまのお情けに深く感謝する次第であった。

順に落ち付きを取り戻し、災害の様子なども分ってきたが、十人もの尊い命が犠牲になられたことを知り、茫然とした。

心からご冥福を祈るとともに、自然の力の恐ろしさ、無限の偉大さに驚くのみである。



田畑は濁流にのまれ、跡形もない（湯河原地区）

必死の避難

浅間塚 山岸 総子

土石流が来る前

五時ごろ、おばあちゃんの騒ぐ声で目を覚ます。

「仙仁の終点の家が、仙仁川の増水で浸水している。手伝いに行つて」と、湯河原の玉江さんから電話がきたとのこと。

私たちはパッと飛び起きて外を見ると、道路をはさんですぐ前の宇原川が、いまままでに増水している。「わっ、すごい」と息をのむ。堤防の上まで一メートルほど残すだけ。ゴトゴトと石がぶつかり合う音が不気味に響いてくる。

おじいさんと主人は、急ぎトラックで飛び出して行った。

私は炊き出しの用意をと思いついた所へ。そして夏端と大日向の家へ電話をかける。しかし、どちらも何度ダイヤルを回しても通じない。

もし、逃げ出すことにもなればと思ひ、通帳、証書類をカバンに詰め込む。子どもたちを起こし

「学用品をカバンに詰めさせ、二階に上がらせた。

川の水が、また五十センチほど増えたみたい。家の前の道路は川になって、三十センチほどの石がゴロゴロと流されて行く。

おばあちゃんが、「これは、どこか堤防が切れた」と言つて外に出て行った。

組幹事さんから電話。「消防の方から緊急避難体制が発令された」とのこと。いままで聞いたことのないので、何をどうすればよいものか分らない。ドキドキ、オドオドするばかり。

夏端の家から電話が入り、「いま家のお父さんがそっちへ行つたよ」、私は「ダメだよ、もう来れないよ」と電話を切る。

六時十五分ごろ、仙仁の家から二回目の電話、外のように説明しながら川を見ると、川向うの智おじさんの田に、水あめを流した



農地復旧が完成し、緑がよみがえった水田

ように、水がかぶった。

「困る、どうしよう／何か大切なもの無い、私の問いに「いつも仕事に持っていくカバン、二階に上げとけ」と、受話器の奥で主人が叫んだ。

家が揺れる

私は階段を飛び降り、カバンを二階に上げる。そのときはまだ逃げるというところに気が回らなかった。

また台所へ行ってガスコンロに火をつけたと同時に、ズドンというものすごい音。それとっしょに、ガタガタと家が揺れだし水の音が変わった。

「何かあった」と思い、ガスを止めて二階に上がる。

わっ、すごい、宇原の集落がぜんぜん見えない。山が二重に見える。ドドドッ、ヒューヒューともすごい音と速さ。荒れ狂う海のように、バーンと水しぶきを上げて、言いようのないものが押し寄せて来た。

一瞬、世の中がひっくり返えるのかと思った。

すかさず、「三三にいては危ない、早く逃げなければ」と、子どもたちに、土手上の裏の畑に逃げるように言い、私は用意しておいた自分のカバン、主人のカバン、組の会計のカバンを持って飛び出す。すると、まだおばあちゃんが外にいた。

「早く逃げて、危ないよ」と言い、私は子どもも所へかけ寄せた。

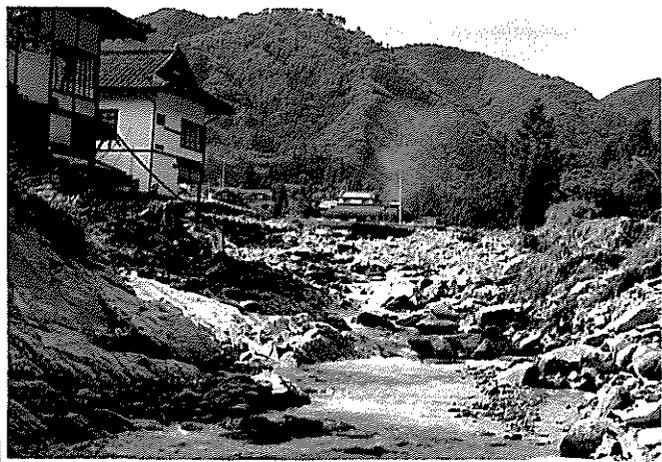
「ああ、助かった」と、安度の息を吸ったそのとき、後頭部を一撃、ガーンとなぐられたような音がし、耳鳴りがして目が回り、気が遠くなりそうになった。

今度また、さっきのようなことがあったらどうしよう。子どもをどこへ避難させようかと、キョロキョロするが逃げる所がない。ただオロオロするばかり。

子どもたちは、寒さと恐ろしさでガタガタ震えている。

私は、まことにお恥しいことですが、下の方が馬鹿になっても、止まった。力を入れて止めても、止めても流れてきて困った。

瀬之脇の人たちがみんな啓一郎



湯河原温泉付近の河川の氾濫



復旧工事が完成した同地区

さんの庭にいる。

よく逃げられたなあー。目の前を土石流が襲うのを見て、あわてて逃げ出したのに、よく無事だったとほっとした。

救助の拡声器

誰かが、「浅間塚の公会堂へ避難してください」と叫んでいる。

私は子どもにも、「公会堂よりここの方が高いから安全だよ」と言いつつ、また土石流が来たらどうしよう、と、ドキドキしていた。

拡声器で「若林さん、ハンゴ車が来ました。窓から顔を出してください」と言っている。

ゴーゴーと水の音でよく聞こえないが、県道の宇原橋の方だ。

見ると、今度はタケオさんが、拡声器を取り、奥さんと妹さんの名前を呼んでいる。

「おかあさん、みよこー、おかあさん、みよこー」と必死の叫び声。

若林さんの家は、宇原川の左岸で、前も裏も濁流に囲まれている。家が揺れているように見える。

みんな呆然と

ふと気がついてみると上の子どもが、猫をしっかりと抱いている。私は、「自分の命が危ないときに猫なんか抱いて来て」と怒った。

「だって、かわいそうだもん」と半べそをかく。私は怒りながら猫のことまで気が回らなかったのに、と感心した。

「もう大丈夫だから離さない」と地面に置かせた。

またほんやりと川の方を見ていると、おばあちゃんが私のそばへ来た。「どこにいたの」と聞くと、「小屋にいたけど、腰がぬけて動けなかった」と言う。

しばらく呆然と、土石流が襲った跡をみつめていた。そこへ、道代さんがみえて、それから道代さんの家で朝食をいただくなどお世話になった。

八月二十三日の朝

瀬之脇 中島 澄男



仙仁川も氾濫、鳥居橋に
流木が堆積、
田畑を濁流が襲う



県道須坂菅平線は仙仁川の氾濫で数箇所決壊する
(昭和57年、国道406号線となる)

朝五時、目が覚めた。
昨夜来の雨が、ものすごい音で降り続けている。川の流れもまるでジェット機の爆音のようにすごい音だ。いままでの増水のときは、「ごとごと」と石の流れる音が響いてきたのに、その流れを越えた音だ。

「これは大変だ。だが堤防がよくなっているので大丈夫だろう」と寝床で妻と話していたとき、湯河原の羽生田さんに起こされた。

宇原橋の下で堤防が切れ始めた。避難した方がよいとのこと、すぐに支度をして川を見に行く。

なるほど、ものすごい水量だ。もう堤防の上すれすれにきている。橋の下もいっぱいだ。根をつけた大きな木がつかえている。

合流点でよく見ると、仙仁川に比べて宇原川の水量がものすごく多い。すぐ家にもどった。

妻が仕度をしてかたづけ始めて

いた。家族を起こし、押入れの上段に入るだけのものを入れ、貴重品と下着だけ持って外へ出たが、もう水が陸までできていた。濁流がしぶきをあげて道路を越して押し寄せてくる。

自動車では行けなくなったので、子どもと年寄り、田んぼ伝いに上段の県道へ出て親せきの家へ行くように言い、妻と二人でひと足遅れで家を離れた。犬もすぐ放したが、驚いて小屋の中にすくんでいるのを無理に連れ出す。

田んぼはもう膝まで水があった。やっと県道まで道い上がったが、親せきの家まで行くゆとりもなく、近くの家に荷物を置かせてもらってまた家を見に引き返した。

不思議なことに、いつの間にか水が少なくなり、楽に家に来られた。近所の人も来てくださり、今のうちに車を出そうといって、自動車とバイクを県道まで出しても



仙仁柄沢は土石が押し出し、
県道をふさぐ



完成なった仙仁川、関連事業により鳥居橋がなくなる

らった。子どものふたん着など荷物をつくり親せきまで運び、すぐ引き返した。

一段落して川を見に行く。すると仙仁川の水量が多くなっているのに、宇原川の水かさが減っていた。後になってみると、まだ雨がどんどん降っているのに水量が減るのは変だと思ったが、その時は気づかなかった。

消防団の人が決壊したところに土のうを積んでくれていたし、やっとひと安心と、瀬之脇橋のた

もとで近所の人三、四人と話しをしていた。

その時、ふと宇原橋の方を見た。浅間塚側の土手と宇原側の土手の間をいっばいに、電柱の高さぐらいの黒い塊が近づいて来た。

「あれは何だ！」と誰かの声。次の瞬間、「逃げる！」とみんながいっせいに叫び、一散に逃げた。逃げながら振り向いて見ると、

瀬之脇橋へ海の波のように水がぶつかり、しぶきが上がった。それが引けたら橋が無かった。

家が埋まってい

瀬之脇

中島孝一

私たちにあって、昭和五十六年八月二十三日は一生忘れることのできない日となりました。

二十二日は台風十五号の影響で夕方からしだいに雨量が増し、宇原川の川音がだいぶ激しくなっていました。

その夜私たち家族は、欽ちゃんの「二十四時間テレビ・愛のチャ

リティーショウ」を見ていました。そのうちに私たちもカンパしようということになり、出し合ったお金を持って長野まで出かけました。しかし、肝心の長野放送センターがみつからず、また明日にしようと思えました。

その後も雨は強くなるばかり。床についても眠れず、うとうとし



住民・消防団員が総出で捜索にあたる



ながら朝を迎えました。

川音はゴーゴーと唸りをたてていました。身仕度をして様子を見に外へ出ようと思っていると、玄関の方から突然「堤防が切れそうだから早く逃げる」という声で中大さわぎ。そこへ消防出動の電話が入り、ハッピに着替えて仙仁のポンプ小屋まで行きましたがだれもいません。すぐに引き返して家に戻りましたが、途中宇原川は濁流があふれ出し県道にどんどん流れており、家の前の堤防が切れて周りは一面の濁り川になっていました。

家族や近所の人は、一段高い上の家に避難していて無事でした。

それから間もなく、周りの水が引けたのです。これでもう大丈夫だと思いました。

家の中に入り、異状がないことを確かめっていると、消防団員が来たのでいっしょに家の前の堤防の補修を始めました。

突然「ドシン」という大きな音がしました。と同時に「上の堤防が切れたから早く逃げる」というだれかの叫び。

私は道具をその場に投げ捨て、道へとび昇りました。

それと同時に、材木や大石が混ざった十メートルぐらいの高さの濁流が押し寄せてきました。鉄砲水だ、不気味な音をたてて映画のシーンを見ているかのようなできごとでした。

私の家の物置が流されていく。母屋は壁が全部ぶち抜かれ、家財道具がどンドン流されて行き、わが家は土石で埋ってしまいました。新築して十年の家は、わずか数分で全壊してしまつたのです。

その夜から私たち家族は、親戚の家に別れ別れでお世話になることになりました。

布団に入って、朝になったら夢であってほしいと何度も思いました。

次の日から、親戚や部落の人たちの御協力で、家の中にとまった土石を取り除く作業が始まりました。二階だけ残された家は、使用不可能でした。間もなく二戸の仮設住宅を建ててもらい、各方面からの救援物資が支給になり、家族全員で新しい生活が始まりました。

住民総出で被災家屋の
救援活動をする



被災家屋の土石や流木の撤去は大変であった

また一から出発です。一日も早く立ち直り、昔の幸せを取り戻したい気持ちです。
犠牲になられた方々のご冥福を

お祈りし、ご援助、ご協力いただいたことに対して厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございます。

濁流からの脱出

瀬之脇

若林 さか枝

昭和五十六年八月二十三日。生涯忘れることができない忌まわしい日として、頭に焼きついています。

「オイ、川の水がえらく増えたぞ」、義父の声がしました。

前夜は、テレビで二十四時間放送の赤い羽根募金のチャリティーをやっており、家族みんなで見ていました。

その声にも夫も目を覚まし居間に行きました。私もすぐ寝まきのまま行ってみると、みんな起きていました。

私は十一時ごろ床に入りましたが、義弟や義母はその後も起きていたようです。雨はしきりに降り続いていましたが、「よく降るなあ」くらいに思い眠ってしまいました。

家のすぐ裏が宇原川です。外に出てみると雨はかなり強い。生後二ヵ月の子供が目覚めたので家の中にもどり、私も着替えをすませ時計を見ると四時半を過ぎていました。

ふと、家族の話し声で目を覚ました。居間の方は電灯が明るく、何やら騒々しいのです。

居間においても、雨と宇原川の水かさが気になって落ち着かず、かわるがわる外に出てみるようになりましたが、そのうちに義父が、

手もとの時計を見ると三時半には少し前、外はまだ真っ暗です。

「川があふれるかも知れない」とい出し、いっせいに外へ出てみました。



民家に突っ込んだ巨木の引き抜き、人海作戦に頼るのみ



女性もなれないスコップを手にして、救援活動をする

薄明るさの中に、ふだんは葦で水の流れが見えない川が、泥水でいっぱいになっている。流れていく量と音と速さに身震いを覚えました。

夫が消防のハッピ姿になって出て行きました。義父も雨具を着て外へ。北側の窓から見ると、堤防のようになって七、八メートルの杉の木立ちも半分の高さまで水につかり、風にあおられ、流れに押されやがて倒されて姿が見えなくなっていく。

「これは、ただ事ではない」恐しくなって居間に来ると、夫が戻っていて、「一之瀬ダムもだめだ」という。私にな何のことやらまったくわからない。—そのうちに、家族の四人の男衆は、川向うの家が危いとかで救援に出ていきました。

家には私と義妹と子供の三人だけとなり、心細く思いながらテレビの台風情報と、窓から見える川の流れに注意をしていました。

六時の台風ニュースのあとすぐ外に出てみると、対岸の杉林はほとんどなくなり、泥水が堤防を壊

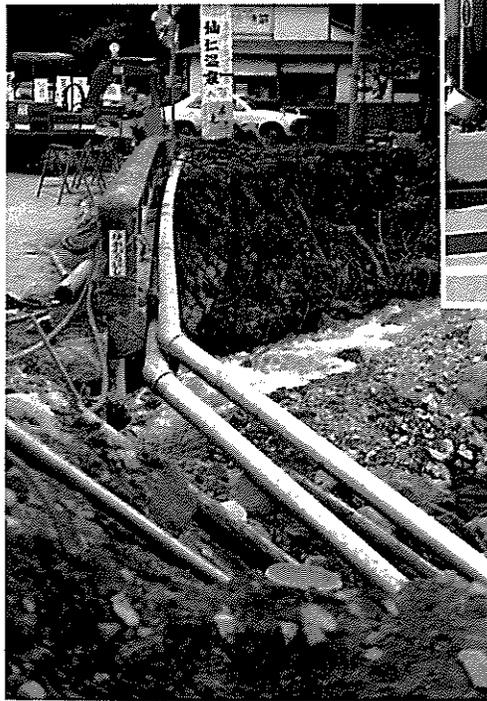
し北側の民家の方へ押し寄せている。背筋が寒くなり、もう怖くて見ていられませんでした。

居間で眠っている子供のそばに腰をおろす。つけっぱなしのテレビに目をやっても外が気になる。落ち着かないでいると突然、ドシンというものすごい音と同時に大きな地震のように家が揺れました。玄関で義妹が血相を変えて呼んでいる。

とっさに寝ている子供を抱きかかえ、そばにあった毛布をつかんで玄関へ飛び出てびっくりしました。いつも緑いっぱいの田んぼが消え、そこに濁流が押し寄せ、私たちの方へどんどん向って来ている。

義妹が「橋がないよう。早く逃げよう」と叫んでいる。宇原橋が流れたのだ。サンダルをつっかけ子供に頭から毛布をかぶせて、義妹と雨の中へ飛び出しました。

「どうしよう。どこへ逃げよう」夢中で県道を南へ走りました。風は強く、雨は体に突き刺さるようでした。おまけに子供を抱えているのでなかなか進まない。逃げる



水道は断水、給水車は飯山市からも
救援に駆け付けてくれた

方向に水はどんどん迫ってくる。

走りながら、抱いている子供が動かないのに気づく。毛布を頭からかけっぱなしなのだ。あわててとつてみると、毛布の下で目をくるくるさせていた。「よかった」とまた走る。

ともかく仙仁へ逃げようと考えました。ところが、仙仁川もあふれて濁流が田んぼの上をどんどん押し寄せて来ているのがみえる。

「ああもうダメだ、もう逃げられない」、義妹はしっかり私の腕につかまっている。子供も抱いている。「どうしよう、何とか逃げなくては」また息を切らして走る。着ているものが足に張り付いてよく走れない。

仙仁橋の手前で男の人に会う。

ただ「助けて、助けて」というばかり。「早くしろ」、「早く」いわれる声にすがって必死に走りました。

仙仁の昇り口、田中辰治さんの家までやっと逃げのび、始めてうしろを振り返ると、たったいま渡ってきた仙仁川と宇原川の間は、私の家のまわりと宇原の集落の高台を残して、すっかり泥の海と化

していました。

田んぼのあちこちの石垣が大きな泥の滝となり、ゴーゴーとうなりをあげている。流木がからみ合いい流れ落ちていく。

もう驚きなんていうものではなく、あの恐ろしさはとても言いあらわすことはできません。ただ茫然と風雨の中に立ちすくんでいました。

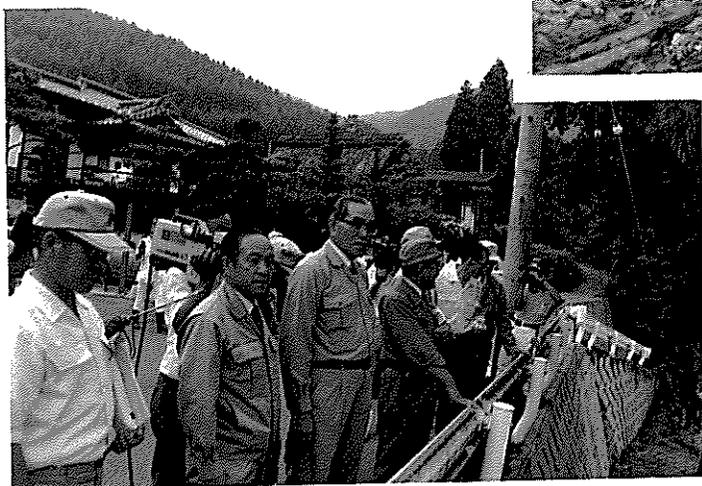
「さあ、早く家の中へ」という人の声にやっと動いたようです。

さあ、だんだん我にかえってくるをやたらに、体中がガタガタして、気が動転し始めてしまう。

自分たちは助かったものの、川向こうに救援に行った家族はどうしたか。みんな生きてるかしら。心配で心配で。その辺にいるあらゆる人たちに家族の消息をたずねてみる。

けれども川の向こうは、とうていだれも渡ることではできないし、電話も不通。川を隔てて、すべてが不通になってしまった。

雨も風も相変わらず、ものすごい強さでヒューヒュー鳴っている。「どうなってしまったんだろう。



吉村県知事、国会災害対策特別委員会、地元国会議員、各政党が視察、激甚災害指定を受け、災害旧事業は機械に対処されることとなった
(以下関連写真)

この世が変になってしまったんじゃないかな」とさえ思えた。台風という、つい南の海岸添いのこととしてしか考えていなかったのです。自然の恐しさ。力の大きき。この自然に勝てるものはないと、まさまじい知らされたようです。何人もの尊い命を奪い、

悪夢の一瞬

浅間塚

若林 しず子

美しい自然の姿を破壊し、すべてをのみこみ、荒しまわり、数多くの深く痛い爪跡を残して…。天災とはいえ、これほどに恐しいことは二度と起きてほしくないのです。生涯、決して忘れることができないでしょう。八月二十三日という日を……。

八月二十三日午前六時三十分、忘れる事のできぬ土石流。ここ三、四日降り続いている雨になぜか昨夜は一睡もできず胸騒ぎさえする折、ちょうどテレビでは二十四時間テレビチャリティーをやっておりましたので、全国の皆様の暖かな支援を涙流してみておりました。しかし、雨は夜明けと共にますます激しく降り出し、家の人たちは皆警戒に出かける状況となり心細くなりました。

午前五時ちょっと廻った頃と思います。孫の部屋へ行って一番上

切な本とカバンを持ち出さねばと思ひ吹き出しのおにぎりの手を止めて行こうと外に出てみるとその時すでに孫の部屋の中まで水が入ってきておりました。年寄りの私などどうすることもできず夏端に居る娘に電話をかけすぐ来てもらうことにした。このような大変な事になるうとは誰が思ったでしょう。娘婿が来るまで一時間位待ったように思ったが実際は三十分位だと思ふ。このような時の待ち時間の長いこと言ったらありゃしない。



婿は県道須坂菅平線が河原になつており普段の時は五、六分あればこれるのになんと三十分もかかってた。婿の言う事には、いつ車がエンストしてしまうかと思ひ気がではなかつたらしい。

もう着いた時は孫の部屋は婿でも入れなかつた。すでに腰位まで水があり戸を開けるところではなかつた。孫は高校三年生であるがカバン、本などなにつ持つて出ることはできず本当にかわいそうそんな孫の淋しそうな顔が目にくんでくるようだ。婿はもう一度家へ引き返してくるといつて出た。と同時に孫が布団一枚でも持ち出そうと地下室に入ったとたんに、にぶいドッカーンと言う音とともに家の中は真っ暗やみになつてしまひ何が起つたかもわからず、ただ孫が心配で孫の名を何回も何回も声の続く限り呼んだ。しかし返事がない、どうしたのだろう。たしか孫の行つた地下室の方でものすごい音がした。

屋の中にオロオロと立っていた。その時孫の声「ばーちゃん逃げる／＼ばーちゃん逃げる／＼」どっちへ逃げるんだ／＼裏の家の方へ逃げろ」と言われ夢中で逃げた。裏の道まで行くと長男の車がありその車に乗ろうとした。ふと宇原橋の方を見ると警戒にあたっている消防団の人達、近所の人達、その間数秒である。

ゴーゴーという地鳴り、悪夢の一瞬と申した方がよいでしょう。世の地獄とはこのような事を言うのでしょいか。

真っ暗な中でヒューヒュー、ゴーゴー、立木はそのままゴロンゴロン巻き込んでおり、電線の上まで上がる泥しぶき、足がガタガタと音をたてているのが自分でもわかる。あまりの恐怖心でふるえがとまらぬ。警戒にあたっていた十四・五人の人達もいっしょに流されてしまったのだろうか？。長男もたしか橋の所に皆といっしょに警戒にあたっていたはずだ。見ると何人かの人が流されたようだ。長男も三百メートル位流されたがさいわいにも橋が落ちるときに



橋の欄干に命がけでしがみついていたので命は助かったが肋骨を二本も折って重傷である。孫は私を逃がし犬二匹を離して逃げようとしたところへ二度目の土石流にあつて上からマイクロバスが降ってきて、腰の骨折と首肩の座傷の重傷を負った。孫には大変な思いをさせてしまいました。また、警

戒にあたっていた道路整理の看板を取付けていた建設事務所の方は車もろとも流されましたが助かりました。本当に一瞬の悪夢でした。西原では日頃親しい方が尊い命まで奪われ、おくやみ申しあげます。このような恐しいことはもう二度と来ないでほしい。

鉄砲水

浅間塚

和平輝 男

五時半ごろ「庭へ水が流れ込むぞ」と父に起こされた。

見ると、前の道が川のようになり、ブロック塀の出入口からどんだん庭へ流れ込んでいる。

わたしは、妻と父、それに近所の人の応援で、近くの土砂を集めて入口をふさごうとした。

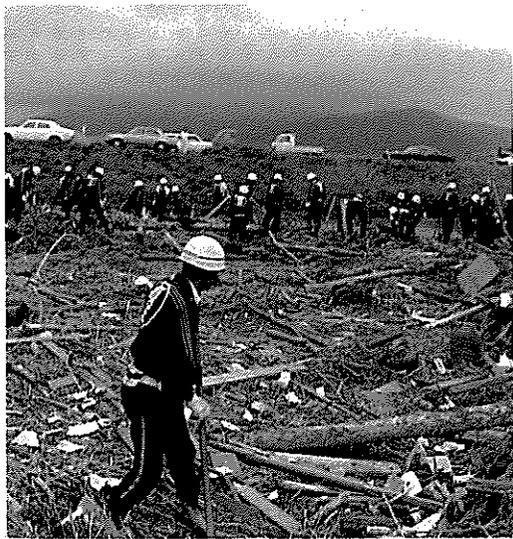
しかし、土砂でたたぐよりも水の流れの勢いが強く、人の手ではどうにもならない。近くの河東工業のミニバックホーを借りて、やっとたたき終った。

雨は相変らず強く降っている。

家の軒先でひと息入れていると、突然ドドドーンという異様なものすごい音を立てて、濁流がしぶきを立てて電柱ぐらいの高さで押し寄せてきた。

鉄砲水だ！
またたく間に宇原橋を流してしまつた。

私は無意識で家の中へ長靴のまままでとび込んで、子供たちを抱き上げ、裏から一段高い土手まで避難した。逃げたときは、すでに家の中まで水が入りこみ、流される寸前の状態だった。



行方不明者の捜索は、市消防団員、会社、職場、特別救援隊が総動員して、村山橋、立ヶ花まで捜索にあたり、全員発見することができた



恐ろしい自然

浅間塚

和平 和子

一九八一年八月二三日、日曜日、宇原川が、大きく狂い乱れました。

「ヒュー」と、唸る不気味な音急に突風が吹く。

それと同時に、黒い影が突然襲いかかってきたのです。

ものすごい、勢いで。

ものすごい、速さで。

鉄筋コンクリート造りの、「頑丈な橋を、押し流してしまったのです。

激しく冷たく、打ちつける雨

風も強く吹きつける

恐ろしさと不安と、冷たさで

恐怖の朝

仙仁

杉原 千代子

犬の鳴き声がおかしかったので、起きて行って見ると玄関の外には土砂でうまり戸が開かなくなっ

いた。家族を起こして主人は外に出て行った。裏の道は川になり犬は土砂で首までつかって身動きが

指も、手も、足も震えました。

襲ってきた。黒い影が。

「ドーン」と、自分にぶつ

たようでした。

一瞬、胸が苦しくなりました。

そして、もつともつと悲しいで

きごとがありました。

十人もの尊い命が、奪われてしまったのです。

どんなに、恐ろしい思いを：

どんなに、苦しい思いを：

書き替えることのできない

想像もつかない、恐怖だったこ

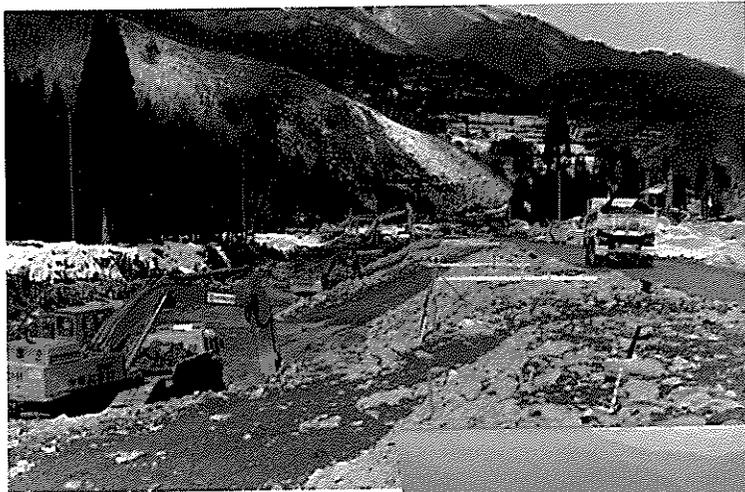
とでしょうね。

信じられない、自然の力

恐ろしい自然

もう、二度とこのような天災が

こないことを、毎日祈っています。



急ピッチに進む河川復旧工事
(宇原川)



できずにいた。とにかく犬を助けて川の流れを見に行った。

私は子供達といっしょに外に出て、玄関の土砂をかたづけただしたが、雨が激しく水の流れは強くなるし、外にいることがあぶなくなった。家の中に入ってぬれた服を着替えて少し身の廻りをまよめたが、外が心配になって窓から外を見ると、もう壁まで水が来ていた。

とにかく子供達と下にある衣類、家具類を二階にと思い部屋に入ると、ものすごい音をたてて玄関のガラスが割れ泥水が流れ込んで、下駄箱は倒れるし廊下はいっぱいになり、お勝手に押し寄せていった。勝手は見るうちにいっぱいになってしまった。戸を開けようと勝手に行ったが水でなかなか開かなくてやっと開けた。ところが勝手にあるものがみんな流れてしまった。

部屋の中はタンス、畳が水で浮き上って倒れるし、とにかく水を外に出さなくてはと思い次から次と部屋を開けた。もうこの時は半分はだめになっていた。部屋にい

ては危ないし、子供達に自分で持てるだけ持って外に出るように言って私もいっしょに外に出た。

ところが家の廻りは水で、それも流れが強く渡ることができず、近所の人達が来てくださり助けていただいた。子供達を避難させ、私は現場に来た。ところがいつ持って行ったのか洗たく機や風呂釜、灯油などが流れてしまっていた。

家の基礎まで掘られていて、このままだと家まで持って行ってしまふのではと思うと、家だけは助けてほしい。と祈る思いでした。

おかげで家は残った。

雨もやんで水の流れも少しになり、あの悪夢を忘れたかのように太陽が顔を出し、水がキラキラ光っていた。でも私達はこれからが大変だ。家の中をそれに外と、どうやったらいいのだろう。そんなことを考えると気持ちの持たないところがない。でも西原や関谷の人達はずっともっと大変だったと思います。

この災害の恐ろしさは、一生忘れられないと思います。

座談会

そのとき土石流は…

各地区の惨状を語る

西原・瀬之脇周辺の状況

昭和57年2月25日、西原公会堂、
26日、浅間塚公会堂で収録（併せてまとめました）

出席者

駒津 通夫	篠塚 久吾	田中今朝男	田中 文雄
田中 勝	中島 千好	篠塚 治	篠塚義太郎
田中 ふみ	田中 政宏	中島敬一郎	中島よし
中島 英	山岸 邦夫	和平かず子	和平 芳子

篠塚義 四時ごろだろうか、宇

憶えていない。

原川に行ってみたが、以前の増水

駒津 篠塚義太郎さんといっ

の時とあまり変らないので、家へ

しよに作業をしていたのだが、三

帰って床に入ってみた。しかしそ

本目の木流しの木を切った時、木

れでも気になるので、上の田へ

立ちよりも高く濁流が押し寄せて

行ってみると、もう水がいっぱい

きた。材木としぶきと泥がいっ

すぐに引き帰り身仕度をして外

しよになって、まっ黒な大きい固

に出たら、近くの人が二人みえた

まりが見えた。

のでいっしょに水防作業にとりか

あわてて義太郎さんと賢治君と

かった。

で逃げ下った。どう逃げたか憶え

立木を切り倒して木流し作業を

ていない。

していたが、水が多いので思うよ

中島千 俺は上の人たちより百

うにいかない。三人で木を手でお

メートルぐらい下流で作業をして

さえ、上流の方を見たら、五百メ

いたのだが、水が減ってきたので、

トルほど先に濁流がうす高く見え

ふた足ほど上へ行こうとした。そ

たので、「逃げろ、逃げろ」と大声

の時だ。上流を見ると、篠塚義太

でさけびながら逃げ下った。

郎さんの家の屋根より高くしぶき

が上り、木が立ったまま下の方へ

押ししてきた。三人で「それ逃げる」

と、草かきをかついで横道をかけ

上って川を見たら、ものすごい幅

で押し寄せてきた。

これは困った。公会堂の方まで

水がくると思い、そっちの方へ行

きかけうしろを見たら、宇原橋へ

土石流がはたつかった。そのとき

のしぶきと音はものすごいもの

だった。と同時に、田中ふみさん

の家が傾き、流されながら土手に

押しつけられた。そのときの川幅

は、公会堂の土手から宇原の篠塚

莊蔵さんの上の田まで広がって

いた。これは困った。これが生地獄

かと思った。

篠塚治 宇橋側から見ていた様

大門橋周辺の状況

昭和57年2月22日、中村公会堂で収録

出席者

青木 神次	駒津 行雄	篠塚 徹男
駒津 竹雄	駒津 芳平	田中 典文
中島 てるい		

時に篠塚義太郎さんの家がフワッと浮き上り濁流に押され、すぐ下の田中竹治郎さんの家も見えなくなった。

これはえらいことになった。横沢山がぬけ出したと思った。

田中ふ 炊き出しの仕度をする矢先です。「ゴォー」というものすごいうなりとともに、家がぐらぐら動いて歩くことができず、その

場に倒れてしまった。それからは何も憶えていない。

田中政 流されたときのことはまったく憶えない。助け出されるときには、家で子供と寝ている夢をみていた。頭の上で重機の音がして気が付き、声を上げて助けを求め、板をはぎ取り助けてもらった。

篠塚久 水のきたときは度肝を

出水当時の様子

青木 風はなかったが夜明けとともに雨は一段と強く、鮎川の水かさは大門橋の橋桁近くまでとどいていた。

困ったな、早生桃の最盛期なのにと思いながら家に帰ったが心配で、テレビの台風情報を聞いてから畑を見に出たんだ。六時ごろだと思う。そしたら、先ほどまであんなに増えていた水かさが減っていた。どうしたことかと……。

駒津行 五時二十分ごろ大門橋の様子を見に行った時は、ふだんより多少増えていた程度だったが、五時四十分ごろになるとかなりの増水となった。こんな大水は二度

抜かれた。家の中で見ていたら、竹治郎さんの物置だやら、義太郎さんの車庫だやら、トタン屋根が

ふたつ、裏の田んぼの中を流れて行った。これはあぶねと思い、「そんなこととして見ていれば家ごと流されてしまうぞ」と、家から逃げ出した。外へ出たときは水が膝まであった。

和平芳 まるで家まで呑むよう

と見られないだろうと、家の子供たちを呼んで橋の上で見た。

そのときは橋桁から一メートルぐらいい余裕があった。しかしだんだん水かさが増し、篠塚さんの仕事場の土手や資材が流れ出し危険がさまってきたので、商売道具の機械を流されては大変と連絡に行ったのが、六時十五分ごろではないか。

中島 六時十五分ごろ二階から河原を見たときは、もう川というか泥海のようで、材木がすさまじく流れていた。新田の公会堂前に二トントラックが流れてきたんです。

駒津行 そう、次から次に大き

な水のかたまりだった。家の裏から逃げて公会堂へ行った。

中島英 石と石との当たりや勾いがいつもと違うなと思っていたら「ゴォー」という音と同時に土石が山のように押し寄せてきたので、みんなといっしょに県道へ逃げ上がった。

な材木が大門橋の桁につっかかり棒立ちになってしまい、そこへ電柱が横倒しになって水をせき止めてしまった。見る間に堤防が切れ県道を割って田んぼを押し流して行った。高頭寺の大門で見ていたんです。田んぼの中を大木が水に乗って立ったまま流れていく様子はすさまじいものだった。映画で見た津波のような感じだった。

駒津芳 テレビでは、台風の被害の様子も出なかったし、消防団が出ていても、まだたいしたことはないと思っていた。ところがカッパを着て外に出ると、高津場の方から「逃げるノ逃げるノ」と大声が聞こえてきた。六時二十分

ごろだろうか。

駒津竹 小峽橋に行ったのは五時二十分ごろだったかな。橋は流されていたが、まだ残っていた。これは大水になると、家に戻り、早めに朝めしを食べようとして

ると、前の道路が急にそうぞうしくなった。六時三十分ごろだったと思う。さっき川を見て帰ったばかりなのにと思っていると、貞雄さんの声で、「早くきてくれ、瑞穂さんの家が流されてしまう」と。

取るものも取らずかけつけた。杉の太木で水がせき止められている。水の流れを変えるため、公会堂の植木を使って木流しを作った。公会堂の前に二トン車が流れて来ている。

今考えると、小峽橋を流したのは仙仁川の増水のためで、そのあとあばれたのは仁礼入りの水だろうと思うがどうだろう。

田中 しらじらしだしたころから五時三十分ぐらいだと思ふ。小峽橋は三分の一ほど流され、水道管が切れ水がふき出している。

市役所へ連絡をたのみに瑞穂さんの家に行き、こんなに水が増え

ているがだいじょうぶかね」、「ダメもあるし、心配ないんじゃないの」、「でも心の準備はしておいた方がよいな」と話しをして家に戻ったんです。

ところが、さっき別れたばかりの瑞穂さんが、アンコロ餅のようになすぶ濡れになって助けを求めてきた。みんないっしょに高い方へと逃げ上がりました。六時三十分ごろだと思ふ。

対岸に孤立

青木 大門橋があまりのすごさで渡れなくなり、家に帰られなくなってしまった。不自由な足を引きずりながら山を越え、やっとの思いで瀬之脇へ来ましたが、瀬之脇橋も流されており、仙仁の修一郎さん宅へ行き、ようやく電話で無事なことを家庭に伝えた。

駒津行 私も戻れなくなり、高願寺で朝食をもらい、電話で家族の様子を聞き、和久井泰男君と山を越え栃倉の下橋へ下りました。とてもつらかった。十一時ごろ

やっとなに着きほっとしました。駒津竹 貞男さんが、対岸の傾

いた屋根の上で、シャツを棒の先につけ助けを求めている。助けたいかどうか、どうすることもできない。水はその間にも仕事場の土手をくずしていくというふうで、とても歯がゆかった。八時三十分ごろだった。

みただけだった。駒津行 消防団は早くから出勤して危険なところを見まわっていた。こんどの土石流は防ごうにも防ぐことはできなかった。駒津芳 貞男さんの救出はもっと手際良くできなかったものか。二時間ほどかかった。

新田・関谷周辺の状況

昭和57年 2月24日、関谷公会堂で収録

出席者	
田中	利幸
松本	利市
和久井	花子
田辺	なみ
山岸	善澄

ただ果敢と：

田辺 朝、六時二十分ごろですかね。雨と風がひどいので、温室を見に行こうと支度をして表戸を開けたの。そうしたら、水がどろどろ入ってくるじゃない。まるで悪魔の足みたいだ。あわてて主人を呼んだんです。主人はまだ寝て

いて、そばの水路の水があふれた
ぐらいにしか思つてなかつた。

でも水はどんどん入ってくる。

これは大変だと、前の日旅行か
ら帰つて置いたままのバツタに仏
壇のお位牌をみんな入れ、気づい
た貴重品を詰めてはみたものの、
どうしたらよいか、ただ呆然とし
てしまった。

そしたら、消防の人が外から声
をかけてくれたんです。もうとて
も表は回れないからふる場へ行け
というの。ふる場の窓から、どう
にか屋根を伝つて抜け出し、主人
と二人、茂木蓬さんの田の濁流の
中をロープにおさまつて枒倉へ逃
げた。その時、もし大きな木材で
も流れてくれば、もうだめだつた
と思うんです。

田中 私の家は高台だし、川か
ら離れているから、五時ごろから
目は覚めていたが、かなり川の音
はするが、葦草が流れてきれいに
なるぐらいにしか思つていなかっ
た。川の石が流れることは、大雨
の度に何度も経験しているし……

でも娘は始めてだつたんでしょ
うな。石の流れる音がひどいので

三階の戸を開けて見たようです。

そうしたら、前の田んぼが一面
の湖。それで家族を起したんです。

私は、二十四年と三十四年に同
じような水増しに遭つていたから、
これは河原の方の家は完全にやら
れたと思つて、本仕度をしてとび
出したんです。

もう死にももの狂い

松本 伊勢湾台風の時だったか
田をやられたことがあり、今度も
危険だと思つて、田んぼを見に車
で乗り出したんです。六時の
ニュースを見てからです。公会堂
へ寄ると、もう組幹事さんがヘル
メット姿で来ていた。五分ぐらい
話していただろうか。すでに小峽
橋が流されたという。あわてて車
で大峽瑞穂さんの家の前まで行く
と、なるほど橋が無い。

そうこうして一分ぐらいたつた
だろうか。突然ゴウーッという音
がしてきた。おかしいな、どうい
うんだやと思つたが、雨は降つて
いるし窓がくもつてよく見えない。
ちょっと窓を開けてみたら、黒
い大きな玉のようなものが襲つて

くるのが見えた。

これは大変、夢中で車をとび出
し、一段高い県道へ上つて振り
返つてみると、もう自分の車が流
されて行つた。追われるように県
道をとびくだった。もう死にも
の狂い。大峽久夫さんの角から関谷
の公会堂の方へ曲つた。その時は
まだここまでは水がきていなかっ
たから、大声で「逃げろ、逃げろ」

と叫びながら宮川さんの坂をの
ぼつた。そこで、裸で泥だらけに
なった人に会つたんです。誰だか
よくわからない。よく見たらそれ
が田中好人君だった。

坂をあがったら、すぐに濁流が
宮川さん宅の横をドーンと押し寄
せて行つた。

和久井 四時半ごろから川の音
がすごくて、寝ていられないんだ
よ。だから、薄明るくなるのを待っ
て、主人が下の河原の様子を見に
行つた。もうその時は畑は流れ始
めていて、小峽橋も流され始めて
いたといひます。それから水道
は止まるし、電気が止まる……

小峽橋が落ちそうだというので
近所みんなで見に行つたの。六時

二十分ごろだね。そしたら、大門

から水が堤防を切つて、新田の方
へ流れ出すのが見えた。
真黒いものが、もくり上つてく
る。とても説明できないほどだつ
た。

山岸 私は決まつて六時十五分
に家を出るのが日課。だからその
朝も車で新田の駒津竹雄さんの角
へ行つたのが六時二十分ごろかそ
の少し前だろう。白鳳寺(新田公
会堂)の辺にはだいぶ人がいたん
ですよ。その人たちがその時さか
んに「おい、水がそつちへ行くぞ」
というんです。バックで竹雄さん
の前まで戻ると、いま居た道を横
切つて、水がどつと流れて行つた。

大峽瑞穂さんが流され、稲に捕
まつて助かつたのも、この時では
ないか。それから関谷公会堂へき
たら、河原の方へ濁流が押し寄せ
てきた。

和久井 私らはずっと小峽でみ
てたけど、松本さんが走つて逃げ
ていくのが見えた。間に合わぬぞ
と思つた。追うように水が低いと
ころを這うように流れて行つた。

最初に襲った水は

山岸 最初に関谷を襲った水は、どうも大門の堤防を切った水じゃなくて、湯河原から上って中村を通ってきたものようだ。

松本 うん、大門の所でダムのようにたまって、そのうちに押え切れず、堤防が切れて一挙にどつと下へ流したようだ。

山岸 最初から堤防が切れていたら、関谷ではもつと犠牲者が出ただろうな。

小峽橋が落ちたのは仙仁川の増水のためで、宇原川が荒れたときはもう小峽橋はなかった。

松本 水が来たときは、救助といってもまったく手がつけられなかった。そのうちに少し水が引けてきたんだ。それとていうんで消防団もロープやはしごで救助をはじめた。おそらく十五、六人はそうやって助けただろう。

それからまた五分とたたないうちに、また水かさが増してきた。

田辺 私らが避難したのは、関谷でも一番最後のようでした。卯之原さんの家の方で、木南さん達が早くこい、早くこいと手を振っ

ていたけど、行こうとしてもあの水ではもう行かれない。消防の人がくるまでは、ただぼう然としていただけです。

山岸 水が引け、作業ができる見当がついたのが九時ごろだろうか。

被害をひどくしたのは：

田中 以前も大門の堤防が切れ水が入り、大峽久夫さんの家が被害を受けたが、堤防の外側が低い、水が広がらずに済んだ。途中で堤防をこわし、逆に水を本流へ戻したこともある。いまは埋立てをしたり、かすみ堤もなし、いったん水が入ると広がってずと下まで流れるしかない。これが被害を大きくした原因だろう。

山岸 何で大門で堤防が切れたのか。これは堤防の決壊箇所の工事をした人に聞いたんだけど、川を掘ると赤く染まった石が出る。

仙仁川の増水も影響して川底を上げ橋をじょうぶにしてしまった。だから橋が流れないで土砂と流木が詰まり堤防が切れたのではないか。

田中 川底は確かに上っていたな。

二十四年、三十四年にきたのがいわゆる大水というやつで、今度のは一も二もなく消防団の手間をかける間もなかった。消防団が活動に入っていたら、もつとえらいことをしてしまつたらう。

田辺 でも水がきた時間が明るくなってからでよかった。夜中だったらと思うとぞつとする。

山岸 あとで聞いたのだが、大峽久夫さんは三時ごろから起きていて、学校へ家族で避難したという。団地の人達も起したらしいが、過去に被害を受けた人は、それなりに気づくばりをするということだろう。

田中 消防は五時前に電話連絡で詰所につめていた。結果論だが川へ出ないで待機していたのがよかった。人間の力のおよぶものはなかったのだから。

山岸 待機し、半鐘を鳴らさなかつたことも、今度の場合はやかった。

洪水の過ぎ去ったあと（湯河原上）



□ 被災者は語る II

山羊は知っていた

常盤 河合信彦

稿を始めるにあたり、この度の災害で亡くなられた、十名の方々
の冥福をお祈りしたいと思います。

篠つく雨が降り続いた夜がようやく明けようとしていた。いまだボンヤリとした、薄明るさの中で、鮎川はどうなっているかと、川の方をのぞいてみてびっくりした。

普段は二、三尺の流れの川の水面が、地面より高い所を流れているのである。本当に水面が、地面より一メートルは完全に高いのである。一部が盛り上がって高くなることはよく見ることだが、そんなものではない。

仁礼に詳しい人はご存知かと思うが、湯河原裏手の堤防は三、四メートルあり、かなり立派なものだが、途中で直角に切れてなくなっている。その下流約二十メートルに小高い岩山があり、その間には全く堤防はないのだが、その地

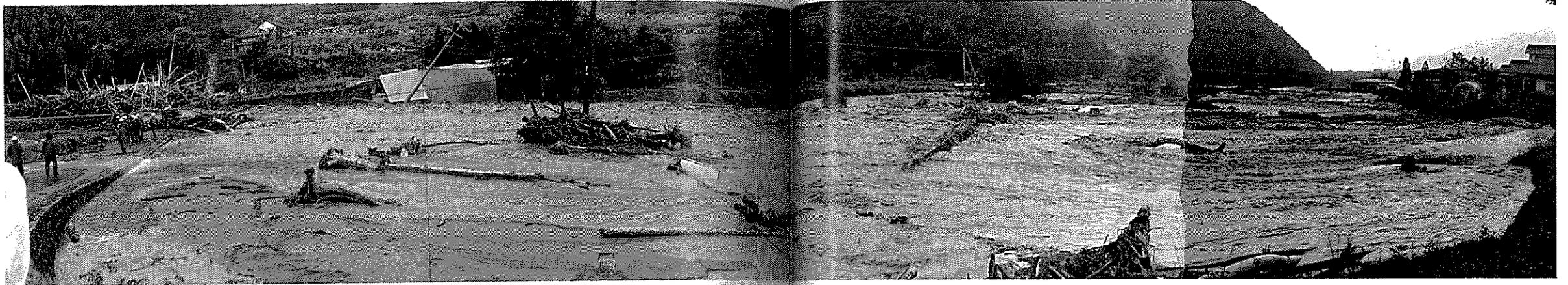
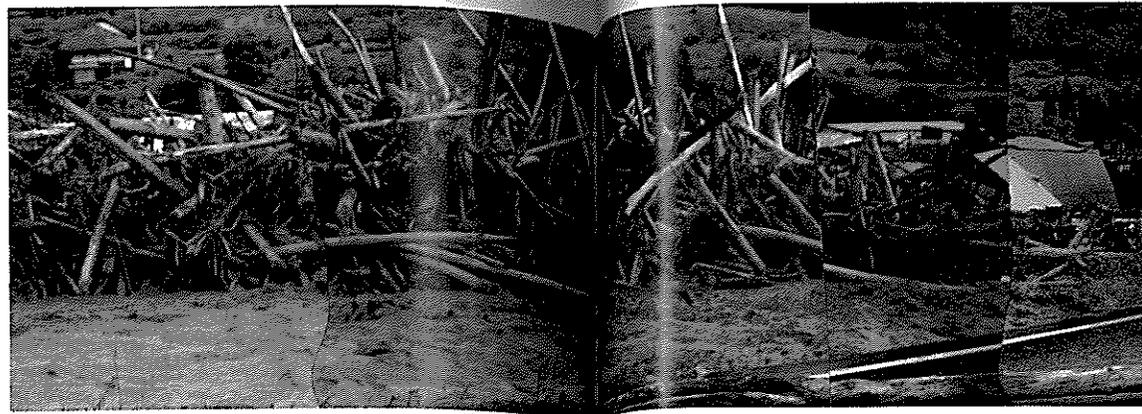
面より一、五メートルは高い所を水が流れているのである。

こちらに流れて来ないのは、水流が下流に急速に向かっているの
で、こちらの低い地面へ流れて来ないのであり、逆に、こちらの水を引っぱっていくようなことになっていたらしい。

篠つく雨がこんなに続くのは珍らしい。「明日は日曜日だから好きな大工事でもするか。いや芝でも張るか。それにしてもよく降る雨だなあー」などと、ブツブツ言

いながら就寝したのは十時頃か。夕方から降り始めた雨が文字通りの篠つく雨に変わったのは午後九時頃だったか。屋根を打つ雨の音で人の会話も聞こえないほどだった。そのうち止むだろうと眠ったらしいが、雨の音と「ゴロンゴロン」、「ゴツゴツ」という川を流れていく大石のため、まるで地震の

大門橋、押し寄せた流木の山



護岸、県道が決壊、新田・関谷は洪水の海と化する

ように家が揺れるので、時々目覚めて川の方はどうなっているのかと見るが、暗くてまるで判らない。午前四時頃か、隣りの材木屋さんのフォークリフトが動き廻っている音で床を出た。これは何かあるかも知れないと、思ったのである。しかし、あたりはまだ真暗やみである。昨夜来の豪雨は一向に衰えないで、「ザー」という音が恐ろしいほどだ。そのうち、ボロ屋の我家のことで、天井裏で「ポトン、ポトン」とやっていたのが、いよいよ布団の上へ落ちて来たり、壁が濡れて、弱っていたのが台風で飛ばされ、壁が落ちて来たり、大変な騒ぎになっていた。

夜明けと共に川を見てびっくりしたことは先述しましたが、みんなを一カ所に集めておき、丸山の母にもこちらへ集まって相談すると、以前湯河原の堤防の出来る(昭和四十年頃の由)前でも大水が出たが、床上浸水になる直前でおさまった。

今は堤防もあるし、宇原川上流に大きなダムがあるから絶対大丈夫

夫と自分の部屋のある、川近くの離れに帰られてしまう。

それで、こちらも安心していと、例の地面より高い水面がさらに高さを確実に増している。川の際に山羊小屋があったのだが、山羊は本能的に感じるのだから。狂ったように暴れて、網を外そうとしているので、上流を確めながら切れる用具で、とっさに網を切つてやる。(後で思い出して危ないことをしたと冷汗が出た)。午前六時頃だった。

どうも様子が変である。いつもの川の様子ではない。避難しようかと言うが、そういう時は半鐘が鳴るだろうと外に出てみたが、鳴っていない。それでも避難命令が出ているかも知れないと消防団長のお宅へ電話すると、団長さんは出ていて良く判らないという。私の属する常盤組の親しい人に電話すると、上の方では堤防が切れかかっている所があるらしいという。ならば何か知らせがあるだろうと外へ出て、庭へ流れ込んでくる水に水路をつけてやったりしていると、まもなく、上流の方を消

防団員が、「顔面蒼白」とはあのことか緊張しつくした顔で、バラバラと逃げて来た。「鉄砲水だ、先生、逃げないとやられてしまう」と聞いて、こちらも、一瞬、顔面蒼白になるのが判った。大急ぎで「逃げる、何も持たないで逃げる」と大声で怒鳴るが、みんな恐ろしが判らないらしい。

子供たちは、一カ所に集まっていると聞いたのに、のんびりと自分の部屋にある二階へ行っている始末。(こういう際、家族を一ヶ所に集めておくことの大切さを痛感した)。その間にも水は、ひざから腰の近くまで来ていた。

鉄砲水ときいて、まさに、身の危険を感じた。山と鉄砲水とはつきものであり、必ず死者が出ると登山者から聞いていたので、いつ何時、小山のような津波が押し寄せ、この家を押しつぶすという、恐怖にかられ、身はガクガクと震えたのである。この時は、六時三十分頃のことと思うが、十二時ぐらいまでのことは無我夢中のうちに時間が経ち、一年分の時間が経過したようであった。

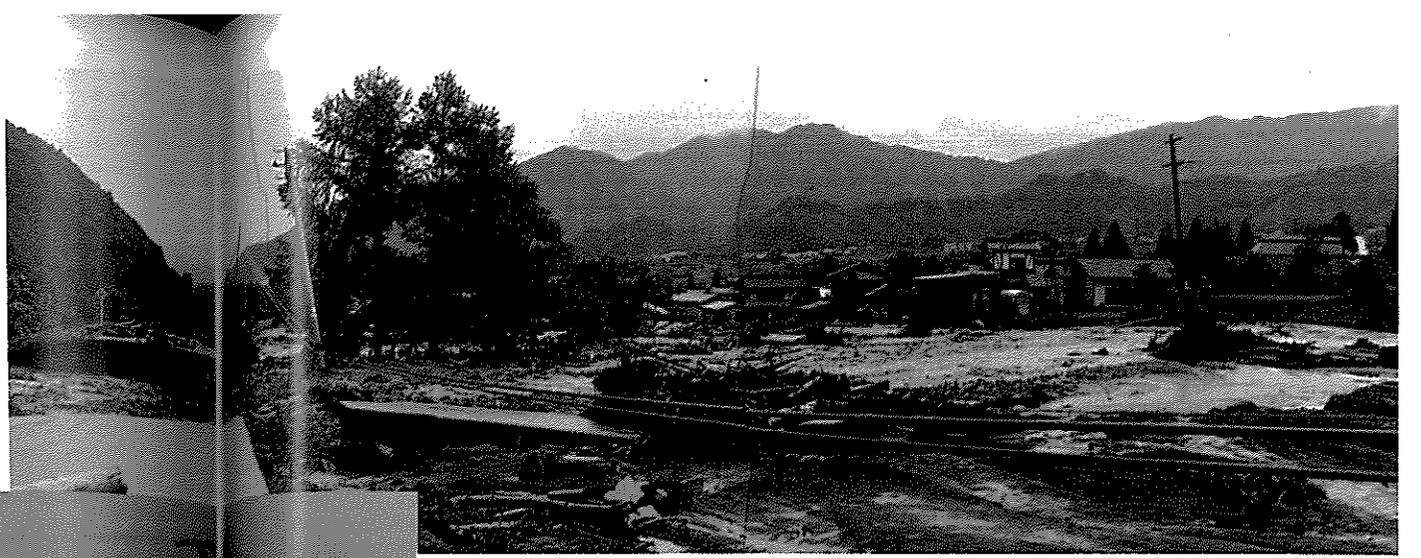
◇◇◇

十人の方々が命を落とされたこと、一人で逃げたと思っていた母が逃げ遅れ、屋根伝いに逃げたこと、宇原川上流では、一つの小山が流失してしまったこと、等々後で続々と耳に入って来た。後片づけでは、部落の方、村の大勢の方々の応援を受けて大変力づけられた。一週間にもわたる無料奉仕は、都会では考えられないことだ。しかしどんな事にも良い面もあれば悪い面もある。美談ではある。

有給休暇のとれるサラリーマンはよいと思うが、そうでない人は大変な苦勞だったと思う。人海戦術はすべて区へ、まかせ切りであった行政サイドに問題はなかったか。

例えば、自衛隊等の応援をなぜ求めなかったか。区民にしてみれば、都会と同じ税率で税金等払っているが、一週間もの間、半強制的にかり出されるのには抵抗を感じた人はいなかったのか。公の人、ただ区の人の命令するだけであったように思う。

これが素朴な印象であった。



大門橋決壊地点



復旧後の同地区

現在（一九八二年三月）河川の復旧工事が盛んに行なわれている。ダム工事を使う大型土木重機が動き廻っている。

実にたのもし限りだ。早い復旧が望まれる所だが、バランスのとれた堤防、橋梁、ダムの建設が必要だろう。素人ながら、この大きな体験を通して、河川管理に関して多くの学習をさせてもらった。

つまり、高頭寺前のコンクリート橋がもう少し弱い構造のものであったら、流木がからまって中村の方へ、濁流が行くようなことはなく、二名の者は死なずに済んだかも知れない。あるいは、もう少し高い所に橋梁があってもよかつたろう。あるいは、橋の周囲の堆積していた土石をさらっていけば、あははならなかつたろう。始めの流木さえからまなければ、あとはほとんど堀れてゆくだろう。反対に宇原部落にかかる橋は見ている前で浮き上がり流されていったと言いが、もしこれがそのまま残り、流木等で一時せき止められたら宇原部落は半分は流失したろう。などなど。

湯河原裏の堤防は約五十メートルに渡って流失して全くその跡をとどめない。湯河原へ一直線に進んだ本流と化した濁流が湯河原の堤防を呑み込んで、元の流れに戻れず、旧の湯河原温泉を一番みにして、突っ切り、中村部落へ直進しただろう。思っただけで「ゾッ」とする。

バランスを欠いた強大な堤防、強大な橋は、かえって災害を大きくするものと思う。しょせん人間の知恵など、自然の力の前には無に等しいと思う。

◇ ◇ ◇
コンピュータで計算し尽された設計も、大きな災害の前に崩れ、こんなはずではなかつたのという声も何度か聞いて来た。思わぬハプニングが起こるのが自然というものだろう。大きなダム、大きな堤防が出来ると、それにより、警戒心が薄くなる。今回の災害でも、ダムが出来たから堤防は昔のものより大分改善されているという安心感が支配して、警戒体制が十分とれなかつたという点があったか。行政サイドがもう少し

介入しても良かったのではないか。自警団、消防団に任せきりでなかつたか。

私共は、早暁より、鉄砲水がドカッと来るまで、避難命令があるのではないか、「村ではこういう時は、半鐘でも鳴るのではないか」と外へ出て耳を澄ましたり、電話に注意したりしていたのであつたが、全く無かつた。

避難命令は誰が出せるのか。又いつ、どういう基準で出すかと思ふ。安はあるのか知らないが無ければ、早急に作成してもらいたいと思う。どんなに科学が進んでも、自然災害の前には、「三十六計、逃げるにしかずだ」と思う。そのために

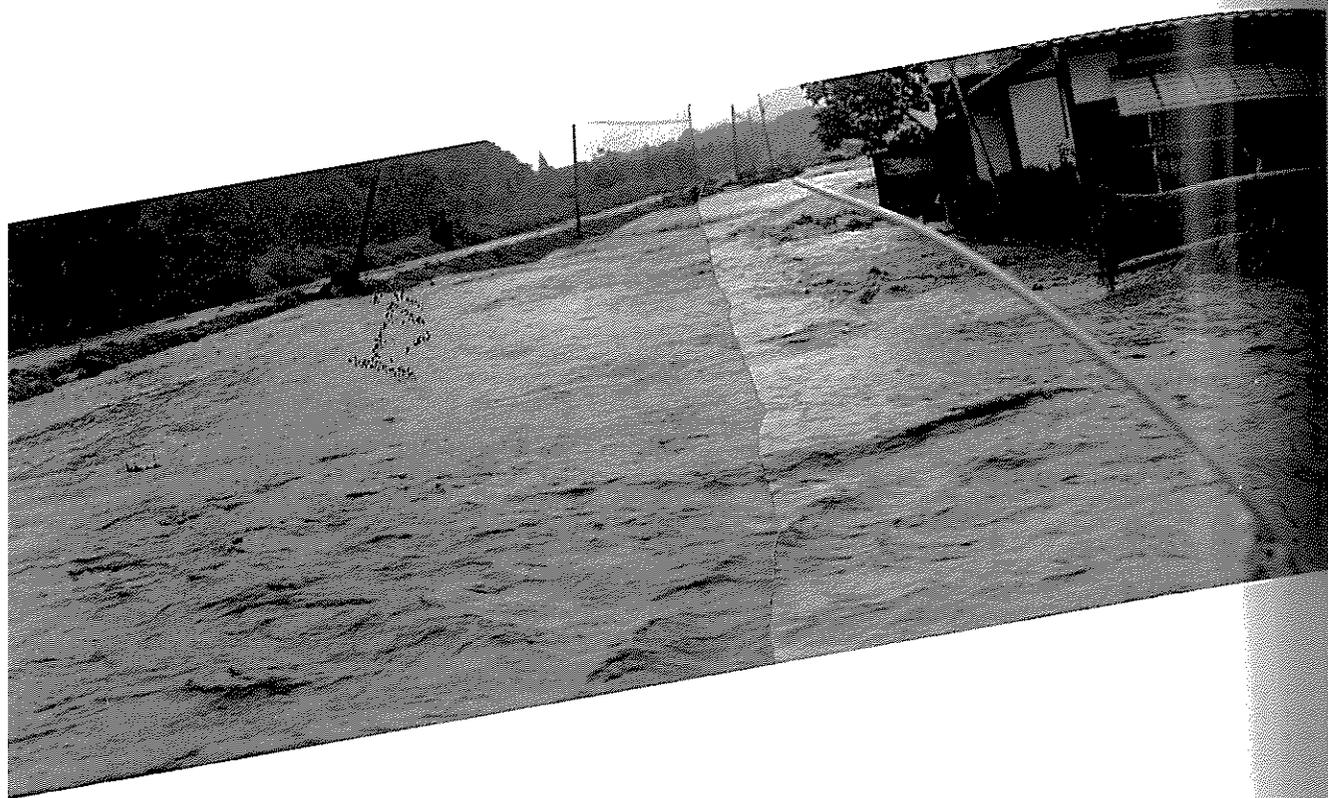
危機一髪

中村 富沢 準一

猛獣が角を逆立て、砂塵を巻き上げて突進する様に似た、あの土石流。その土石流に巻き込まれる寸前に、神仏の加護のもと、危機一髪数秒の間に妻ともども九死

に一生を得ました。

その朝、あまりの雨に心配、宇原川と仙仁川の合流点の下の田んぼの様子を車で見に行きました。そのとき、なにげなく川筋を見



濁流が襲う新田部落、トラックは中村から流れてきた

てあまりの恐ろしさに肝をつぶしました。左側のドアから無我夢中で転り出て、半身不自由な体で妻に手を引かれ、命からがら県道沿いの土手にはい上ると同時に、ものすごい早さで土石流が足下をさらって行き、命の縮む思いをしました。

山には木が、河川は整備され、平和な山村と思っていたのに。災

家が流されるぞ

関谷 山岸 嘉幸

先祖代々築きあげた家屋敷、田や畑、そして公共施設が一瞬のうちに濁流にのまれ、その上十名もの尊い命までも失うなんて……

八月二十二日午後遅く秋野菜の手入れに畑へ出た。雨は小雨なので逃げ帰るほどのものでなく、しばらく仕事に精を出した。だが夕刻より雨足が強くなったので急いで家に帰った。

「これはいよいよ台風の影響かな」ぐらいに思い、夕食をいつも通りにすませ、所用のため家を出

害は考えられませんでしたのに、土石流という大惨事がおこり、尊い命を奪い貴重な財産も一瞬のうちになくしたことが惜まれます。

自然を征服するのが人間の夢かも知れませんが、しょせん暗夜に向って矢を射る如く、人間の無力さをつくづく考えさせられました。亡くなられた方々に心から冥福を祈ります。

帰宅したのは多分十時半頃であつたと思う。途中車にあたる雨の音は激しかった。入浴をすませ、床に入ったが雨は一段と強くなかなか寝ることはできなかった。

たしか一〜二時間うとうとしたと思うが、その頃より鮎川は異様な音をたてていた。ふとして、堤防が決壊したら……と思うととても寝ているどころではなかった。しかし、考えてみれば以前と違って鮎川の堤防に沿って、新たな

に幅の広い舗装道路が走っているはずである。……と自分自身にあんど感をもたせながらも……寝むれぬまま一夜を過ごした。

翌朝(二十三日)早くテレビニュースを見た。情報によるとすでに房総に上陸した台風十五号は、千葉県北部を中心に北上中とのこと、表を見ると、心なしか雨は小降りになったように感じられる。

少し早い朝食にしようとして洗面所へ行き戸外の様子をみながら、歯ブラシをはじめたそのとたんに、妻達が大声を出し、「大変だ家が流され壊れてしまう」と叫んでいる。

驚いて歯ブラシをすて縁側に出てみると、確かに県道(長野中村線)に沿って我が家の方向に濁流と一緒に大きな根こそぎの材木、屋根、トタンそして自動車までも相当なスピードで流れるというより押し寄せてくるではないか。思わず「何も持たずに裏から逃げるんだ」と家族三人着のみ着のまま逃げだした。もちろん雨具等探す余裕はない。傘一本持つのが精一杯であった。

妻達は関谷公会堂の方へ避難した。私は家の廻りの道路に残り(道路は家より高い所にある)路上より表側を見た。すると家の中で見た濁流はすでに庭を埋め、その水位も上がっていた。数秒後には東側を廻った濁流が道路一杯すごい勢いで流れてきた。どうしたらこの流れだけでも家への流入を食い止める事ができるか、膝まで濁流につけ、ただ右往左往するだけである。家の裏にはブロック塀がある。その影響で流れが滞留してしまふ。塀をこわせば家への浸水度も少なくなると思い、手をかけ始めたが、その時すでに水位は床上四十センチ位のところに達しているではないか。もうある程度あきらめるより仕方がないと思いが、避難所へ行った。

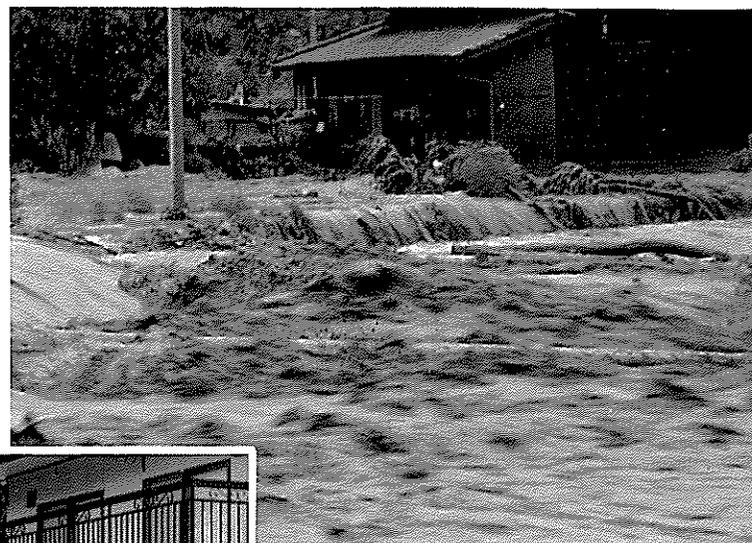
驚いたことに、西原地区の人達を中心に犠牲者、行方不明者が何人もいるという。又関谷地区にも不明者がいることを耳にした。信じられない気持で大分流れが減った家の近辺を廻ってみた。昨日までの住みよいのどかな風景は無残な姿に一変していた。



孤立する関谷の民家



軒先まで浸かる、洪水により、20数棟が浸水や損壊を被る



濁流が関谷部落を襲う



関谷地区の田畑は濁流の海となる



流木の直撃を受けた民家

どうしてこの様になったか深く考えることもできず、気がかりで家に帰り、表戸を開けてみた。すると中に滞留していた泥水が逆にどっと流れ出すではないか。家の中は畳の上に泥が一面にしかも相当な厚みがある。つい数時間前まで一家団らんの場合が、このように変わってしまうなんて、まったく信じられない。しばらくただぼう然とたたづんだ。

その夜は関係機関のご厚意によって公会堂で休んだが、明日以降、家の廻りに流れ寄せた木材、

濁流に囲まれて

新田 田中貞男

朝六時、テレビで台風の新ニュースを見ていると、保育園へ行っている子供がこのこ起きてきた。

ニュースを見ているうちに、大門橋近くにある自分の工場が心配になってきたので、そのチビと二人で車に乗り工場へ向かった。

鮎川沿いの県道を走っていくと小峽橋はすでに流されていた。

車に戻りながら大門橋の方を見ると、濁流が二、三メートルの高さで流木を絡ませながら押し寄せて来た。

「アッ、水だ、すぐにドアを開け乗ったとたんに「ドシン」と車の側面にぶつかって来た。

ブレーキペダルを踏み、チビを抱き寄せ頭をかかえて目を閉じた。「ギンギン バシーン」

目を開けると、フロントガラスが割れ落ち、さっき締めたばかりの工場の大戸がクシャクシャになって目の前を覆っていた。

大戸といっしょに工場の中ほどまで押されていたのだ。

車のドアは開かなくなってしまう、しかたなくひじでドアのガラスを割り、チビを外へ放り出してから、自分もやっと車から出た。

近くにブルドーザーが置いてあったのを思い出し、チビを小わきに抱え、工場の北側へ出て、やっとそこまでたどり着き、運転席にチビを乗せて大声で助けを求めた。

恐怖心と、風雨にたたかれた冷たさで体はガタガタと震えた。回りを見ると、南側にあった工

又床下に留っている泥の取り出し、庭などに滞積の土砂をどのようにするか、思案もままならず時間が過ぎた。

この悲惨で大きな災害が、自分も含めどうしてもっと早く予知できなかったか、残念でたまらない。又同時にこの土石流災害がもう一時間も早かったら、と思うだけでも身の毛がよだつ思いである。犠牲者のご冥福をひたすら祈りつつ……

一日も早く復旧に努力したい。

大門橋を渡り、工場の前で車を止め、チビは車に残したまま工場の戸締まりなどをしてしていると、消防団の人が来た。

「上流の方で何かあったらしいが、気をつけてくれ」

それを聞いて、早く家に帰らなければと、急いで入口の大戸を締め、車に戻った。その時である。

場も倉庫もみんな流され、何もなくなっていた。

大門橋に流木が針山のように突っ立っていた。

そのうちに、橋付近の右岸側の県道になっている堤防が突き破られ、濁流がドゥッと田の方へ押し寄せていったのが見えた。ほんの二、三分の間のできごとのように思えた。

これはえらいことだ。あの下の方には人家があるし、自分の家もある。

家では妻と娘がまだ寝ているかも知れない。

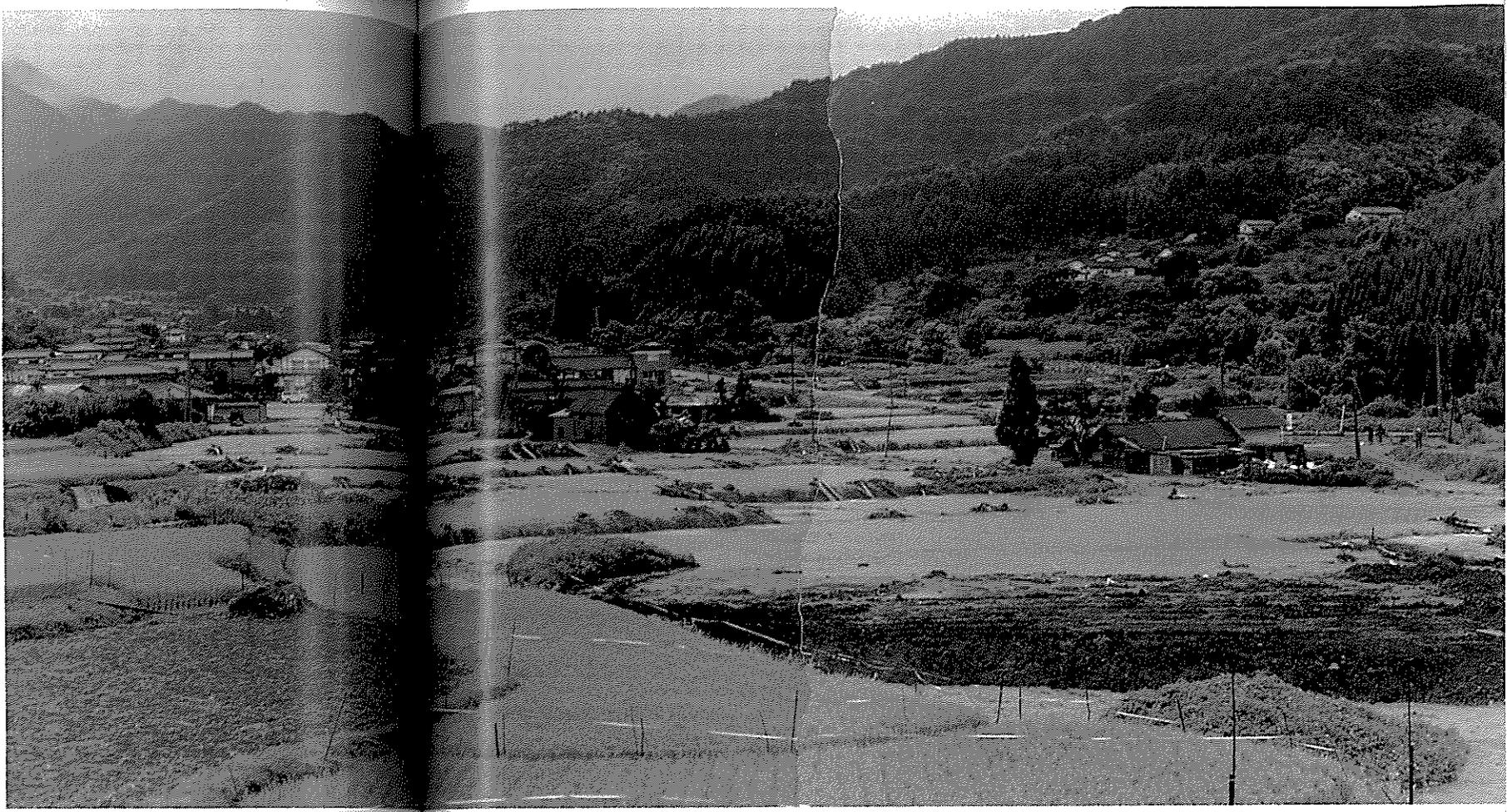
ああ、これで一家全滅か。そう思ってチビに、

「お母さん達も、あの水でどうせ死んじゃうから、お前はお父さんと死のうな」といったら、

「ボク、お母さんと死にたい」との返事。このひとことはいまだにショックである。

一時間半ほどその場にいたら消防のハシゴ車が来た。

そのときのうれしかったこと。全身の力がいっぺんに抜けるのがわかった。



洪水は田畑をなめつくし、民家を孤立させる（関谷）

恐ろしい土石流

関谷 中山 祝 次

八月二十三日の朝、昨日からの雨は屋根を突き破るばかりの音を立てて降り続いていた。前の日私は、長野市内で平屋建ての住宅を二階建てにする増築する、いわゆる「おかくら」という工事を手付けておいた。台風を予期して、十分な養生をしてきたものの、この雨ではいささか心配で、現場に行ってみようかと思っていたところへ、一階にある電話のベルが鳴り響いた。もしや屋根が飛んで、家の中に雨もりがしているという電話かと思いい、恐る恐る受話器を耳にあてた。しかし、それは消防団からの連絡で、水害警戒のため、すぐポンプ小屋前へ集合とのことだった。こうなるとは、工事のことは考えていられない。現場の方は会社へ手配して、すぐに出動した。部長の指示で四人づつの班に別

れて、鮎川沿いの警戒にあたることになった。私の班は小峽橋から枋倉上橋まで、堤防決壊の危険はないか、増水の状況、流れ具合などを見て回った。枋倉上橋を見てからポンプ小屋へ戻ろうと、小林さんの家の前まで来たとき、ふと南の上流の方を見ると、何枚も水田が続く中に赤い乗用車が流れて来るのが目に入った。班の一人が、「水だ、逃げろ」と大声で叫び、そのひと声で四人ともすぐに、東側の下川さん宅の裏の一段高い畑に向かって走り出した。水田の畔伝いのため、思うように走れない。間に合わないのではないかと思ったりしたが、人間とっさの場合は普段の数倍の力が出るものだ。全員が畑にかけ上って、数秒でゴッソと濁流が押し寄せ、水田を



横沢から枋倉上河原まで、鮎川沿いの田畑は全て流失した

思ってもみなかった出来事

関谷 田 辺 寿美夫

よく人に聞かれることは、「何時に水が来たか」ということだが、何しろ、あれよあれよという間に水が上ったので、時刻など頭になく、ただ六時ごろだと思えるだけだ。

雨の中を温室へ行くといつて外へ出た家内が、

「大変だ、水が入ってきた」と大声でどなった。私は、鮎川があふれるとは夢にも思っていなかったから、「何さわいでいるんだ。セギの水でもあふれたんだろう」と言った。家内が戻って来て、「大変だ、どんとん入ってくる」

県道の決壊（関谷地区）



同復旧

「と言うので、「そんな馬鹿な」と言いながら障子を開けようとしたら、とたんにすぎ間から畳の上に水が入って来た。」

あわてて障子を閉め、これは大変だと台所から外へ出ようとしたら、水はもう膝まであった。

急いで犬の鎖をはずし、外へ出て温室の方を見たら、ドラム缶が二つ、かなりの速さで流れて来た。振り返ってみると、家の庭はたいてい流れ込んで来ないのに、道路に通じる出入口はすでに激流と化していた。

このままだと家が流されると思いい、出口に積んであった材木で少しでも流れの方向を変えようとして、激流の中を見ると、厚さ二十センチ、巾五十センチ、長さが二メートルほどの板が引っかかっていた。

ふだんではとても持ち上げられそうにない板だが、これが庭の方へ水を呼んでいるようなので、何とか動かそうとしたが、どうにも動かない。そこで一步踏み出して両手で板を押そうとしたら、すつと板が流れ出し、同時に足をさら

われ、流されそうになった。

夢中で手を伸ばしたら、家の角の柱に手が触れた。あわててそれにつかまって、危うく流されずにすんだ。

○……○

このすごい流れではやりようがないと思い、家は捨てる覚悟で家の中に引き返し、貴重品を風呂敷とポストンバックに入れながらどうやって避難するか考えていた。

こういうといかにも落着いていたようだが、後になってみると、ポストンバックの中の位牌が逆さに入れてあったり、きちんと包んだつもりなのにノート類が、風呂敷にまるめこまれていたりで、何ともだらしないことだらけだった。

「田辺さん、田辺さん」と叫ぶような男の音が聞こえてきた。

ゴウゴウという音に混じってまたひと声聞こえてきた。

返事はしたものの、障子も戸も開けられない。どうしたものかと考えていると、台所の方から突然「居るかい」という声と同時に若い男の顔がのぞいた。消防団の人だ。



仁礼でただひとつ木橋だった
小峡橋も流された



被災者のための厚生住宅が建設された（昭和57年7月完成）

「さあ、俺について来なさい」
その声につられるように、家内と私はその人の後に続いた。全く夢中でふる場の窓から物置の屋根へ登り、消防の人が渡してくれた板を渡って田んぼへ降り、張ってくれたロープを頼りに、県道中村長野線の道路へ出た。

ともかく助かった。ズボンにはいくつも傷ができていた。流木に当たったり、何かでこすったりしたのだろう。いま逃げてきたところを振り返りながら、よくこの程度ですんだものだと思ふるいした。

○……○

どうしても関谷の公会堂へは行けないので、栃倉へ避難した。

関谷の方を見ると、田んぼは一面の濁流に侵され、ナイヤガラの滝があちにもこちちにもできたような光景となり、激しく流れていた。

広がった濁流は、関谷の県道へ上るあたりで急にしぼられ、鮎川の主流に戻っていちだんとすごい流れとなっていた。消防団の人たちが、一生懸命に木流しをして警戒にあたっていた。

午後四時ごろ、水はまだ相当流れていたが、遠まわりして関谷の公会堂へ行き、今晩は栃倉で泊めてもらうことを告げ、その晩は栃倉でお世話になった。

○……○

翌朝家に帰り、開かない障子を無理に開けて驚いた。

家の中は一面に三寸程も溜った泥でいっぱいだった。関谷組の方々が、家の内外のかたづけ作業に来てくださった。

ねつとりとした泥の処理は、骨の折れる仕事だった。二日ばかりでやっとかたづいた。

畳のない部屋。床板の上に雑然と置かれた家財道具。重い疲れと同時に、怒りとも寂しさともつかない被災した実感が強くこみ上げてきた。

○……○

家の高さほどある流木や、土石の山を、バックホーで取り除く作業と同時に行方不明の人を捜す作業が始まった。

東地域の人々をはじめ、大勢の市民の人が捜索活動に参加してくださった。千曲川も新潟県境まで



山流木の集積のため促進された復旧工事

捜したが、田中たま井さんだけがみつからないまま、八月三十日の朝を迎えた。

バックホーは相変わらずゆっくり慎重に除去作業を続けていた。

午前九時ごろ、私の家のすぐ近くの作業現場で「みつかった」という声があった。行ってみるとたま井さんは着物を頭からかぶったような姿で発見されていた。

区長さんが駆けつけ、やがて市長さんもみえた。検死が終り、見送られてたま井さんは霊柩車で、去って行った。

○……○

災害のあちこちでできた流木などのゴミの山は短期間でかたづけられたが、そのあとは荒野原のよ

うであった。

十月が過ぎ、プレハブでは寒く感じるようになって、ようやく元の住居に住めるようになった。

家財道具についた泥はなかなか取れない。寒くなるにつれ、泥落としはかどらず、いまだに泥のついた家具や本がかなりある。

暖かくなったら、また泥落しを始めようと思っている。

このたびの被災に際しては、公的機関を始め、地域のみなさんに本当にお世話になった。また、昼夜分かつたぬご活動には全く頭の下がる思いで一杯である。

厚くお礼申し上げます。

(昭57・2・25記)

土石流災害と

仁礼区の対応

関谷 山岸善澄

昭和五十六年八月二十三日、突如として仁礼地区を襲った土石流により、人命を奪い、負傷者を出し、住家、道路橋梁、農地、その他公共施設に大災害をもたらしたことは、生涯忘れられないでしょう。

大門橋を流木が山のようにの

り上げ、このため洪水は堤防を決壊し、新田、関谷地区へ流れ込み、田中たま井、ひとしさん

を呑み込み、二人は行方不明と なってしまった。

副区長のわたしは、区長に連絡するため電話をかけたが不通なので、そのまま八時ごろ河川沿いに西原まで行って驚いた。

すでに住家三戸が流失。さら

に行方不明者が数人いるのとこと。仙仁、宇原へ行く橋は流失し、電話も不通、もちろん行くこともできない。仙仁、宇原は完全に孤立し、篠塚区長は来るに

残る田中たま井さんは、二日

朝自宅より百メートル下流で発見された。一同悲しみのうちに胸をなでおろした。

後は市へ一日も早く河川、農地等の復旧が出来るようお願い申し上げた。この間、区民のみなさんにはいろいろご迷惑をおかけいたしました。

現在災害復旧も完成に近づき、力強い限りですが、ここにあの未曾有の災害から立ち上った区民のみなさま、復旧に心血を注いでくださった関係のみなさまに感謝申し上げ、謹んで犠牲となられた十名の方々のご冥福をお祈りいたします。

の捜索を続ける。



合同葬

昭和五十六年九月二十三日、藍色の空が目にしみる秋分の日、土石流のために瞬時にして尊い生命を奪われた十人の皆さんの合同葬が、仁礼会館広場でしめやかに行われました。

葬儀は、仁礼町区、須坂市消防団の合同葬儀委員会が主催し、ご遺族の皆さんはじめ、県知事及び県関係者、市長及び市関係者、国・県・市議会議員など、約二千人が参列して挙行され、心深くご冥福を祈りました。

15号台風災害死没者 (敬称略)

田中 貞 士 (41才) 西原
正 江 (45才)
百合子 (14才)

田中 ま す (58才) 西原
照 美 (29才)

田中 竹治郎 (71才) 西原
れ ん (69才)

篠塚 忠 志 (27才) 西原

田中 たま井 (94才) 関谷
ひとし (58才)



□ 復 旧

よみがえる里

被災直後から復旧活動は迅速に行われた。まず、道路、橋梁など被災した箇所の応急復旧、田畑や住宅地に大量に流れこんだ土砂や立木の除去作業。住民、建設業者、市関係者が一体となって行われた。

10月20日、須坂市は激甚災害地の指定を受け、本格的な復旧事業が計画され、仁礼地区だけでも数十億円にのぼる復旧工事や砂防ダム建設が実施されることになった。

そして3年後の今日、仁礼地区200余ヵ所にのぼる大規模な復旧事業は見事に完成し、深い悲しみに耐えてきた仁礼の里にも、ようやく明るさがよみがえろうとしている。



りっぱに完成した宇原川曲屋敷砂防ダム下流



林道大谷不動線の復旧工事（黒門～石小屋）





再び災害を被らないよう林道の付替えがされた（一之瀬～白清水）

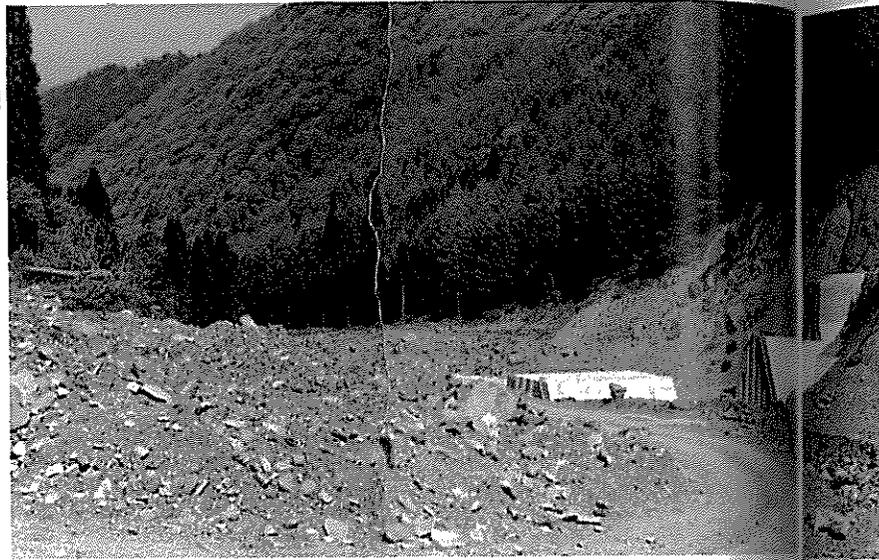


林道一之瀬橋は上流の復旧工事に
使えるように翌年三月に復旧した

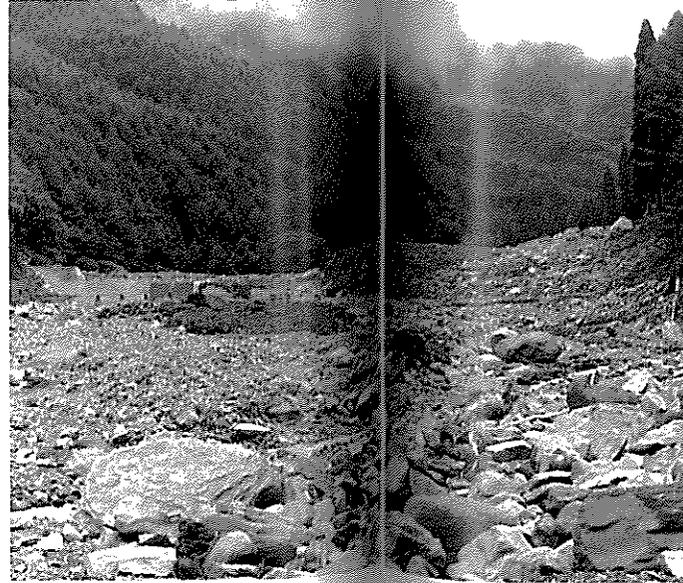




金山第一ダムも同時完成で建設中



袖コンクリートが破壊された一之瀬ダムも袖が完成、この下流に一之瀬第二ダムも建設される



砂防激甚対策事業による金山第二ダム建設が進む





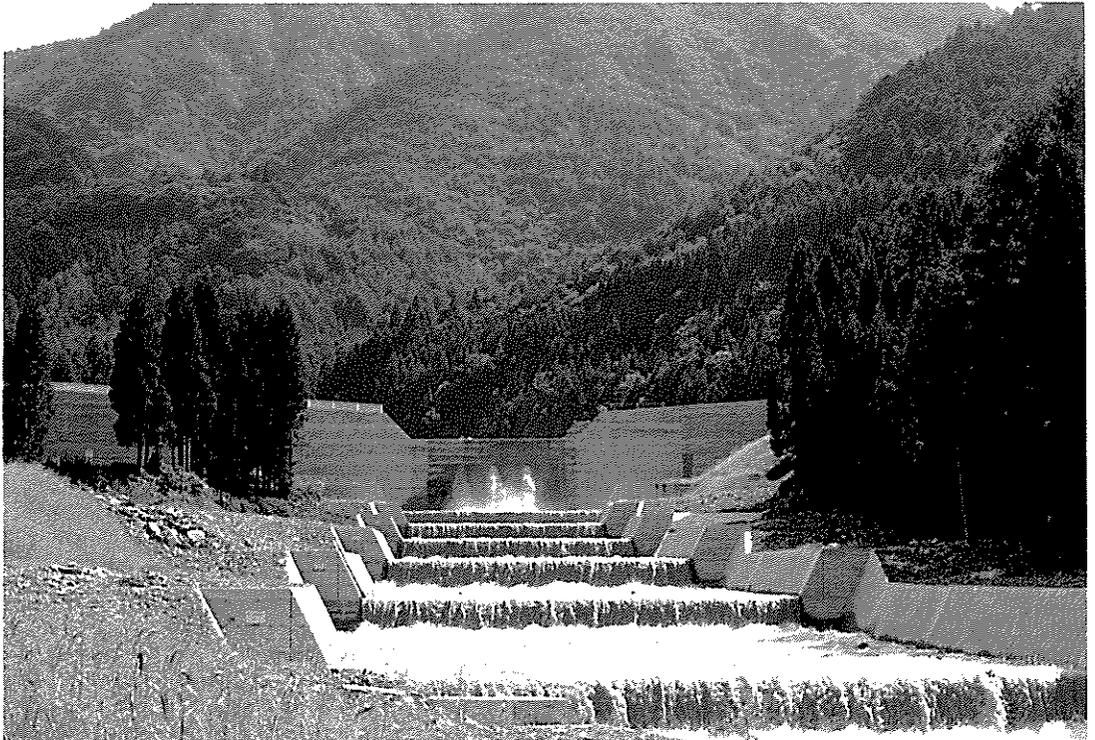
緊急治山事業により、谷止工が完成、ロット沢に五基建設される

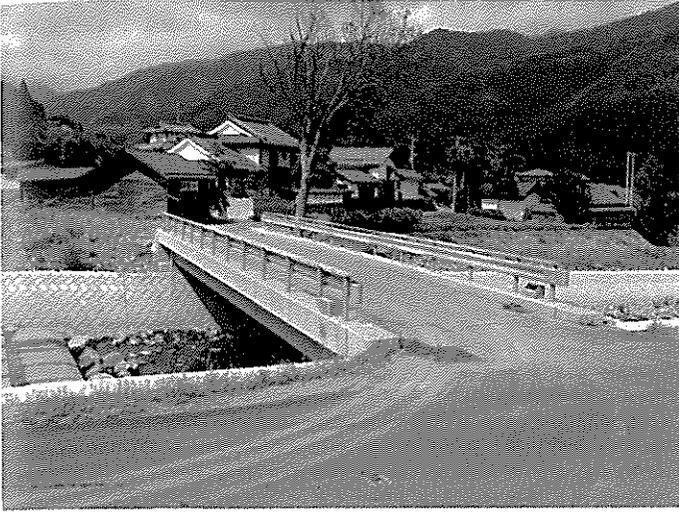
曲屋敷ダム建設にともない、市道が付替えられた





曲屋敷砂防ダムは二ヶ年で一番目に完成した（高さ17m、長さ146mの巨大なもの）
（58.9.29 台風10号の洪水）





復旧した宇原橋



市道と宇原橋、護岸も完成



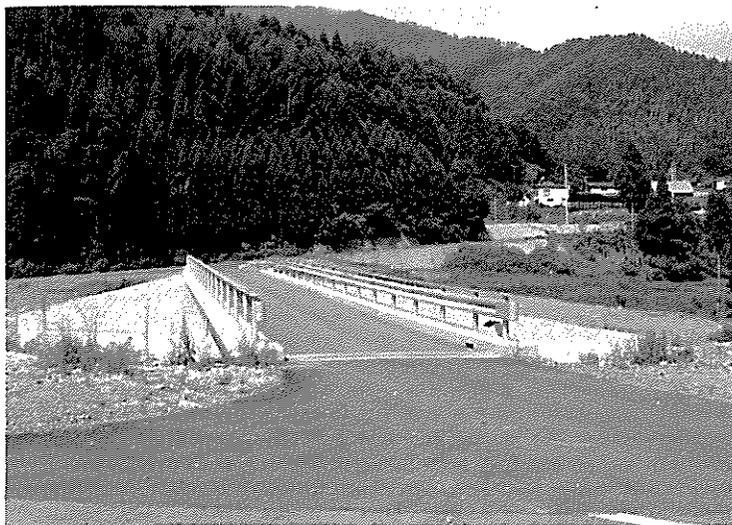
国道宇原橋、復旧とあわせて拡巾も行われた



湯河原まで流れた瀬之脇橋も見事に復旧した



復旧した大門橋



木橋だった小峽橋は永久橋に生まれ変わった



仙仁川熊日向に建設中の仙仁砂防ダム



上入沢砂防ダムは今年完成する



永久橋に復旧した温泉橋



復旧した田の入橋と護岸



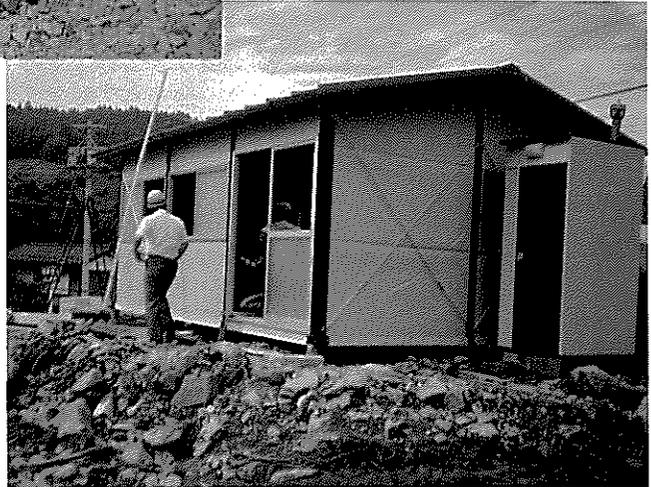
向山橋も永久橋に変わった



復旧整備された仙仁川

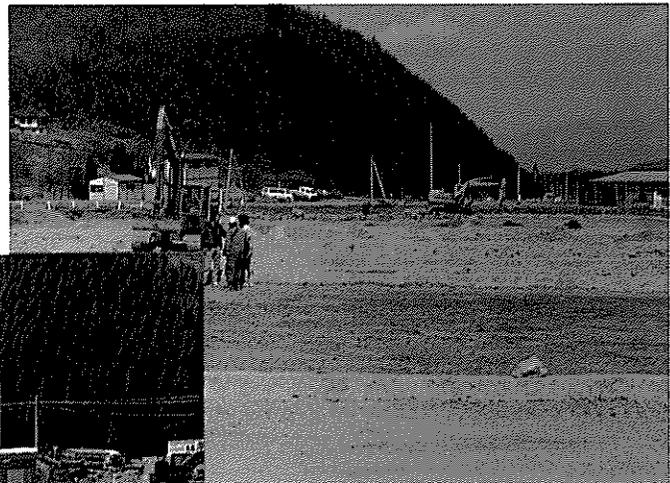


県道宇原橋ほか、仮設橋が架けられ、
工事中の交通が確保された



被災世帯のために応急仮設住宅が建設された

耕土は中野市から運ばれる（中村地区）



来年植付をめざして、
農地復旧も急がれる（新田）

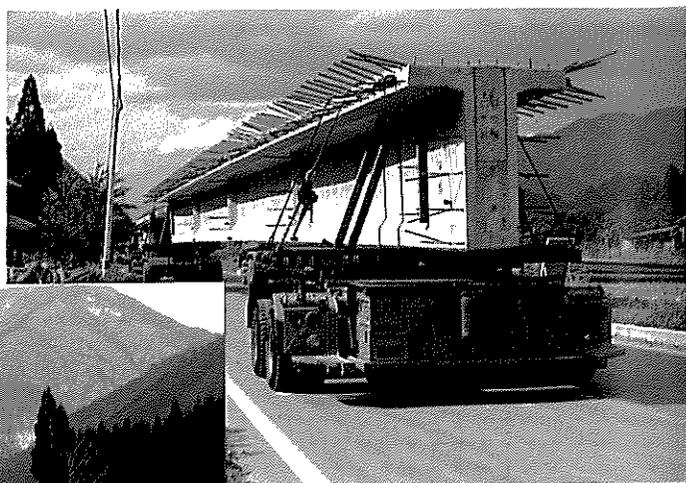


峰の原区は市道、水道が寸断され、
一時孤立する

避暑客の車8台も流されるなど
被害を受けたペンション通り

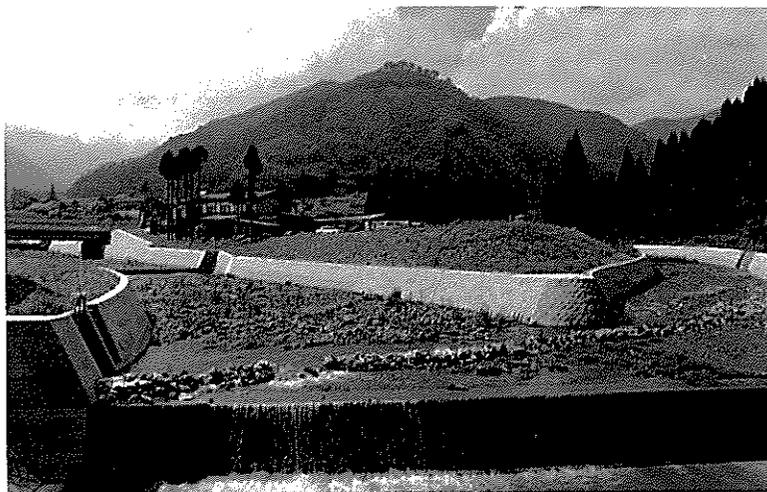


冬期間も休むことなく工事は続けられた



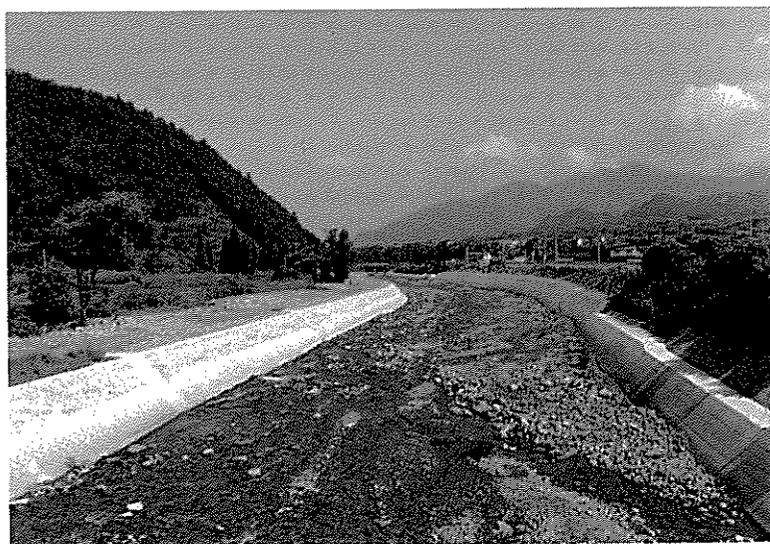
翌年の八月には橋も架かるほどに
工事は進む

仙仁川、宇原川合流点、中村頭首工も復旧



河川工事完成、新田付近（鮎川）

復旧整備された関谷付近の河川（鮎川）



土石流のつめ跡



橋梁流失

半壊・浸水

全壊・流失

半壊

洪水被災

土石流

金山第二砂防ダム

H=22.5m L=102.0m S57~59

既設一ノ瀬ダム

H=8.0m L=63.0m

金山第一砂防ダム

H=14.0m L=131.2m S57~59

曲屋敷砂防ダム

H=14.0m L=146.0m S56~57

一ノ瀬第二砂防ダム

H=9.5m L=106.0m S58~59

緊急治山谷止工

H=9.0m L=68.0m S58~59

復旧治山谷止工

H=10.0m L=51.5m S58

緊急治山谷止工

H=10.0m L=68.5m S=57

仙仁砂防ダム

H=14.5m L=98.0m S56~59

上入砂防ダム

H=14.0m L=70.0m S56~58

15号台風激甚災害

仁礼町における被害と復旧の状況

1 被害状況

(1) 人的被害

死者	10人	重軽傷者	16人
被災世帯	51世帯	被災者数	212人

(2) 家屋の被害

	住 家	非住家	計
全壊・流失	10棟	30棟	40棟
半 壊	9	3	12
一 部 損 壊	3	2	5
床上浸水	11	21	32
床下浸水	21	13	34
計	54	69	123

(3) 農業関係の被害

	箇所数	内 容	被害額
農地の流失、土砂流入	11	13.34ha	203,846千円
水路の流失、破損	25	3,296 m	75,307
農道の流失、破損	2	160 m	962
頭首工の流失、破損	10		125,181
計	48		405,296

農作物の被害	水 稻	21.3ha	26,744千円
	果 樹	0.8ha	776千円
	その他	5.6ha	5,615千円
	計	27.7ha	33,135千円

(4) 林業関係の被害

治山（溪流、山地の崩壊）

ロットの沢、たるの沢、小松沢、上入沢、小屋口沢、瀬之脇山

林道決壊流失

林道 5路線 17ヵ所 3,567 m
 橋梁 2路線 2ヵ所
 被害額 201,461千円

林産物の流失

立木 32.5ha 7,074m³
 素材 318m³
 特林 ほだ木 10,500本
 施設 12点
 被害額 93,351千円

(5) 公共土木施設の被害

(単位：千円)

	市 関 係		県 関 係		合 計	
	ヵ所数	被害額	ヵ所数	被害額	ヵ所数	被害額
河川の流失、決壊	6	24,911	25	2,221,246	31	2,246,157
橋梁の流失、決壊	7	280,497	4	239,087	11	519,584
道路の流失、決壊	29	155,118	20	148,400	49	303,518
その他	6	13,440				13,440
合計	48	473,966	49	2,608,733	97	3,082,699

2 復旧事業の状況

(1) 市が実施した公共土木施設関係

【工事費の単位は千円です】

種別	事業等の名称	箇所	事業内容	工事費	着手・完成	施工業者
河川	不動川	西原	横断水路 L=20.0m 護岸工 L=44.0m 蛇籠工 L=24.0m	14,240	57・3～57・6	マツナガ建設㈱
〃	細尾沢川	仙仁	護岸工 L=151.9m 床止工 12基 床張工 L=29.3m	4,320	56・12～57・3	須坂土建工業㈱
〃	横見沢川	蜂の原	根固工(布団籠) 77枚 水叩工 2ヶ所	2,600	56・12～57・5	㈱守谷商会
〃	〃	〃	布団籠工 L=46.0m	3,360	57・9～57・12	〃
〃	〃	〃	L=39.0m	218	57・9～57・9	〃
〃	〃	〃	L=33.0m	173	57・9～57・9	〃
小計		6		24,911		
道路	栃倉上河原線	栃倉	L=135.0m W=3.0m	8,720	56・12～57・3	㈱小布施建設
〃	中村関谷線	関谷	側溝工 L=65.0m 舗装工 A=73.2m ²	1,680	56・12～57・3	富士建設㈱
〃	〃	〃	路肩工 L=33.6m 側溝工 L=38.0m 舗装工 A=207.0m ²	2,520	56・12～57・3	㈱田中土建
〃	関谷河原支線 第1号線	〃	路肩工 L=152.0m 暗渠工 L=6.5m 路面工 A=200.0m ²	3,930	56・12～57・3	〃
〃	関谷生守線	〃	ブロック積工 A=30.8m ² 暗渠工 L=5.0m 舗装工 L=32.0m	1,090	56・12～57・3	㈱田中興業
〃	仁礼小峽線	新田	路肩工 L=14.5m 側溝工 L=15.0m 舗装工 A=15.0m ²	670	56・12～57・3	㈱高倉組
〃	〃	〃	路肩工 L=24.0m 舗装工 A=24.0m ²	1,080	56・12～57・3	勝山組
〃	中村高顕寺線	中村	路肩工 L=50.4m 舗装工 A=25.0m ²	760	56・12～57・3	㈱高倉組
〃	福沢瀬之脇線	瀬之脇	根固工 1ヶ所 舗装工 A=18.0m ²	1,800	56・12～57・3	須坂土建工業㈱
〃	仁礼大谷線外3路線	宇原	転石破砕 370.0m ³	4,770	57・1～57・3	大本・北条組 建設共同企業体
〃	細尾沢線	仙仁	側溝工 L=106.0m 法止工 L=71.2m 舗装工 A=323.0m ²	5,810	56・12～57・3	須坂土建工業㈱

道路	峰の原横見3号線 外1路線	峰の原	ブロック積工 L = 123.0m 舗装工 A = 791.0m ²	15,570	56・12～57・5	榑守谷商会
〃	峰の原横見3号線	〃	ブロック積工 L = 7.0m	720	56・12～57・3	〃
〃	仁礼大谷線	宇原	路面工 884m ²	950	57・3～57・3	榑北条組
〃	西原舟入線	横沢	コンクリート擁壁 L = 13.5m	250	57・7～57・8	勝山組
〃	〃	〃	〃 L = 15.0m	460	57・7～57・8	㈲田中興業
〃	〃	〃	路面工 A = 801.0m ² コンクリート 根固工 L = 46.0m	3,390	57・12～58・3	〃
〃	常盤仙仁線	仙仁	舗装工 L = 109.7m A = 505.0m ²	1,700	57・11～57・12	マツナガ建設㈱
〃	峰の原線	峰の原	コンクリート ブロック積工 L = 18.5m	5,300	57・12～58・3	榑旭建設
〃	〃	〃	〃 L = 23.0m	3,720	57・12～58・3	〃
〃	仁礼大谷線外3路線	宇原 横沢	復旧延長 土留工外 1,850.0m	62,880	57・11～58・5	榑北条組
〃	福沢瀬之脇線	瀬之脇	ブロック積工 L = 25.0m	1,940	57・10～57・12	㈲田中興業
〃	〃	〃	舗装工 L = 31.6m A = 142.0m ²	1,000	58・3～58・3	榑北条組
〃	白水沢線	仙仁山 (樽の沢)	コンクリート ブロック積工 L = 224.5m	16,380	57・9～57・12	㈲田中土建
〃	〃	〃	〃 L = 60.0m	6,080	57・9～57・12	〃
〃	第1ベンション道路	峰の原	L = 125.0m W = 4.0～8.0m	428	56・8～56・8	榑守谷商会
〃	峰の原横見3号線	〃	路盤工 L = 30.4m W = 5.0～8.7m	480	56・10～56・10	〃
〃	第1ベンション道路	〃	舗装工 A = 121.0m ² U字溝 L = 52.0m	420	57・6～57・6	〃
〃	福沢瀬之脇線	瀬之脇	L = 44.0m W = 4.0m	620	58・3～58・3	榑北条組
小計		29		155,118		
橋梁	寺社平橋	仙仁	L = 14.0m W = 2.0m	6,700	58・3～58・7	須坂土工工業㈱

橋梁	宇原橋	宇原	応急仮設橋 橋体工 L=10.0m W=0.9m	350	56・9~56・10	共立木材 ㈱
〃	田の入橋	仙仁	取付道路 上層路盤工 A=225.0m	2,140	58・2~58・3	勝山組
〃	向山橋	〃	取付道路 L=11.8m W=2.0m	810	57・2~58・2	マツナガ建設 ㈱
〃	小峽橋	小峽	取付道路 L=39.9m W=4.0m	3,790	58・2~58・3	㈱北条組
〃	県営事業へ委託 (合併施行)	6橋	小峽橋、瀬之脇橋、宇原橋、 田の入橋、向山橋、温泉橋	103,642		県営事業へ掲載 (工事費は重複)
小計		11		117,432		
応急復 旧ほか	小峽橋応急仮設道路	小峽	L=270.0m W=3.0m	820	56・8~56・9	㈱北条組
〃	峠の原横見3号線	峠の原	水路工 L=40.0m 暗渠工 2ヶ所 路盤工 A=281.0m'	7,480	56・9~56・10	㈱守谷商会
〃	峠の原駐車場	〃	残土運搬	580	56・12~56・12	〃
〃	細尾沢線	仙仁	土留工 L=14.7m	680	56・10~56・10	勝山組
〃	〃	〃	路肩、排水取付工一式	390	57・7~57・8	須坂土建工業 ㈱
〃	栃倉上河原線	栃倉	水路取付工 L=14.3m	3,490	57・6~57・7	㈱北条組
小計		6		13,440		
合計		52		310,901		

(2) 県が実施した公共土木施設関係

種別	事業等の名称	箇所	事業内容	工事費	着手・完成	施工業者
河川	公共河川災害復旧助 成事業(河川災害復 旧事業と合併施工)	鮎川 栃倉	L=600.0m(左岸600.0m 右岸600.0m) 護岸工 L=1,093.3m 帯工21基 床止工1基	170,580	57・1~57・9	㈱旭建設
〃	〃	〃 栃倉2	L=410.0m(左岸410.0m 右岸410.0m) 護岸工 L=772.1m 帯工13基(I型7基 6基)	107,740	57・1~57・9	〃
〃	〃	〃 関谷	L=610.5m(左岸610.5m 右岸590.0m) 護岸工 L=1,100.9m 帯工19基 床止工1基	169,470	56・12~57・9	㈱北条組
〃	〃	〃 中村	L=735.2m(左岸724.6m 右 岸735.2m)護岸工 L=943.8m 根継工 L=387.9m 帯工20基 床止工3基	212,080	56・12~57・9	〃

河川	公共河川災害復旧助成事業(河川災害復旧事業と合併施行)	// 西原	L = 446.6m 護岸工 L = 642.6m 帯工12基 床止工15基	221,170	56・12~57・10	マツナガ建設㈱
//	//	// 宇原	L = 575.2m(左岸575.2m 右岸575.2m) 護岸工 L = 642.6m 帯工12基 床止工15基	275,570	56・12~57・9	//
//	//	// 宇原2	L = 464.8m(左岸464.8m 右岸464.8m) 護岸工 L = 554.8m SI = 4.14m A = 2.080.4m ² 帯工12基 床止工11基	203,460	57・1~57・9	㈱北条組
//	//	// 仙仁	L = 999.0m 護岸工 L = 1,756.2m SI = 3.69~3.8m 根継工 A = 297.0m ² V = 148.60m ³ 帯工24基 床止工9基	238,076	57・1~57・10	マツナガ建設㈱
//	//	// 栃倉3	L = 1,038.5m(左岸1,038.5m 右岸674.2m) 護岸工(コンクリートブロック張) SI = 1.36~2.66m A = 3,828.3m ²	57,430	57・12~58・3	㈱旭建設
//	//	// 関谷2	護岸工 L = 418.5m(左岸145.7m 右岸208.5m) コンクリートブロック張 SI = 2.01~2.31m コンクリートブロック積 SI = 0.35~2.31m	10,490	58・1~58・3	㈱北条組
//	//	// 中村2	L = 370.9m(左岸370.9m 右岸369.5m) 帯工9基 床止工3基	153,860	57・7~58・3	//
//	//	// 中村3	L = 200.0m 護岸工 L = 224.2m SI = 2.8~8.6m 帯工6基	55,970	57・10~58・3	//
//	//	// 中村4	護岸工 L = 250.6m(左岸250.6m 右岸107.7m) 帯工4基 土留工 L = 89.8m 法留工 L = 90.4m	42,470	57・11~58・3	//
//	//	// 宇原3	L = 270.8m(左岸270.8m 右岸270m) 護岸工 L = 298.8m 帯工5基 床止工7基	148,120	57・6~58・3	//
//	//	// 仙仁2	L = 361.0m(左岸361.0m 右岸348.9m) 護岸工 L = 620.6m 帯工10基 床止工4基	90,180	57・6~58・3	須坂土建工業㈱
//	公共河川災害復旧助成事業(県単河川受託事業と合併施行)	// 栃倉I	取水工(伏越工)一式 堤外水路 1.0式	助成17,839 受託13,821 計 31,660	57・3~57・9	㈱旭建設
//	//	// 栃倉II	取水工 1.0式	助成13,673 受託12,197 計 25,870	57・3~57・8	//
//	//	// 西原	取水工 2ヶ所 φ 600	助成 1,139 受託 3,530 計 4,669	57・3~57・9	マツナガ建設㈱
//	県単河川受託事業(公共河川災害復旧助成事業と合併施行)	鮎川小峽工区	堤外水路工 一式 L = 90m W = 0.5m	5,714	57・10~58・3	㈱北条組
//	//	// 中村工区	取水工 一式	3,001	57・10~58・2	//
//	//	仙仁川仙仁	水路工U字水路 L = 803.4m 暗渠工 L = 83.7m 堤外水路一式 併一式	助成 9,473 受託 6,187 計 15,660	57・3~57・10	マツナガ建設㈱
//	//	// 関谷	取水工 一式	20,503	57・3~57・7	㈱北条組
//	//	// 宇原1	取水工 2ヶ所 φ 600	5,648	57・3~57・9	マツナガ建設㈱
//	公共土木施設災害復旧(56災河川災害復旧)	鮎川栃倉上	瀬追工 鉄線蛇籠 L = 210.0m 河道掘削 L = 377.0m	3,780	56・8~56・10	㈱北条組

河川	公共土木施設災害復旧(56災河川災害復旧)	鮎川 新倉	瀬追工鉄線蛇籠 L=50.0m 河道掘削L=320.0m	1,880	56・8~56・10	㈱北条組
"	"	" 小峡 橋下	瀬追工鉄線蛇籠 L=25.0m 河道掘削L=498.0m	1,740	56・8~56・10	"
"	"	" 大門 橋下	瀬追工鉄線蛇籠 L=30.0m 河道掘削L=152.0m	1,000	56・8~56・9	"
"	"	" 中村	瀬追工鉄線蛇籠 L=85.0m 河道掘削L=382.0m	5,450	56・8~56・11	"
"	"	" 瀬之脇 橋下2号	瀬追工鉄線蛇籠 L=70.0m 河道掘削L=463.0m	4,200	56・8~56・10	"
"	"	" 宇原 1号	瀬追工鉄線蛇籠 L=141.8m 河道掘削L=108.0m V=1,720.0m ²	2,600	56・8~56・10	マツナガ建設㈱
"	"	" 宇原 2号	瀬追工鉄線蛇籠 L=519.0m 3本掛 河道掘削L=320.0m	7,880	56・8~56・11	"
小計		31		2,297,921		
道路	公共土木施設災害復旧(56災道路災害復旧)	国道406 号線吉 崎平外 7ヵ所	防護棚工L=902.2m 内訳ガードレール622.0m ガードケーブル280.2m	3,630	56・7~56・9	㈱中木村製作所
"	"	" 樽の 沢下	土留工(ブロック積工) L=8.0m SI=2.0~5.6m	1,490	56・7~56・9	㈱高倉組
"	"	" 湯河原 橋上	復旧長L=35.9m土留工プロ ック積L=10.0mH=3.8~ 2.8m擁壁工L=25.9mH= 1.2~0.6m舗装工A=53.9m ²	2,510	56・11~57・3	富士建設㈱
"	"	" 湯ノ入	復旧長L=13.0m土留工(練 ブロック積)L=13.0mH= 4.0~4.8m舗装工A=19.0m ² ガードレールL=12.0m	1,940	56・11~57・3	"
"	"	" 水源 地下	復旧長L=92.0m土留工プロ ック積L=79.0mH=2.4~4.2 m舗装工A=277.0m ² 根固工1.6m ²	15,240	56・11~57・3	須坂土建工業㈱
"	"	" 水源 地下	仮工事盛土130.0m ² 蛇籠横引ℓ=77.0m(62本) 本工事盛土200.0m ²	1,740	56・8~56・10	"
"	"	" 仙仁山 1号	仮工事盛土150.0m ² 蛇籠横引ℓ=55.0m(44本) 本工事盛土940.0m ²	1,940	56・8~56・10	㈱北条組
"	"	" 仙仁山 2号	仮工事盛土400.0m ² 蛇籠横引ℓ=65.0m(37本) 本工事盛土55.0m ²	2,800	56・8~56・10	"
"	"	" 山の 神下	復旧長L=26.2m土留工プロ ック積L=26.2m暗渠がッ ク積L=2.0mH=2.0 ℓ=14.5m路盤工A=75.0m ² 舗装工A=75.0m ²	11,990	56・8~57・3	"
"	"	" 山の神	復旧長L=24.7m土留工(コ ンクリートブロック積)L= 24.7m 舗装工A=25.0m ²	5,970	56・11~57・3	㈱高倉組
"	"	" 山の 神上	復旧長L=59.0m土留工(ブ ロック積)L=56.0m 路盤工A=70.0m ² 舗装工A=70.0m ²	20,320	56・8~57・3	㈱北条組
"	"	" 仙郷橋 上3号	復旧長L=16.0m土留工(練 ブロック積)L=16.0m 舗装工A=24.0m ²	2,490	56・11~57・3	㈱高倉組

道路	公共土木施設災害復旧(56災道路災害復旧)	国道406号線 仙郷橋上4号	復旧長L=11.2m 根継工 L=11.2m H=4.1m 舗装工A=15.0m ²	1,470	56・11~57・3	(株)高倉組
"	"	長野県 須坂市 新田2号	敷砂利40m ² (L=85.0m) 盛立 1,280.0m ²	1,090	56・8~56・10	㈱北条組
"	"	国道406号線 樽の沢	復旧長L=24.0m土留工(コンクリートブロック積) L=24.0m 暗渠工 15.0m 舗装工 1.0式	7,820	57・10~58・4	"
"	"	長野県 須坂市 線中村	復旧長L=95.0m 道路築造工 L=95.0m W=7.0m	6,200	57・12~58・3	"
"	"	" 新田2号	復旧長L=92.0m 道路築造工 L=92.0m W=7.0m	6,240	57・12~58・3	"
"	"	国道406号線 茂助原	復旧長L=39.0m土留工(擁壁基礎ブロック積) L=39.0m ガードレール39.0m 舗装工 L=39.0m	9,900	57・10~58・4	マツナガ建設㈱
"	"	" 仙郷橋上1号	復旧長L=60.0m土留工(コンクリートブロック積) L=60.0m ガードレールL=60.0m 舗装工L=60.0m A=139.0m ²	8,480	57・10~58・4	(株)高倉組
"	"	" 仙郷橋上2号	復旧長L=50.0m土留工(コンクリートブロック積) L=50.0m	5,970	57・10~58・4	"
小計		20		119,230		
橋梁	公共土木施設災害復旧(56災橋梁災害復旧)	国道406号線 仙郷橋	復旧長L=12.3m土留工L=12.3m H=4.6m アスファルト舗装工A=14.0m ²	1,700	56・11~57・3	(株)高倉組
"	"	" 宇原橋	仮設工1号橋(パネル橋) 2号橋(1桁橋)	6,170	56・8~56・11	マツナガ建設㈱
"	"	"	下部工 橋台2基 取付護岸 1式	22,087	57・3~57・9	"
"	"	"	上部工 ポストテンション方式・PC単純T桁 L=27.5m W=11.0m	16,100	57・3~57・8	興和コンクリート㈱
"	公共河川災害復旧助成事業(県単河川受託事業と合併施行)	小峽橋	下部工 橋台2基 取付護岸 1式 取付道路 1式	助成 3,266 受託11,590 計 14,856	57・3~57・7	㈱北条組
"	"	小峽橋	上部工 ポストテンション方式・PC単純T桁 L=34.0m W=4.0m	助成 5,422 受託19,398 計 24,820	57・3~57・9	昭和コンクリート工業㈱
"	"	瀬之脇橋	下部工 橋台2基 取付護岸 1式	助成 2,824 受託17,047 計 19,871	57・3~57・8	㈱北条組
"	"	"	上部工 ポストテンション方式・PC単純T桁 L=32.4m W=4.5m	助成 3,321 受託21,435 計 24,756	57・3~57・10	昭和コンクリート工業㈱
"	"	市道 宇原橋	下部工 橋台2基 取付護岸 1式 L=25.7m 取付道路1式	助成 - 受託13,829 計 13,829	57・3~57・6	マツナガ建設㈱
"	"	"	上部工 ポストテンション方式・PC単純T桁 L=23.8m W=4.5m	助成 - 受託17,641 計 17,641	57・3~57・10	オリエンタルコンクリート㈱
"	"	田の入橋 向山橋 温泉橋	各々L=13.65m W=2.0m PC床版橋(橋台2基)	助成10,769 受託 2,702 計 13,471	下部工 57・3~57・6 上部工 57・9~57・12	マツナガ建設㈱

橋梁	公共河川災害復旧助成事業	大門橋	下部工 橋台 2基 旧橋解体一式	8,660	57・10~58・2	株式会社 橋旭建設
〃	〃	〃	上部工 ポストテンション方式・PC単純工桁 L=33.0m W=4.5m	25,160	57・10~58・3	昭和コンクリート工業㈱
小計		14		209,121		
ダム	緊急砂防事業	上入沢仙仁	本堰堤工 H=5.0m L=46.4m V=1,491.01m ³	50,530	56・10~57・3	守谷・旭建設共同企業体
〃	〃	仙仁川上入	本堰堤工 H=6.0m L=67.85m V=3,610.8m ³	99,560	56・10~57・3	鉄建・マツナガ建設共同企業体
〃	〃	宇原川 曲り 屋敷	堰堤工 L=84.0m H=4.0m V=4,159.78m ³	119,290	56・10~57・3	大本・北条建設共同企業体
〃	〃	〃	本堰工 H=14.0m L=14.6m V=11,102.97m ³ ウォーター ゲーション及砂水叩工 L=17.3m V=966.4m ³ 副堰堤工 H=2.4m L=85.8m V=1,460.81m ³ 水叩制 機工 L=6.92m V=352.53m ³ 前浜工 L=48.0m V=363.31m ³	366,700	57・5~58・3	〃
〃	〃	〃	市道付替工事 道路築造工 L=600m W=6.5m	29,170	57・9~58・3	〃
〃	〃	宇原川 金山 第1	堰堤工 H=4.0m L=48.8m V=2,910m ³	80,260	57・4~57・11	北条・中部建設共同企業体
〃	〃	〃	堰堤工 LH=0.0m L=39.6m V=694m ³	20,950	57・10~57・12	〃
〃	〃	〃 金山 第2	堰堤工 H=3.0m L=38.1m V=3,609.69m ³	120,870	57・4~57・11	北野・マツナガ・北信建設共同企業体
〃	〃	〃	堰堤工 H=2.5m L=38.3m V=1,299.61m ³	34,890	57・10~57・12	〃
〃	〃	上入沢 上入	本堰堤工 H=2.0m L=64.9m V=2,297.08m ³	62,440	57・4~57・12	守谷・旭建設共同企業体
〃	〃	仙仁川 仙仁	堰堤工 H=0.0m L=67.0m 付替道路工 L=614.6m W=5.5m	254,270	57・9~58・3	鉄建・マツナガ建設共同企業体
〃	公共土木施設災害復旧(56災砂防災害復旧)	宇原川 一ノ 瀬	復旧長 L=36.5m H=0.5~ 4.0m 堰堤工 L=36.5m H=0.5~4.0m 護岸工 L= 17.0m Sl=1.8m	7,200	58・3~58・6	中部建設工業㈱
〃	〃	樽の沢 樽の沢	復旧長 L=43.1m 鋼製堰堤 (スクリーン型104タイプ) 1 基 流路工 L=41.9m Sl=224m	7,420	57・10~57・12	株式会社 北条組
小計		13		1,253,550		
合計		78		3,879,822		

昭和58年度実施中の箇所（県施行）

（工事費は見込額）

種別	事業等の名称	箇所	事業内容	工事費	着手・完成	施工業者
河川	公共河川災害復旧助成事業	鮎川中村5	護岸工 A = 975.7㎡	14,800	58・6～58・8	㈱北条組
〃	〃	〃 関谷3	護岸工(ブロック積工) A = 1,442.0㎡	21,250	58・6～58・8	〃
〃	〃	〃 栃倉4	護岸工L = 130.0m 帯工5基 橋梁下部工(栃倉下橋) 橋台2基	6,430	58・6～58・12	㈱旭建設
〃	〃	〃 関谷4	護岸工L = 190m 帯工5基 床止工1基 橋台(栃倉上橋) 2基	109,300	58・8～59・2	㈱北条組
橋梁	〃	〃 栃倉下橋	上部工 ポストテンション・PC単純T桁 L=32.1m W= 5.5m	26,800	58・6～58・9	ピーシー橋梁㈱
〃	〃	〃 栃倉上橋	上部工 ポストテンション・PC単純T桁 L=32.4m W=7.5+2.5m	50,500	58・ ～59・2	興和コンクリート㈱
計		6		229,080		

(3) 農地及び農業土木施設関係

種別	事業等の名称	箇所	事業内容	工事費	着手・完成	施工業者
田	湯ノ前		0.05ha	926	56・10～56・11	㈱田中土建
畑	細尾沢		0.07ha	174	56・10～56・11	勝山組
田	関谷(1)		0.53ha	5,295	56・12～57・3	㈱田中土建
田畑	〃(2)		4.95ha	61,401	57・1～57・3	㈱マツナガ建設
〃	河原田		0.23ha	4,017	56・12～57・3	㈱高倉組
〃	大峽		0.56ha	6,026	57・2～57・3	㈱旭建設
水路	仙仁下堰		15m	1,750	56・10～56・12	㈱須坂土建
頭首工	ぜんじょう		1ヶ所	1,026	56・10～56・12	〃
水路	新田(1)		322m	2,492	57・1～57・3	㈱マツナガ建設

水路	新 田 (2)		48 m	946	57・1～57・3	㈱マツナガ建設
〃	道 祖 神 原 (1)		91 m	720	57・1～57・3	〃
〃	〃 (2)		44 m	318	57・1～57・3	〃
〃	大 峡		153 m	1,482	57・2～57・3	㈱旭建設
〃	河 原 田		66 m	648	57・1～57・3	(株)高倉組
田畑	宇 原		3.72ha	79,826	57・4～58・3	㈱北条組
〃	湯 河 原 (1)		1.46ha	29,412	57・4～57・8	㈱加和田建設
田	〃 (2)		0.1ha	1,493	57・4～57・5	(株)高倉組
畑	宇 原 上		1.62ha	14,000	58・3～58・3	㈱北条組
頭首工	枡 倉 (3)		1ヶ所	18,128	57・3～57・11	〃
水路	西 原 (1)		398 m	10,242	57・3～58・3	〃
頭首工	仙 仁		1ヶ所	8,962	57・9～57・11	㈱須坂土建
水路	小 峡		31 m	5,885	57・10～58・3	㈱北条組
〃	中 村		87 m	5,074	57・10～58・3	〃
〃	宇 原 (3)		184 m	4,212	57・3～58・3	〃
〃	城 下		47 m	3,716	57・3～57・11	㈱マツナガ建設
〃	西 原 (2)		317 m	3,657	58・2～58・3	㈱北条組
〃	浜 場		62 m	3,119	57・3～58・3	〃
〃	枡 倉 (2)		10 m	2,992	57・3～57・11	〃
〃	向 山		103 m	2,656	57・3～57・11	㈱マツナガ建設

水路	宇原 (1)		22m	2,587	57・3～57・11	㈱マツナガ建設
〃	仙仁上堰		16m	2,441	58・2～58・3	㈲田中興業
〃	湯河原		187m	1,544	57・4～57・7	㈱加和田建設
〃	宇原 (2)		121m	1,236	58・2～58・3	㈱北条組
農道	宇原東		130m	442	58・2～58・3	〃
水路	仙仁宮下		31m	600	57・10～57・10	㈱マツナガ建設
〃	関谷		80m	600	57・10～57・10	㈲田中興業
農道	浅間塚		30m	520	57・9～57・9	〃
水路	大峽		11m	400	57・8～57・8	㈱北条組
〃	仙仁		47m	330	57・7～57・7	㈱須坂土建
田	権現堂		0.05ha	1,276	57・4～57・4	宮沢工務所
合計		40		292,571		

(4) 林道、林産物関係

種別	事業等の名称	箇所	事業内容	工事費	着手・完成	施工業者
林道	仙仁線	1号	L = 421.0m b = 3.0m	14,652	56・11～57・3	須坂土建㈱
〃	〃	2号	L = 16.0m b = 3.0m	2,851	56・11～57・3	〃
〃	栗毛線	1号	L = 22.0m b = 3.6m	515	56・12～57・2	〃
〃	〃	2号	L = 11.0m b = 3.6m	291	56・12～57・2	〃
〃	〃	3号	L = 9.0m b = 3.6m	256	56・12～57・2	〃
〃	小松線	1号	L = 281.0m b = 3.6m	5,403	57・7～57・11	㈱北条組

林道	小 松 線	2号	L=14.0m b= 3.6m	2,929	58・3~58・7	株式会社北条組
〃	〃	3号	L=41.0m b= 3.6m	1,974	58・3~58・7	〃
〃	大谷不動線	1号	(一之瀬橋10.4m) L=124.0m b= 4.0m	20,142	57・1~57・3	〃
〃	〃	2号	付替 L=1,080.0m b= 4.0m	26,729	57・6~57・11	〃
〃	〃	3号	L=121.0m b= 4.0m	5,917	57・6~57・11	〃
〃	〃	4号	L=111.0m b= 4.0m	1,873	57・6~57・11	〃
〃	〃	5号	L=715.0m b= 4.0m	108,423	57・6~58・3	株式会社旭建設
〃	三ッ倉線	1号	金山第2ダムと合併付替 L=200.0m b= 3.6m	30,212	58・5~58・11	〃
小計	5 路 線	14		222,167		
林道	県単災害復旧事業 大谷不動線	1号	L=90.0m b= 6.0m	780	56・12~57・3	㈱宮沢組
〃	市単災害復旧事業 仙仁線		路面復旧 L=90.0m	150	56・12~57・3	須坂土建株式会社
〃	大谷不動線		〃 L=150.0m	270	56・12~	㈱宮沢組
〃	〃	2号	法止工 L=12.0m	270	57・2~57・3	株式会社北条組
小計		4		1,470		
合計		18		223,637		
治山	緊急治山事業	ロツ ト沢 大谷 不動	谷止工 L=68.5m H=10.0m	61,800	57・5~57・11	株式会社旭建設
〃	〃	たるの 沢	谷止工 L=29.0m H=7.0m	16,488	57・7~57・11	株式会社北条組
合計				78,288		
林産	立木被害		32.46ha 7,074m³	78,127		
〃	素材被害		318m³	8,630		

林産	施設被害		2ヵ所	5,200		
〃	特林被害		ほだ木 10,500本	1,394		高甫地区含む
合計				93,351		

(5) 水道施設関係

種別	事業等の名称	箇所	事業内容	工事費	着手・完成	施工業者
水源 復旧	たるの沢水源第1・ 第2復旧工事	仙仁	集水柵2基 仕切弁4基 銅管φ180L111.9m φ100L92.3m	15,534	56・12~57・8	榑北条組 須坂支店
浄水場 新設	〃	〃	ろ過池3池 着水弁1基外	113,230	56・12~57・9	〃
送配 水管	仙仁西原線送配水管 本復旧工事	〃	送水管 DP150L67.6m 配水管 DP150L69.0m	1,660	56・9~56・9	須坂土建工業榑
配水管	中村栃倉線配水管本 復旧工事	仁礼 関谷	DP100L50m	524	56・12~56・12	(有)信東産業
応急 復旧 送配 水管	仙仁西原線送配水管 (宇原橋)復旧工事	宇原	送水管 DP150L51.5m 配水管 D75L52.8 外	1,850	56・9~56・9	マツナガ建設榑
〃	仙仁西原線送配水管 (湯河川橋) 復旧工事	仙仁	送水 ビニールライニング D125L21m 配水 ビニールライニング D125L21m	575	56・9~56・9	(有)宮沢組
送配 水管	仙仁西原線送配水管 本復旧工事	〃	送水管 銅管φ150L28.15m DPφ150L14.0m 配水管 銅管φ80L29.4m DPφ75L13.8m	2,065	57・12~58・1	マツナガ建設榑
配水管	新田小峽線 配水管本復旧工事	小峽	DP75L30.2m 銅管80L39.4m	1,348	57・12~58・1	榑北条組 須坂支店
導水管	西原低区導水管復旧 工事	西原	DP150L134m 250L166m 外	5,960	58・2~58・3	〃
送水管	西原高区送水管復旧 工事	〃	DP100L143m 150L51m 外	3,457	58・2~58・3	〃
配水管	昭和56年度15号台風 災害時の原水道施設 復旧工事	峠の原	硬質塩化ビニールパイプ D75L28m 仕切弁、消火栓各1基	1,765	56・11~56・11	榑旭建設
復旧 配水管	第2配水池系横沢上 流配水管復旧工事	〃	硬質塩化ビニール管布設 D100L=24m	78		直 営
〃 導水管	りんどう台水源導水 管復旧工事	〃	D75L=2m	33		〃
合計		13		148,079		

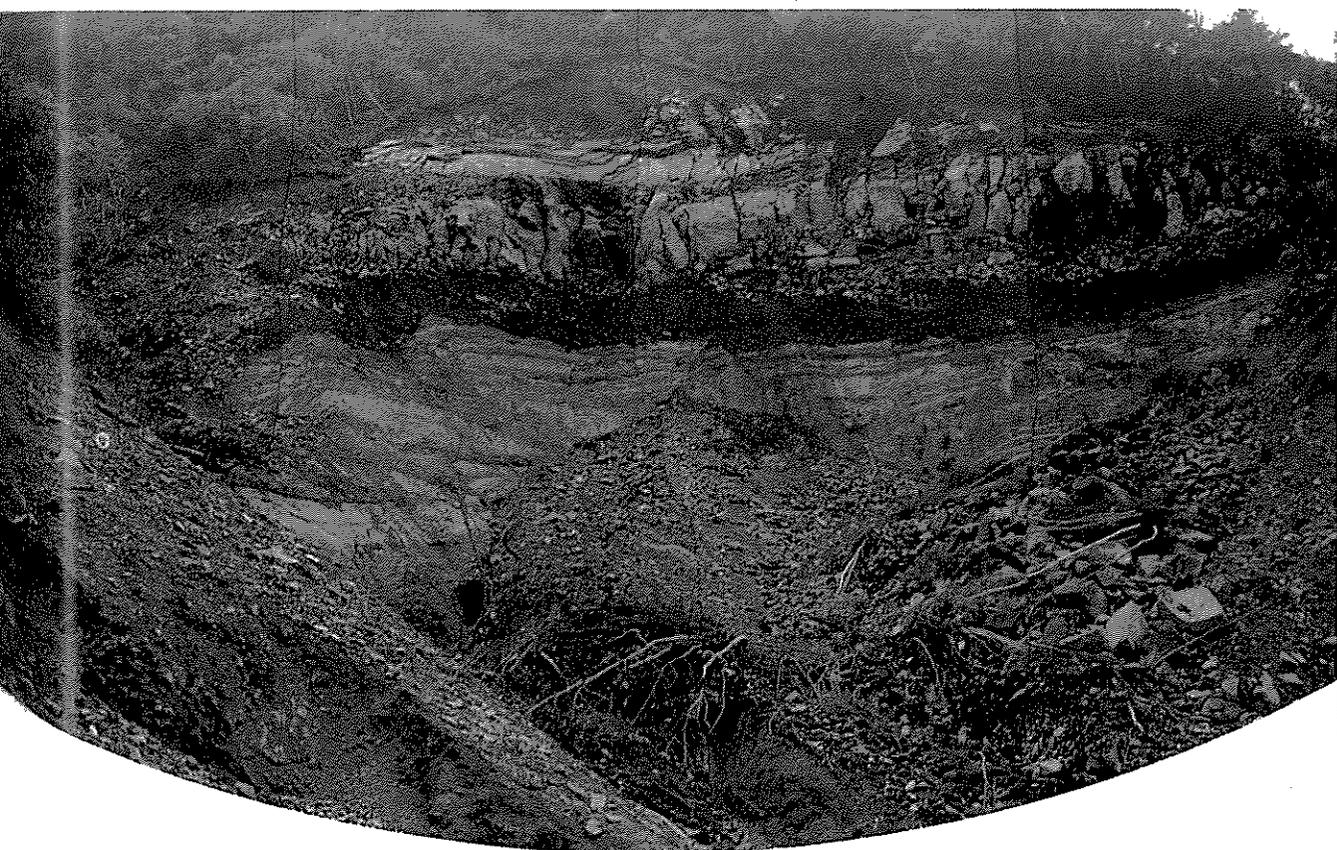
(6) 復旧事業の合計

	箇所数	工事費
合計 (1)~(5)の計)	207ヵ所	5,255,729千円

考 察

宇原川土石流災害の原因

土石流発生の根源となった崩壊地





発生した沢は、名前もない支流の支流であった

―はじめに―

八月十六日沖大東島南方約六百キロの海上で発生した台風十五号は、ゆっくり北上を続け、二十三日北緯三十度の地点から速度を早め、二十三日午前四時半千葉県館

山市付近に上陸、仙台、津軽海峡を経て同日午後九時稚内沖にぬけたあと、温帯低気圧となり次第に衰退し消滅した。
須坂建設事務所が峰の原千峰苑に設置してある雨量計の観測デー

ターによると、台風十五号がもたらした雨は二十二日午前八時三十分ごろから降り始め、午後六時から急速に激しく、やがて豪雨となり、翌二十三日の午前七時まで降り続き、その後小降りとなって午

前十一時三十分ごろ雨はやんだ。降り始めてからの総雨量は二百

二十四・五ミリに達し、一年に千

ミリとは降らないこの地域では、

観測史上最大の雨量となった。

とりわけ二十三日早朝には、時

間雨量三十ミリの豪雨が四時間も

続き、全体雨量の半分以上が、こ

の時間に集中して降ったわけであ

る。

この集中豪雨が原因し、宇原川

源流部で、特異な地層の崩壊によ

る土石流が発生、六キロの沢すじ

を一気に流下し、西原地籍を直撃、

その勢いは仁礼地区を縦断して十

名の人命を呑み込む大惨事となっ

た。

―土石流発生地点―

字仁礼山、ロットの滝の西方約

三百五十メートル、標高千四百五

十メートル付近、ロットの沢支流

の源流部の、溶岩が露出する急斜

面(地表傾斜の変換点)で土石流は発生した。

崩壊地は幅百メートル、高さ四

十メートルに及び、十三万立方

メートルの土量が崩れ落ちたもの

と推定される。(国立防災科学技術

センター資料は五万立方メートル)

この地点の地層は、別所層(黒

色泥岩)が基盤となり、その上に

二十五―三十メートルの黄色層状

の湖沼堆積物(火山噴火物)が分

布し、さらに大谷安山岩溶岩が厚

く覆っている。

溶岩下部には礫層(凝灰角礫岩)

が堆積している。この層は透水性

が高く、広範な根子岳山復の降雨

を呑み込み、大量の地下水として

流下させている。

湖沼堆積物は、今回の崩壊に

よって新たに発見された地層で、

四阿火山の直下には広く分布して

いるといわれ、軟弱で侵食されや

すく、地表に放置すると風化する。

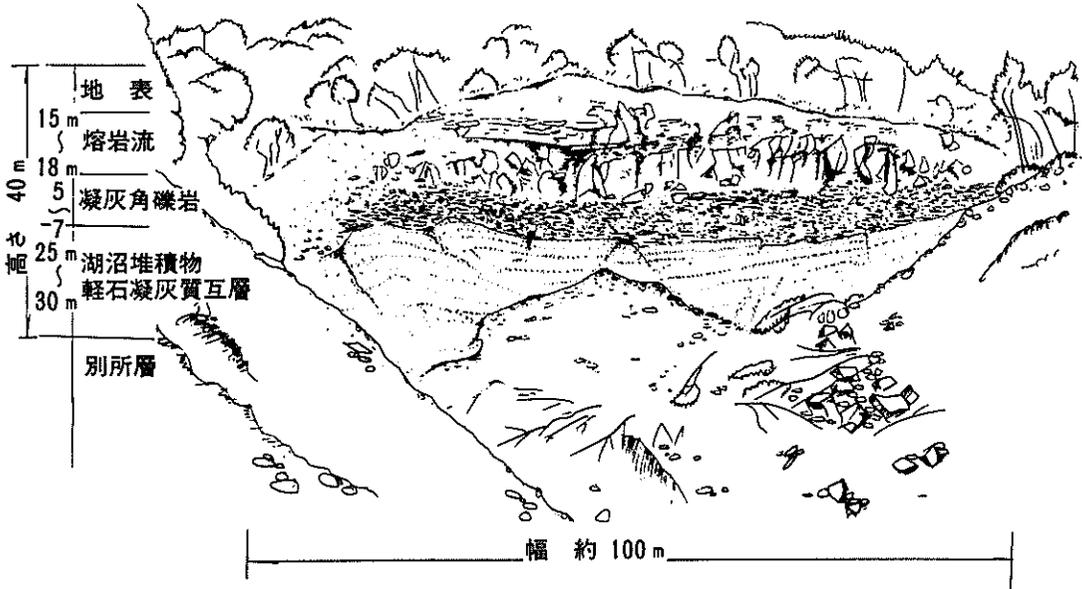
またこの地層に二本の断層があ

り、今回の崩壊はこの断層からは

じまっていると思われる。こ

のような特異な地層と異常な集中

崩壊地地層図



豪雨、浸透水の増大が、土石流発生の要因とされている。

— 土石流の流下形態 —

瀬之脇橋上流約六キロメートル、ロットの沢支流の源流部で発生した土石流は、標高差八百三十メートルを一気に流下し西原地籍を直撃、瀬之脇橋下まで到達している。かりに時速四十キロとしても九分の短時間の流下である。

今回の土石流の発生は、崩壊土砂によって一時的に天然ダムが生じ決壊したという形跡は認められないとされているが、直撃前満水の宇原川が減水したといわれていることから、途中において何らかの状態変化があったと思われる。発生した地点からほぼ同じ幅の四十〜百二十メートル幅で両岸山脚部を削り、溪流の堆積土砂、巨岩を堀り起こし、二十〜四十年になる杉、から松の良林をなぎ倒し、土砂、巨岩、立木を巻き込んで大きなエネルギーを持った土石流に生長した。

土石流は直進性が強く、高さ二十〜三十メートルの小山や段丘をのり越え、屈曲部は四十メートル

も削割され、直径二メートルもある巨岩が打ち上げられている。

災害前は良好な森林に覆われ、せいぜい三〜四メートルの川幅の宇原川が、両岸を削りとられ数十メートルの川幅となり、上下流域が一望できるように変わってしまった。

この自然の猛威は想像を絶するものがある。

樹令百年から二百年のつがの大木がまっ二つに折れ、木片が数十メートルも吹き飛んでいる。

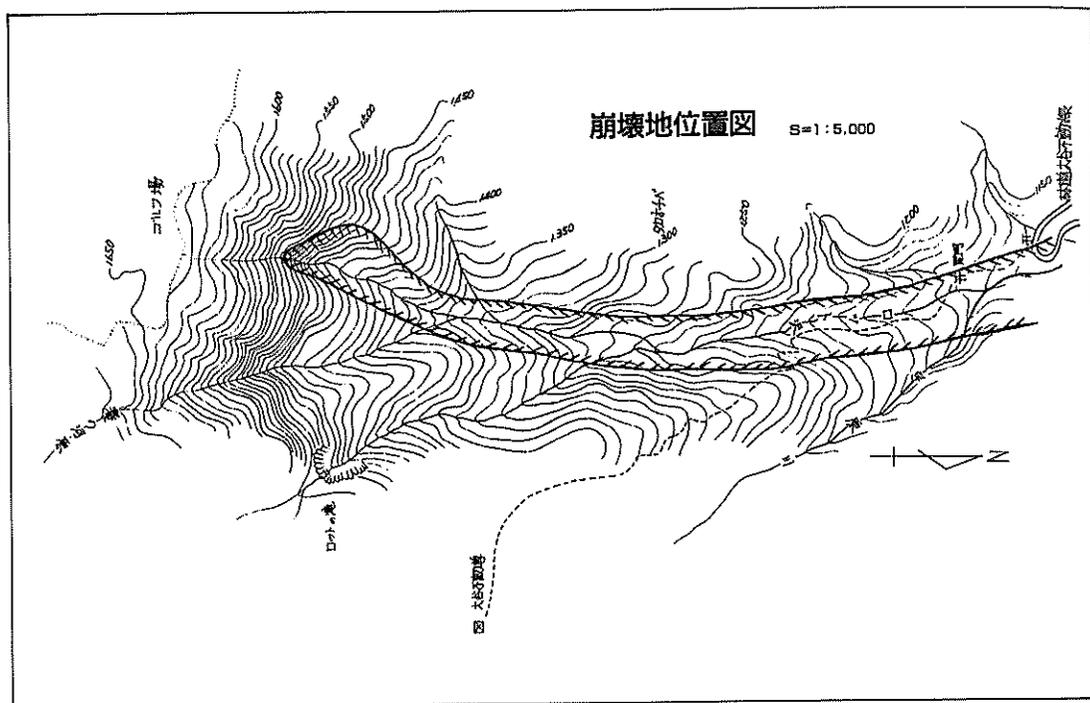
二つあった黒門は粉々に散り、沿道の石仏も多数流失した。

黒門から金山までの川底は基盤が露出し、青色褐色の岩が荒涼とした中でさえる。

金山では太古の侵食跡が寝覚めの床のように露出した。

さいわいにも、石小屋遺跡と山の神は被災を免れた。

白清水には、昭和三十四年の七号台風災害以後建設された一の瀬ダム（高さ八メートル、長さ六十三メートル）があるが、土石流はダム左岸の段丘をのり越えて直進し、厚さ二メートルのダム袖をも



ぎ取り、西原まで押し流している。ダム上流部には溪床の基盤が見られないことから、一定の堆砂能力が計られたといえるが、土石流を食い止めるほどの規模のものではなかった。

一之瀬橋上流の岩床で勾配が緩くなるため、巨岩を含む土石流堆積物の一部を残したが、土石流は林道、一之瀬橋を飲みこみ一気に流下した。

一之瀬橋の残がいは一キロメートル下流で金毘羅に打ち上げられていたが、三ッ倉の橋はどこにも見あたらず、粉々に破砕されたものと思われる。

曲り屋敷付近から川幅が広くなり緩勾配であるため、水勢がやや衰えたのか入の河原、金毘羅付近に巨岩群(径二―三メートルのもの約百個)を集積させたが、これは一部であって、四メートルを越す巨石を含む土石流は西原を直撃、四戸の家屋と八名の人命を奪い、宇原橋、国道宇原橋、瀬之脇橋を流失させた。

築堤工床止め工が整備されていた箇所も全滅、田畑を荒れ河原と

化し、浅間塚、瀬之脇の川沿いの人家を破壊して、土石流は瀬之脇橋下流結川左岸で終結した。

―土石流の発生原因―

今回の土石流は、崩壊がまったく予測されない地点で起こり、この他に宇原川流域に新たな崩壊箇所は見あたらぬ。

未曾有の集中豪雨による沢水の増水、大谷溶岩下層の礫岩層への浸透水の増加、さらに新たに発見された湖沼堆積物と断層など、特異な状況から崩壊が発生し、地表水の増大で土石流に発展、溪床の土砂、岩石、河岸の立木を巻き込んで、巨大な土石流に生長したのと思われる。

いろいろな確率年計算手法で示される確立年降雨は、二百年を超えるものとされているが、軟弱な湖沼堆積物は宇原川上流全域に分布しているといわれていることから、今後万全の対策が必要とされる。

豊丘上原地籍でも規模は小さいが金山沢で土石流が発生、二千立方メートルの土砂が人家のすぐ上まで流下した。



基盤といわれる別所層（黒色泥岩）はこの一帯に分布している



ロット滝の下流は何んの変化もないが、土石が多く堆積していた

このことを考え合わせると、土砂崩れ、土石流の危険はいたるところに存在しているのである。

—その他の被害状況—

1 鮎川

瀬之脇橋下で終結した土石流は洪水を伴っており、この洪水は宇原川沿岸の立木七千方メートルを呑み込んで流下し、この一部が大門橋に突っかかり右岸県道が決壊、中村、新田、関谷部落の河原一帯の田畑を流し、人家を襲った。特に立木が人家に食い込み、大被害となった。

ここでも二名の尊い人命が奪われた。

仁礼地区唯一の木橋「小峽橋」が流失。

枋倉は幸いにして河沿いに被害を受けたにとどまった。

2 仙仁川

根子岳山麓の出水は沢に集まり洪水となって峠の原のペンション村を襲い、自家用車八台を押し流し、水道、水道管を切断した。

県道須坂管平線（現在国道四〇六号線）は、牛首入口から下でいたるところで決壊、水道管、電話



発生地直下のおつめ跡



約2km下流の惨状、三ツ倉沢合流点、左中央に石小屋遺跡、ここに金山第二ダムが建設される

地下ケーブルを切断した。

仙仁下河原、鳥居、片岡の田畑は濁流と土砂に埋没したが、橋梁は無事であった。

3 上入沢

洪水が発生、川沿いの林道仙仁線が全滅した。

4 細尾沢

洪水が発生、から沢で土石が流出、県道をふさぐ。

5 たるの沢

堆積礫岩が崩壊し、たるの沢水源を決壊させた。

6 小屋口沢

四本の治山ダムが満杯になったが、被害なし。

7 小松沢

小規模の土石流が発生、林道を決壊させ、県道を切断した。

8 めが沢

洪水が発生、道路を決壊させた。

追記

上流部に土砂崩壊が数箇所発生している。警戒が必要と考える。

(筆責 坪井今朝生)

災害復旧記念碑建立 黒門も再建される

土石流災害の惨事を決して忘れないし、あの悲しみを再びくり返してはならない。地域の人々の願いを込めた記念碑が、西原の被災地に建立された。

表の刻字は、吉村県知事の書によるものである。裏に大理石に刻まれた碑文がはめ込まれ、15号台風土石流災害の被災状況と復旧の経過、10名の犠牲者への哀悼の意が記されている。

昭和58年11月25日、この碑の除幕式と仁礼地区における災害復旧工事の完成を記念する行事が、町の主催で行われた。

また大谷不動尊の黒門が、寄付者多数の協力を得て、三ヶ村協議会の手により再建された。



被災当時、土石流のため流れ集まった巨石を使用して建てられた「災害復旧記念碑」。

再建された黒門。御影石製で、高さ四・一メートル、幅四・六メートル、付近には造園も施された。



碑文

昭和五十六年八月二十三日未明、台風十五号の襲来と共に山岳地帯の集中豪雨により仁礼山ロットの沢上流附近の土砂崩壊が土石流となり宇原川沿岸の巨岩立木悉く崩壊し泥濘濁流となり、恰も小山崎動、暗雲を伴い一氣に下流を襲い人家人命諸共一瞬にして呑み込み十名の尊い生命を奪い去る。加えて仙仁川と大濁流氾濫、合せて鮎川沿岸を荒まると化し、家屋流失四千戸、損壊十七戸、田畑の流失冠水十一町歩余、山林の流失三十町歩余の大きな被害を受け、正に奇蹟に絶する大惨事となる。これこそ、凄絶無惨極まりない痛恨事にして虚空睨見憤怒の思いの上もなく、只々自然の猛威の女子童の恐ろしさは全く言の外というべきである。仁礼地域に於て、このような事は未曾有の事であり、かつてない大災害を被つたのである。

この復旧への努力はめまぐるしいものがあつた。この間全国から多くの物心両面の援助を頂いた。受け取らぬが市の援助のもとに九十億円の巨費を投じて復旧工事に着手され三カ年の年月を費して以前に勝る、河川或は荒地の復旧事業が完了したのである。

ここに本災害に於て特に銘記すべきことは、殉難犠牲者となりれた尊い御霊の安らかに永眠されんことを念じ慰霊すると共に、再びかかる災害のなき事を念願し長く後世に伝承する意をもつて災害現場にこの碑と建立し永遠に記念するものである。

昭和五十八年十一月

大理石に刻まれた「碑文」

あとがき

仁礼町を襲った空前の土石流災害を記録に残し、自然がもたらした厳しい教訓として後世に伝えたい。何とか骨を折ってみようではないか。

被災後二ヵ月ほどたって、町の中でこんな気運が具体化し、「仁礼町災害の記録編集委員会」が組織されました。

当時、区長の篠塚久吾さんはじめ役員の方々の苦労は大変なもので、災害の犠牲となられた方々の悲しみを負い、一日も早い復旧の促進に奔走しながら、なお記録誌の発刊に取り組みました。

編集委員には仁礼分館役員、それに分館活動の経験者があたり、以後発刊に至るまで、このメンバーで対処してきました。

なにせ素人の集まり、右も左もわからぬままのスタートでした。

ときには激論を交わしながら、とにかく被災した地域で記録誌を作る、その意義が伝わるもののように心がけ、町のみなさんに協力をお願いいたしました。

ここに、ようやく発刊のはこびとなりました。

手記をお寄せくださったみなさんには、心からお礼を申し上げます。特に肉親を土石流に奪われた深い悲しみをのりこえて、ペンをとられた篠塚みどりさん、田中成造さんには、ただただ頭が下がりました。

お寄せいただいたみなさんには、急ぎお書きいただいたにもかかわらず、発刊が大幅に遅れ、申しわけなく存じます。

また被災当時の貴重な写真や関係資料をご提供くださった、地域のみなさん、須坂建設事務所、上高井地方事務所、須坂市役所に対しても、心からお礼申し上げます。さらにヒタキ印刷所には、われわれの不慣れな点をお手配りいただき感謝申し上げます。

いま、宇原川をはじめとする災害復旧事業はほぼ完成し、本日災害復旧記念碑の除幕式と、復旧完成行事が行われます。

この諸行事に合わせて、本誌を発刊することができましたことは、胸深く災害のいたみを感じつつも、よろこびとするところです。

本書の写真の構成と図の作成は坪井今朝生が、総体の編集は山岸熙幸が担当しました。

仁礼町災害の記録編集委員会

写真提供者

栃倉	井浦	秀友
浅間塚	駒津	賢治
仙仁	田中	義一
関谷	坪井今朝生	
瀬之脇	中島	英
栃倉	中山	広義
中村	湯本	憲二
上高井地方事務所	林務課	
須坂市役所	企画課	
〃	建設課	
〃	農林課	
〃	農業土木課	
〃	水道部	

土石流急襲

—十五号名風—

忘れ得ぬ災害の記録—

発行 昭和五十八年十一月二十五日

編集者 仁礼町災害の記録 編集委員会

発行所 須坂市仁礼町

印刷所 ヒタキ印刷株式会社

仁礼町災害の記録 編集委員会

発行責任者	中村 介夫
編集責任者	中山幸治郎
編集事務局	湯本 勇治
〃	駒津 正勝
編集委員	山岸 熙幸
〃	坪井今朝生
〃	篠塚 治
〃	山岸 邦夫
〃	中島 英
〃	駒津 賢治
〃	田中今朝男
〃	大峽 瑞穂
〃	卯之原昌敏

7時間に97ミリの豪雨

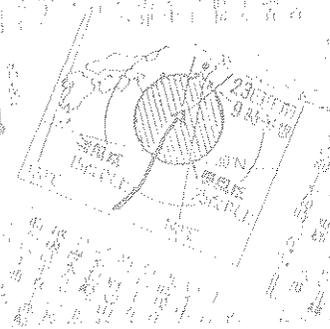
悪条件重なった須坂近辺

須坂近辺は、7時間以上にわたって、97ミリの豪雨が降った。悪条件が重なった。須坂近辺は、7時間以上にわたって、97ミリの豪雨が降った。悪条件が重なった。

ゴルフ場影響、説

復川、疑問点残

押し寄せる土石流



科学

大石の中、必死の

百合子さん密葬

同級生らすすりむき

悪夢今も

涙の川に礼に重く暗く



花を持って 百合子さんの墓前へ

不明物の 助産婦航

原田経典助産師氏、今年



不明物の助産婦航

どかな集落一瞬暗

どかな集落一瞬暗。この集落は、7時間以上にわたって、97ミリの豪雨が降った。悪条件が重なった。

台風15号の一部で被災。右側とは別の論議で、被災した地域は、7時間以上にわたって、97ミリの豪雨が降った。悪条件が重なった。

砂防ダム、土石流止め

怖き山、危龍

「信濃毎日新聞」9/10 (93-NV480)